

本書の著者は、近世の名儒として、最も名高き貝原益軒先生なり、先生は筑前福岡の人、寛永七年に生れ、正徳四年、八十五歳にて没す、當時山崎闇齋、松永尺五、木下順庵等、所謂碩學輩出の間に在りて、一方に覇を爲したる鴻儒たりしなり、而して先生は、彼の徒らに古を説きて今を知らざるが如き、俗儒の流にあらず、即ち古に鑑み、今に及ぼし、自ら忠孝仁義の道を以て能く社會の木鐸たりしなり。

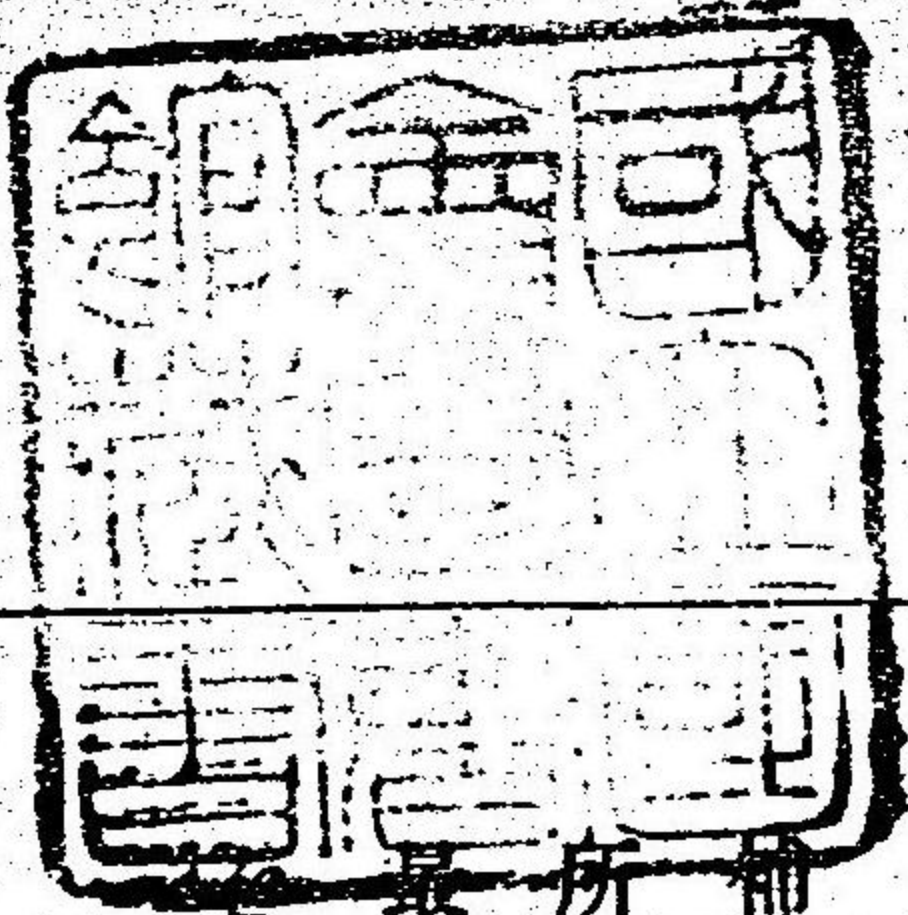
本書八卷は、寶永五年、正に先生が七十九の高齡にして、もてせられたる書なり、説く所、叮嚀堅實、千古の下、猶よく世道人心を維持するに足るものあり、而も文章辭句の頗る平易なる、先

159ka183y2

訓 俗 和 大

大和俗訓自序

天地のこわり人の道は、古の聖人之を經典にしるし給ひ、其明かなること日月の天にかゝれるが如くなれば、天下の目ある者は見ざるこゝなし。古の人、天もし仲尼を生せずんば、萬世長夜の如くならんといへりしもうべなり。後世の諸賢又よく其志をつぎ其事を述べ經義を傳へて來裔をさとし給ふ。かれこれ誠に天下後世の大なる幸なるべし。よくよまん人は其の理をしられんこと、たとへば日中に黑白をわかつが如くならん。豈世こそりてこれを尊び身を終るまで誦せざるべけんや。恨むらくは、わが日の本の俗のならひ、文字にかたくなにて、さばかり聰明の人も多くは聖學に疎し。又窮郷の晩進は句讀を習ひうべき師友に乏しく、高貴の家の子弟は、たはふれ遊びをたのしみ、安逸にならひて、學問なごに身を苦しめん事いと遠けれど、稼穡の艱難をすべて知らざるのみならず、五帝三王をも是れ何物ぞと思へる疑を免がれがたし。こゝを以てわが國聖學の寥々たること古よりすでに久し。恨みても猶うらめしきかな。然れども今まさに聖明の御世にあたりぬれば、人文やうやく開けて、聖學の世に明になりなんことたのもし。今の世の俗をささんため、唐の文字を



生が自ら序して、其の意のある所を明かにせり、前に婦女子と雖も、能く讀みて會得するを得べし。
 今本書を翻刻するに方りて、更に假字遺を一定し、振假字を補ひ、句讀を正し、又漢音の熟辭にして、假字もて記されたるを、所謂雅言とには、夫々漢字を當てたる等、要するに今日の人に最も改み易からしめん方針を取りて、校訂し、敢て原文の語法を改竄せず。(辭村生)



337060

作りて聖の道を解かん事はわが輩の力になしうべからず。況んや、唐のよろしくの先生の説、すでに明に備はれるをや。漢字をしれる人は、よんでしるべければ、今更贅言を用ゐるべからず。夫れ聖人の道の、至りて高大にして、ふかくたくまじりたるは、此國の女文字を以て其のかたはしをも學びて説かんことたはけなくて、管にて天をうかがひ、蠶にて海をはかるが如くなれば、つたなき筆にてしるさんこと、飛鳥川の深き淵の變じて浅き瀬となり行きなん憂に猶まされりといへども、高きに登るには必ずまづ麓よりし、遠きにゆくには必ず近きよりはじむる理あれば、世の不幸にして漢字をしらざる人の爲に、いさゝか昔聞ける所のことよりはりを、今の俗語を以て書きあつめて、八卷とし、名づけて大和俗訓といふ。世の中の夫婦の愚なるもあづかりしらしめ、兒女のいさげなくて菽麥を辨へざるをもささむことをこひねがふのみ。わが材器もごより拙ければ、身にも應せぬ道學を以て名を立てん事を好まず。此の故に此書に限らず、いにし年よりかゝる鄙俚なる唐大和の小文字を多くつくり、瑣細なる事をも何くれとしるせしこと、世の道學の名を立つる君子のわらひ草とならんことをも思ひかけぬれど、わが志したるすぢもあれば、世の誹りをもあながち恐るべきにあらず。つらく思ふに、わが輩天地の窮りなき御恵みを被りて人と生れたる幸

は、愚なる身にては其大なる徳の萬一を幾世を経とも報い奉らんこと難かるべし。せめてかゝる浅はかなる事をつくりて、もしくは世の中の無學なる人小兒の輩賤男賤女をさとして、民用の小補にもなりなば、わが此世に生れ、食に飽き衣を暖かに着、居り所をやすくして、天地の寶を多く費せる素餐の罪を、すこし免る便ともなりぬべし。こゝを以て人の誹りをうれひざるなるべし。今われ、犬馬の年既に八十路にせまり、なす事なくて此世くれ行くなべに、曆の軸あらはれたる如くなれば、やがて草木と同じく、はかなく朽ち果てなんど恨めしくて、わが身の才の拙きを忘れ、妄りにつとめて筆をたこし侍る。老らくの身は、心も目もたゞしくしければ、いかなる僻事を書きけんも後憂たし。世の中にわれと志しを同じくする人もありて、此の書のあやまり多くして、ひがくしきことをよく改めつくりて、世をさとし給はば、誠にわが願はしき、本意にかなへるなるべし。

寶永五年立冬日

益軒 貝原篤信書

時年七十有九

目 次

爲 學 上	一
爲 學 下	三
心 術 上	五
心 術 下	七
衣 服	三三
言 語	三四
躬 行 上	三〇
躬 行 下	三五
應 接	三八〇

大 和 俗 訓

貝 原 益 軒 著

爲 學 上

天地は萬物の父母、人は萬物の靈なりと、尙書に聖人とき給へり。言ふころは、
 天地は萬物を生み給ふ根本にして、大父母なり。人は天地の正氣をうけて生る、故、
 萬物に優れて、其心明かにして、五常の性を享け、天地の心を以て心として、萬物の
 内にて、其品いと尊とければ、萬物の靈とは宣へるなるべし。靈とは、心に明かなる
 魂あるを云ふ。天地は萬物を生み養ひ給ふ中にも、人を厚く感み給ふこと、鳥獸草
 木に異なり。こゝを以て、萬物のうちにて、専ら、人を以て天地の子とせり。されば
 人は天を父とし、地を母として、限りなき天地の大恩を受けたり。故に、常に天地に
 仕へ奉るを以て、人の道とす。天地に仕へ奉る道とは如何ぞや。凡そ、人は、天

地の萬物を生み育て給ふ御恵みの心を以て心とす。此の心を名づけて、仁と云ふ。仁は、人の心に天より生れつきたる本性なり。仁の理は、人は恵み物を感むを徳とす。此の仁の徳を保ち失はずして、天地の生み給へる人倫を厚く愛し、次に、鳥獸草木を以て、天地に仕へ奉る道とす。是れ則ち、人の道とする所にして、仁なり。仁の理を分てば仁義となり。仁義を分てば禮智信となる。五の性をすべて五常といふ。例へば、一年を分てば陰陽となり、又分てば、春夏秋冬四時となるが如し。仁は五常を總て、其の總名なり。五常は、人に生れつきたる理なれば、五性といふ。性は、人の心に生れつきたる理をいふ。此の五性は、古今、天下の人高き卑しきも、賢し愚なるも、押なべて天地より生れつきて、萬世迄も相變ることなき故に、五常といふ常とは變らざるなり。中につきて、仁は感みの心なり。是を以て、四徳を兼ねたり。義は、宜しきなり。行ふ所各其物に相應するを云ふ。禮は敬まふ心、慎しみて侮らざるを云ふ。智は明かに悟る心、道理に通するなり。仁義禮も、智なければ行ふ術

をしらす。義禮智は皆、仁より出で、仁をたすくる理なり。信は、誠なり。仁義禮智の心、信にして偽りなきを云ふ。誠なければ、仁義禮智にあらず。凡て、此五常の性に隨ひて、人倫に對して情け深く、厚く行ふを人の道とす。人倫とは、君臣父子夫婦長幼朋友の五なり。是を五倫といふ。又、五品とも云ふ。天下に人多しといへど、その品を分てば、此五品の外には出でず。五倫に交はる道は、君は臣を感れみ、臣は君に忠を盡すべし。父は子を慈しみ、子は親に孝を盡すべし。夫は婦に禮義あり、婦は夫を敬ひて、和順なるべし。長者は幼を恵み、幼きは長者を敬ふべし。兄弟も、長幼の内にあり。朋友は互に誠ありて、たのもしく表裏なかるべし。此五倫の道は仁義禮智の五常の性に隨ひて、人倫に交る時に、行ひ出せるなり。わが本性の外に求むる道にあらず。

人となるものは、天地を以て大父母とする故、父母の恩をうくるが如く、窮りなき天地の恩を受けたり。天地の恵みにて生れたる恩のみならず、身を終るまで、天地の養ひを受くること例へば、人の身の、父母より生れて後も、父母の養ひによりて、人

となるが如し。こゝを以て、此の世に生れては、常に天地に仕へ奉り、如何にもして
 天地の恩を報いんことを思ふべし。是れ天地に仕ふる孝なり。人たる者は、常に、是
 を心にかけて、忘る可からず。天地に仕へ奉る道は、別にあらず。天地の御心に隨ふ
 を以て道とす。天地の御心に隨ふとは、我に天地より生れつきたる仁愛の徳を失はず
 して、天地の生める所の人倫を厚く感み敬ふをいふ。是れ則ち人の行ふべき所にし
 て、人の道なり、人の道とする所、さらに此の外にある可からず。夫れ、人は天地の
 惠によりて生れ、天地の心をうけて心とし、天地の内に住み、天地の養ひを受けたり
 かくの如く、極りなき大恩をうけたれども、凡人は知らず。所謂百姓は日々に用ひ
 てしらざるなり。然るに、天地に仕へ奉らずして、人欲に隨ひ、天理に隨はざるは、
 天地の大恩を蒙りて、天地に背く故、天地の子として、大不孝なり。人の子として、
 其の親を愛せずして、他人を愛し、父母に背きて不孝を行ふが如し。不孝の子は、其
 の身を天地の内に立て難し。況や、天地の子として、天地に背き不孝なるをや。幸
 にして災なしと雖も、天地に背ける罪恐るべし。天地を尊び仕へ奉るべきこと、前

にも既にいへれど、返す返すよく人に告げん爲に、同じことを幾度もくりかへしてい
 ふなり。猶此後にもいふべし。
 凡そ、天は人の始めなり。父母は人の本なり。人は天地を以て大父母とし、父母を
 以て小天地とす。天地父母其恩等し。故に、天地に仕へて仁を行ふこと、父母に仕へ
 て孝を行ふが如くすべし。こゝを以て禮經にも、仁人の天に仕ふるは、親に仕ふるが
 如くし、疎なるべからず。親につかふること、天につかふるが如くすべし。畏れ
 慎むべしといへり。疎なるは、愛なきなり。畏れざるは、敬なきなり。天地に仕へ
 奉るも、父母に仕へまつるも、同じく仁敬を致して、疎ならず、悔るべからず。天
 地によく仕ふるは仁人なり、仁心を保つ人なり。父母によく仕ふるは孝子なり、孝養
 をよく力むる子なり。天地に仕ふるの道同じ。しかれば、天地に仕へ奉るは、人間の
 大事にて、暫しも忘るべからず。常人は、近き父母に仕ふる道をだにしらずして、心
 を用るす。況んや、天地は、窮りなき大恩あることを辨へずして、天地に仕へ奉るは
 身に與らざること、思へり。夫れ、天地の恩は、父母の恩に等し。こゝを以て、身を

終るまで、常に、慎みて仕へ奉り、力を盡すべきこと、是れ、人の職分にて、至りて
重き大事なり。人たる者、此理をしらすんばあるべからず。

天地の中に萬物あり。萬物の内、人ばかり尊き物なし。かるがゆるるに、萬物の靈といふ。其の靈たる故に、心に五性あり、身に五倫あり、目に五色をわから、口に五味を覺ゆ、耳に五音を辨へ、鼻に五臭をしる。鳥獸には此數多の事、一もなし。人となりて、かゝる尊き身を得たること、まことに、天地の間の大なる幸を得たるなりしかるに、人となれる道をしらす、禽獸に近くして、空しく此の世を過し、人と生れたる身を徒らになすこと、悔からずや。

顔子推は、人身得がたし、空しく過ること勿れといへり。萬物に勝れて、人とかく生れたるは、誠に幸の至りなれば、人身得がたしといへり。人たる者、もし再び此の世に生れば、例ひ、此のたび怠りて、人の道をしらすとも、重ねて又、人と生れ來ん時を待むべきこともありなん。此身再び人となることを得ざれば、道を學び、此身をよく修め、人となりて終るべし、空しく此世を過すべからず。もし、人の道をしらす

空しく此世を過しなば、人と生れたるかひなかるべし。惜むべきかな。

萬物の内、人と生るゝこと甚だ難し。如何となれば、鳥獸蟲魚は年々に多く生るゝこと其數限りなし。人の數は、鳥獸蟲魚の萬が一もなくして、極めて少し。其上、人は萬物にすぐれて、天地の恵みをうくることあつし。かく貴き人身なれば、萬物の内、人と生るゝこと、極めて難きことなるを、幸に人と生れたる我が身を持ちながら、學ばずして、天地の道に背き、人の道をしらすして行はず、人とかく生れぬる樂しみを忘れ、徒らに、一生をむなしく過して、鳥獸と同じく活き、身死して後は、よき名を残すことなく、草木と同じく朽ちなんこと、豈うらみ多きことならずや。

人と生るゝは、極めて難きことなれば、偶に、得がたき人の身を得たることを樂しみて、忘るべからず。又、人と生れて、人の道をしらすで、むなしく此の世を過ぎなんこと、憂ふべし。此の樂しきと憂との二を、身を終るまで忘るべからず。

地の道にしたがひて、人の道を教へ給へる、萬世の師なり。後代に残したき給ふ四書五經の教へは、萬世の鑑なり。其道理明かなること、日月の天にかゝれるが如く、天下ひろしといへども照さざる所なし。よくよまん人は、天下の道理をしらんこと、白日に黑白をわかつかつが如くなるへし。豈是を學ばざるべけんや。しかるに、人となる者人倫の道は、天性に生れつきたれども、其道に志しなくして、食に飽き、衣を暖かに着、居所を安くしたるまでにて、聖人の教へを學ばざれば、人の道なくして、鳥獸に近し。かくの如くなれば、人と生れたるかひなし。萬物の靈とすべからず。此故に聖人は是をうれひ、賢臣を以て、萬民の師として、人倫の道を教へさせ給ふ。是れ、人となるものは、必ず道を學ばずんば有るべからざればなり。愚れもへらく、人と生れて學ばざれば、生れざると同じ。學んでも、道をしらざれば、學ばざると同じ。道をしりても、行はざれば知らざるに同じ。其故如何となれば、人と生れて學ばざれば、人の道をしらずして、人と生れたるかひなし。是れ、人と生れて學ばざれば、生れざると同じきなり。學ぶは、道をしらんが爲なり。もし、學びやう悪くして道をしらず

んば、學ばざると同じきなり。又、道をしるは、行はんが爲なり。學んで道をしりても、行はざれば、しらざるに同じ、故に、人と生れては、必ず、學ばずんばあるべからず。學ぶ者は、必ず、道をしらすんばあるべからず。道を知れば、必ず、行はずんばあるべからず。道をしれば、必ず、よく行ふ。行はざるは、未だ道をしらざるなり。道をしらんと思は、聖人の教へを仰ぎ、賢人の説を階梯として、其法に隨ふべし。是れ、道をしるべき學問の筋なり。道に志しなく、師傳惡しく、學術の筋ちがへば、一生精力を用ひ、勉め學ぶとも、驗なかる可し。故に道を學ばんと思は、初學より道に深く志しをたて、明師に従ひ、良友に交はり、學術を擇ぶを主とすべし。學術とは、學びやうの筋を云ふ。學びのすぢ惡しければ、一生つとめても、道をしらず。一たび迷ひぬれば、よき道に立ち歸りがたし。故に、まづ、學術を擇ぶべし。學問の道は、極めて廣大高妙にして、深奥なり。しかれども、其近き所は、孝弟忠信の日用常行にあり。故に、いかなる愚なる者も、此道を學び易く、知り易く、行ひやすし。高遠にして、怪しく異なる道にあらず。

古の聖人すら、猶師に従ひて學び給ふ。況んや、今時の凡人、學ばずしては道をし
りがたし。小藝だにも、師なく、習ひなくしては成しがたし。況んや、人の道は即ち
天地の道にて、極めて大なるをや。學んでも、學びやう悪しければ、道をしらす。學
ばずして道を得んことは、萬々此理なし。

學問は、まづ、志しを立つるを以て本とす。志しとは、心の行く所なり。道を
知り行ひて、君子に至らんと思ふ心常に怠りなく、念々已まざるを、志しを立つる
と云ふ。志したざれば、學ぶこと成就せず。故に、古人も志しある者は、其事
遂に成るといひ、又、志したつは學の半ばなりといへり。例へば、弓射る者の、的
に志し、道ゆく者の、宿りに志すが如し。萬の事、まづ、本を力むべし。志し
を立つるは、勇猛なるべし、柔弱にして怠るべからず。怠れば、驗なくして挫ゆかす。
道を求むるに、切なる志しはたとへば飢ゑて食を求め、渴きて湯水を求むるが如く
なるべし。僅に悠々として怠れば、志し廢る。只此道に心を一筋にすべし。外物に
心を奪はるべからず。物を翫べば志しを失ふ、と尙書にもいへり。言ふ心は、耳

目口體に好む所の外欲に耽り、外物を好み、或は、無益の雜藝を一向にすき好みて、心
を傾くるの類は、皆是れ、物を翫ふなり。かくの如く外物に心を移せば、道を學び
君子となる志しを失ふ。萬の外物の翫び、好み、皆、志しを伐ふものなり。程
子曰く、專一ならざれば、直ちに遂ぐることも能はず。言ふ意は一筋になさければ、行
ひ遂ぐることも成りがたし。專一とは例へば猫の鼠を狙ふがごとく、鶏の卵を温むる
がごとく、他念なかるべし。心あなたごなたに分るれば、學問道義の志しは衰へす
たる。文藝武藝は、誠に、士たる者の習ふべきことなれば、勉め學ぶべし。されども
藝は未なり、道義の學は本なり。藝を一向このめば、必ず學の志しを奪はれて失ふ
ものなり。況んや、私欲の慰み好みに任するをや。戒むべし。志しを立つれば、例
へば、西國の人の東へゆかんと思ひ立ちて、日々にゆくに、其間、晝夜東へ逝かんと
思ふ心は、念々つねに已まらず。是れ東へゆく志したつなり。かくの如くなれば、つ
ひに志す所に行き届かずといふことなし。道に志すも、亦かくの如くなるべし。
凡そ、學をするには、教へをうくる基を立て、又、禁戒を守るべし。基とは、家を

つくる土臺なり。學問する人は、謙を以て基とす。謙とは、へりくだるなり。我が身に誇らず、人に高ぶらずして、心を空しくし、人に問ふことを好み、我が才を恃まず、師友を敬ひ、我が身に才力有りても、なきが如くし、教へをよく聴き、人の諫めを悦び、すでにしれることも、しらざるが如くにして、我が知を先だてず、すでによく行ふことも、未だ行はざるが如く思ひ、人を責めずして、我が身を責むるを、へりくだると云ふ。是れ學問を力め、教へをうくる基なり。例へば、家を作るに、先づ基を立つるが如し。此基あれば、日々に善言をきき、我が過をしりて、知明かになり、善日々に長ず、學の進むときはまりなし。又、禁戒を守るべし。禁戒とは、戒めて行はざるを云ふ。學問する人は、まづ、矜の字を禁戒とす。矜は、ほこるとよむ。ほこるとは、我が身に自慢して、人にへりくだらざるを云ふ。未だ知らざるをすでに、知れりとし、よからざるを、よしとす。専ら我が知を用ひて、人にとはす、人の諫めを用ひず、身を責めずして、人を責む。かくの如くなれば、悪日々に長ず。初學の人は先づ、此の禁戒を守り、又、此基を立つべし。然らざれば、學んでも、益なきのみに

あらず、却つて害あり。是れ、書をよみ學問する人が、第一心得べき事なり。人の性は、本善なれども、凡そ、人は氣質を人欲に妨げられて善を失ふ。氣質とは生れつきを云ふ。人欲とは、人の身の耳目口體に好むことの、よき程に過ぐるを云ふ。生れつき悪しければ、人欲行はれ易し。されば、すべて人たる者は、古の聖の教へを學んで、人となれる道をしり、氣質のあしき癖に改め、人欲の妨げを去りて、本性の善に返るべし。是れ、學問の道なり。故に、古の聖人、教へを立て、天下の人に學ばしめ給ふは、人の性、皆、善なる故、學んで善にかへる道あればなり。人皆良知あり。教へされども、幼より親を愛し、少し長じては、兄を敬ふ。人皆仁心あり。孺子の井に落ちるを見ては、感れむ。人皆義理あり。節に當つては愚なる下部も、命をします。乞食にも食を蹴散らして與ふればくはず。是れ、人の性の善なる證なり。聖人の教へは、天下の人の生れつかざることを、しらしめ行はしめんとはあらず、心生れつかざることは教へてもなしがたし。其人にもとより生れつきたる善心あるを本として、導き開きて、是をわしひろめさせんとなり。天下の人、其性

皆善なり。其善なるに本づきて、その生れつきたる善を行へと導き給へるなり。故に其教へ行はれ易し。たとへば、山人が斧の柄をさるに、我が手に持ちたる斧の柄を以て、新しく作らんとする斧の柄になるべき木の枝に、押し並べ比ぶれば、大小長短少しも違はず、まちかき手本になること、是に過ぎたる事なし。しかれども、我が手にもてる斧と、新しく斧に作らんとする木の枝とは、別の物なれば、猶以て遠しとす。聖人の教へは、然らず。即ち、其人に生れつきたる善心を本として、是を育て養ふ道なれば、教へをつくりいだし、別の道をもち來りて、其人に教ふるにはあらず。然れば、天下の人たしなべて、此道を以て誘ひ導かば、凡そ、血氣ある人類は、唐も日本も、西戎南蠻も、此道を尊信して、従はずといふことなかるべし。

學問に筋多し。訓詁の學あり。記誦の學あり。詞章の學あり。儒者の學あり。訓詁の學とは、聖人の書の文義を精しく識ることを力むるを云ふ。記誦の學とは、廣く古今の書をよみ、故事事迹を覺ゆるを云ふ。詞章の學とは詩文を作ること學ぶを云ふ。儒者の學は、天地人の事に通じて、身を修め人を治むる道を知るを云ふ。學問をせば

儒者の學をすべし。訓詁の學は、四書六經等の文義に通じても、義理をしらざれば、用がたし。況んや、記誦詞章の學は、いよく道に遠し。儒者の學とすべからず。儒者の學に專一ならば訓詁記誦詞章の習も、略其内に兼ねてよし。此外に、又小説の學あり。是は經史文章の學を好まず、唯、もろくの雑細の事、又、怪しき事などをしるせる書を受て、多く見たば、樂しむとする學なり。又、小説の學は、訓詁詞章記誦などにならべて、學術の條理を立つるには足らず。然れども末世には又此學あり學術の最下品なり。

或人の曰く、儒者の學は、只、人道を知らば可ならん、天地の道をしるに及ぶべからずと。予答へて曰く、天地の道は、人道の本なり。天地の道をしらざれば、道理の依つて出づる所の根本を知らず。根本をしらざれば、天理の人に備はり、人の天地に受けたる、天人合一の筋目をしらすして、人道明かならず。故に、まづ、日用人倫の道を學んで後、天地の道を學ぶべし。聖人の易を學び給ふも、此故ならずや。されども、天地の道は、猶ほ容易く知りがたし。

志しを立つることは、大にして高くすべし。小にして低ければ、小成に安んじて成就しがたし。天下第一等の人とならんと、平生志すべし。世俗と同じく、卑しく低くすべからず。かく志しをたて、日々月々に、力め行は、久しくして其功つもありて、必ず、人に勝るべし。上を學べば中に到り、中を學べば下に到る。下を學べば功を成さず。又、心は小にして低くすべし。人にへりくだり、日用常行の低き足下より行ふべし。心大なれば、驕りて謹みなく、細行を力めず。高ければ、人にたかぶりて、謙徳を失ふ。

學問の法は、知行の二を要す。此の二を力むるを、致知力行とす。致知とは、知ることを極むるなり。力行とは、行ふことを力むるなり。道をしること明かならざれば行はれず。たとへば、目なきもの、足健全なれど、行くべき道をしらず、行きがたきが如し。行ふこと鋭ならざれば、知りても用なし。たとへば、目明かなりといへども、足立たざれば、ゆくこと叶はざるが如し。知と行とは、目に見て足にてゆくが如し。目くらければ、行くべき道見えず。足立たざれば、行くことかなはず。目足とも

に備はらざれば、道をゆきがたきが如し。知を先とし、行ひを後とす。萬のこと先知らざれば行ひ難し。故に前後を云へば、知るを先とす。知るを行はん爲なり。知つても行はざれば用なし。故に輕重をいへば、行ふを重しとす。知ると行ふとの二は、一を缺くべからざることを、鳥の兩翼の如く、車の兩輪の如し。學問は、知と行と並び進むをよしとす。並び進むとは、知れることは即ち必ず行ふを云ふ。少しの前後はあれど先だち後れず、一度につれたちてゆくをば並び進むといふ。しれるばかりにて行はざるは、並び進むにあらず。

知行の二の工夫を、細に分てば五あり。中庸に曰く博く學び、審に問ひ、慎んで思ひ、明かに辨へ、篤く行ふ。是れ、道をしりて行ふの工夫にして、學問の法なり。博く學ぶの道は、見ると聞くとの二を力む。聖賢の書を読み、人に道を聞きて、古今を考へて義理を求むるなり。人倫の道は、載せて聖賢の書に在り。よく讀まん人は白日に黑白を分つが如くなるべし。天下の道理は、きはまりなし。其道理をしらざれば、行ふべき術をしらず、誤り多し。道理は、わが一心に具はり、其用は、萬物の上にあ

るなれば先づ、わが一心の道理をきはめ、次には、萬事につきて、ひろき道理を求め、わが心中に自得すべし。是れ、博く學ぶなり。博く學ぶの道多けれど、書をよむほど益あるはなし。古人も、人の智慧を増すは、書に如くはなしといへり。されど、文字をのみ好みて、義理を求めざるは、博く學ぶにはあらず。

審に問ふとは、すでに學べることの、わが心に疑はしきことを、明師良友に近づきて、審に問うて其理を明かにし、疑ひを解くべし。

慎んで思ふとは、すでに學び問ひたることの、疑はしきことは、心を静にし慎んで思ひて、よく合點すべし。學び問ひても、よく合點せざれば、わが物にならず。故に、わが心に道理を求めて、其理を會得すべし。是れ能く思案して道理に通ずるなり、慎んで思ふにあらざれば、道理に通じがたし。學問は、自得を尊ぶ。自得とは、慎んでよく思ひて、心中に道理を合點して、わが物にし得たるなり。

明かに辨ふとは、すでに慎んで思案して、猶、善惡の紛らはしきことあらば、明かに其是非をきはめて、善惡をわかつを云ふ。以上の四は、皆、知の工夫にして、道を明かにするなり。

篤く行ふとは、すでに學び、問ひ思ひ辨へて、其道理をしらば、即ち吾が身に其しるる道理を篤く行ふべし。行ふこと篤からざれば、道たちがたし。篤く行ふの道は、言を忠信にして、偽りなく、行ひを慎みて、過ちをすくなくす。人の身の業多けれど、言と行との二には出です。故に、言を誠にし、行を慎めば、身修まる。又、心に起る處の用七あり。七情と云ふ。喜怒哀樂愛惡慾なり。人の身の業は、此七より起る。是を慎みて、過不及なくして、道理にかなふべし。中につきて、七情の内、怒りと慾との二、尤も我が心を害し。身を伐ひ、人を害ふものなる故に、いかりを懲し止め、慾を懲ぎ去りて、其はじめて起る處の萌しにかつべし。又、善にうつりて、我が善より猶よき事あらば、己が善を棄て、優れる方にしたがふべし。身に過ちあらば、早く改むべし。我が身に執着して、改むるに憚るべからず。又人に對して行ふに、人われに隨はざる事あらば、人を責めずして、我が身を省りみ尤むべし。是れ皆、篤く行ふ道なり。學び問ふにあらざれば、道明かならず。思ひ辨ふるにあらざれば、道をわが

心に得がたし。篤く行ふにあらざれば、知りても實なし。右、五のものは、中庸にし
 るせる所、學の工夫なり。程子も此のもの、其一を缺けば學にあらざといへり。
 常に、我が身を省み、又人の諫めをききて、我が不善なるを、我が過ちをしりて、
 善にうつり、過ちを改むべし。知ありて忠直にして、我が過ちを正す良友を求めて、
 交り親みて、諫めをきき、教へを求むべし。學問は、我が身の惡しきを改めて、よき
 にうつる道なれば、我を知ありとし、我をよしと思はば、學ぶとも益なくして、却り
 て、邪氣を長すべし。人聖人にあらず、何ぞ事毎に善を盡さんや。自ら是とし、自ら
 足れりとすべからず。聖人すら學問を好みて、自ら是とし給はず。今の凡夫、いかで
 か過ちなかるべき。凡そ、致知の法は、五常五倫の道をしるを以て先とし、家を盡へ
 て、民を治むる理に至るべし。次に、萬事萬物の道理をも知り極むべし。天地の内に
 あらゆる萬事萬物は、皆、我が心の分内のことなれば、其理をしらすんばあるべから
 ず。天下の理をきはめしむるの道は、本と近きを先とし、末と遠きを後にして、
 前後緩急の次第を失ふべからず。

學ぶ人は、只、我が知の闇く、我が徳の進まざることを憂ふべし。われに學問才智
 技藝ありとも、我を知ありとし、我が才に誇る心あるべからず。人各知あり、又、
 長する所あり。人を愚にし侮るべからず。諫めを防ぎ、我を是とすべからず。己が不
 善を棄て、人の善に随ひ、人の善を用ゐて、我が身に行ふべし。我を知ありとする
 ものは、惡徳なり。戒むべし。其愚をしるものは、大愚にあらず。其過ちをしるもの
 は、大なる過ちなし。故に、高慢にして、己をゆるすものは、必ず、愚人なり。いか
 んとなれば、自知の明なく、知をひらき善にすむの基なくして、終に愚にて終る。
 人を侮る者は、必ず、天の尤めあり、人の責めあり、人を誹る者は、必ず、人に誹ら
 る。古の君子は、聰明睿知なれども、守之以愚。況んや、末世の凡夫、僅なる智
 慧才能に誇るは、甚だ愚なりといふべし。尙書にも、其善にはこれば、其善を失ひ、
 其能にはこれば、其能を失ふ、といへり。我が身にほこれば、自ら是として、吾に過
 惡あることを知らざる故に、過を改め善にうつること能はず。惡日々長じ、善日々
 に消ぬ。しかれば、たとひ聖人と同じく居て、朝夕教へをうくとも、益なかるべし。

勉めて書をよみ學問すとも、其身に益なきのみにあらず、却つて邪智を増し、才能に誇りて害あり。こゝを以て、矜は天下の惡徳の由、古人の戒め明かなり。學問する者、まづ第一これを戒むべし。文盲なる人のことばに、學問すれば人品あしくなる、益なくして害あり、といふは、世上にかやうの人あるを見て、其の杖せを守り、其上、其人もとより學問を嫌ふ故に、妄にかくいふなるべし。もし、己が身を修めん爲に、實に學ばい、何ぞ益なからんや。害なからんことはいふに及ばず。

理をきはむるも、事をするも、一重に物を思ふべからず。浦の濱木綿の百重なることを思ひて、幾重にも理をきはむべし。心淺き人は、一重をしりて、はや、ことわり至極して、此上なし、と思ふは、はかなきことなり。今日一重をさりて、明日又一重をさり、日々かくの如くすべし。皮をつくして肉を見、肉をつくして骨を見、骨をつくして髓を見るべし。凡そ、理をきはむる學問は、心荒く輕き人は、なしうべからず。心精しく靜かにすべし。

孔子曰く、古之學者爲己、今之學者爲人。爲己とは、我が身を修めん爲にする實

學なり。爲人とは、人にしられんが爲にする名利の學なり。學問の本意は、己が身を修めん爲なれば、人の知ると不知とに拘らず。たとへば、食する者の、我が飢ゑをやめ身を養はん爲にすることがごとし。只、我が腹にみちなんことをのみ思ひて、更に我が食したるを、人にしらせんと願ふ心なし。學問は、たい、我が身を修めん爲にすべし。

聊、人にしられん爲にすべからず。又聖人の、子夏に女爲君子儒、無爲小人儒。との給へり。此意は、君子儒は、只、我が身を修めん爲に學べり。實學なり。小人儒は、只、人にしられん爲に學べり。是れ名利を願ふ心のみにて、我が身を修むるに志しなし。偽學なり。こゝを以て、君子の心は、日に善に進みて上達し、小人の心は、日に惡に陥りて下達す。同じく力を用ゐて學問せば、君子儒となるべし。小人儒となるべからず。力め學んで、小人儒となるは口惜し。學者、まづ、初めより己が爲にする志しを立つべし。是れ、學問する人の第一に、心得べきことなり。しからざれば、博く書をよみ、學問しても、益なくして、却つて害あり。

書をよまば、我が身に受用することを、專一に志すべし。受用とは、書に記せる

聖人の教へを、我が身にうけ用ゐて、守り行ひ、用に立つるを云ふ。もし、書をよみ、義理をさへても身にうけ用ゐずして行はれざれば、何の益もなき徒事なり。大學を讀んで、如く惡し惡臭、如く好し好色とあるを見ては、我が心に、これをうけ用ゐて、實に惡をさらふこと、惡臭の如く、善を好むこと、好色のごとくすべし。論語を讀んで、父母に仕へてよく其の力をつくし、君に仕へて、能く其身を委ぬ、とあるを見ては、其のごとく親に仕へて、我が身の力も、財の力も惜しまずして、孝をつくすべし。臣として、我が身を我がものにせずして、私をわすれ、専ら、君に忠をつくすべし。自餘も、皆、かくの如くすべし。是を書を讀んで受用すると云ふ。もし、書を多く讀むとも、受用せざれば、口耳の學といひて、耳にききて、頓て口に言ひたるまでにて、心に守り身に行はざるは、無用の學なり。

初學の人、書を讀むには、まづ、四書を熟讀し、又、五經をよく讀むべし。五經は、上代の聖人の教へなり。文義の祖、義理の宗と云ひて、文義のはじめ、義理の教への本なり。四書は、孔門の教へなり。是を讀むは、面のあたり聖賢の教へを聞くが如し。

尊ぶべし。文義やうやく通せば、四書の注、大學中庸の或問を見て、後、五經の注を見るべし。次に、周程張朱四家の書を見るべし。中につきて、程朱の書最もよくよむべし。殊に、小學の書は、身を修むる大法を記せり。人倫の道は、備れり。早くよんで、其義を習ひしるべし。又、歴代の史、左傳史記朱子通鑑綱目を見るべし。是れ、道をしり、古今に通ずる學問の法なり。經傳及び歴代の史に通せば、天下古今の事理明かならずといふことなかるべし。聖人の書を經と云ふ。經とは常なり。聖人の言は、萬世の常道なり。賢人の書を傳といふ。聖人の道を述べ、後代に傳ふるなり。四書五經は經なり其注並びに周程張朱の書は傳なり。歴代の事をするせる書を史と云ふ。記録のことなり。子は、荀子楊子淮南子說苑文中子等の諸子の書を云ふ。是は、程朱の書の如く、道理精明なるにはあらざれども、經書の義理を助くる益あり。見るべし。集は、諸家の文章等の書なり。是れ又、義理を發明せり。此經史子集の四の書は、本末輕重あれども、皆、學問の爲用ある書なり。道をしらんとならば、經學を專として、一生力むべし。次に、史學、是も、其益大なり。次に、諸子諸集を見るべし。朱子綱

目、最も好書なり。古代の治亂盛衰の事迹をしののみにあらず。義理の學にも、亦、大に助けあり。殊に、國土を治むる人の明かなる鏡なり。又、軍の勝敗の道を記して、兵術を學ぶ人にも、甚だ益あり。古來、要用の故事も、亦、此内に多し。彼れ是れ最も益多し。勉めて數遍見るべし。誠に、經世の大典とすべし。其外、和漢の記録、力に任せて見るべし。又、暇あらば、諸子百家の書を見て、經説を發明し、義理の趣を弘むべし。しかれども、専ら、博覽をつとめて、雜學にうつり、志しを失ふべからず。學問は、博くして、又、約にすべし。博ければ、義理詳にして、備らすといふことなし。約なれば、義理精しくして、明かならずといふことなし。博く學ぶにいとまなく、又、中年以後はじめて學ぶ人は、約にすべし。古人も、博くして雜なるは、約やかにして精しきに如かずといへり。凡そ、書をよみ、學問するは、道をしらんが爲なり。道を知らざれば、廣く古今の書をよみ、詩文章をよく作りても、要用なし。學問の本意にあらず。又、四書五經等の文義に通じて、古今の書をひろく見ても、一生義理をしらざる人多し。道に志しなければなり。又、志しありても

學びやう悪しければ、一生道をしらす。或は、聰明の足らざる故にも因れり。知をひらくことを勤むべし。
 心學に志す人は、日新の工夫を用ゐるべし。日に新にすとは、昨日のふるき惡を改めて、今日新しく善にうつり、今日は昨日にまさりて新しくなるを、日に新にすといふ。此の如くなれば、今日は是にして、きのふは非なることを覺ゆべし。かやうに努めて已まざれば、日々に工夫進み、月々に異にして、年々に同じからず。一日は一日の功あり、一月には三十日の功あり、一年には三百六十日の功あり、三年には千日の功ありて、徳にすゝみ、善にうつりゆかば、其の樂しみ極りなくして、手の舞ひ足の踏むことをしらざるべし。かくのごとく、進みゆかば、君子となること、必ず期すべし。若し、今日は昨日にかはらず。今月は前月にことならず、ことしは昨年と同じくば、日に新にする力なくして、いつまでも、愚者にて世を終らんこと口惜し。
 文學をつとむるも、亦同じ。日々に努めてやまざれば、文學日々にすゝむ。數年の後は、經傳の義理に通じて、樂しみとなる。十年の功は、甚だ大なり。文學半ば成就

す。

萬の事、はじめに苦勞せずして怠れば、後に功ならずして、樂しみなし。たごへば、熱き炎を耐へ、苦き藥を飲めば、後に無病の人となるが如し。學問に於て、最も此驗あり。若き時辛勞する人は、若い後、樂多し。

書を讀むには、まづ、四書五經などを熟讀し、文字を多く覺て、訓詁に通ずべし。訓詁とは、字義をいふ。文字訓詁をしらざれば、書を見わけがたく、力なくして、書をよむに抄ゆかす。文學の進まざるは、字をしらざればなり。されども、文字訓詁にかゝりはり止まりて、義理を自得せざるは、君子の學にあらず。

學問は、智慧をひらく道なれば、廣く聞き、多く見て、義理に通じ、我が心に、智慧の自らひらくるを待つべし。聰明を待み、我が才智を先だて用ゐるべからず。人の才智を抑へずして、人の善言を取り用ゐるべし。位たかく年たけたる人、或は、才學の名ある人も、其位と年と才とに誇るべからず。只、人にへりくだりて、尋ね問ふは、智者の、まづ、智をます道なり。

凡そ、幼より勉め學ぶに、暇を惜しむべし。いにしへの禹王は聖人なりしに、猶寸陰を惜し給ふ。沉んや、今の凡人をや。徒らに悠悠として、空しく時日を費すべからず。光陰箭のごとく、時節は流るるが如くなれば、年若きを待んで、時を失ふべからず。人の世にあるは、老幼の時と、病する時とは、學びがたし。又、四民ともに、其家の事業しげくして、もの學ぶ隙はすくなし。其すくなき隙を惜します、怠りて、むなしく過ぎ、或は、無益の事をなして、時を費し、一生をはかなく終らんこと、いと愚なりといふべし。今年の今日、再び得がたきことを思ひて、かりにも、徒らに時を渡るべからず。是れ、一生の間、心をを用ゐるべきことなり。古人も、常にしてたかす、常に行ひて止まざる者には、及びがたし、といへり。又、徒らに、なすことなく、常に隙多き人は、人に勝るゝことはなきものなりといへり。例へば、農人商人の、努めて暇を惜しむ、朝夕、田を作り、商ふ者は、必ず、人にすぐれて、其家富みて衣食乏しからず。古人も、人生は努めにあり。努むれば則ち貧しからずといへり。國家の政を精しく勤むれば、其國家必ず治まる。學問を精しく勤むれば、必ず、諸人にす

ぐれて、其才進む。萬の事、皆しかり。暇を惜しみて、久しく努むれば、成就せざる
 ことなし。それ、人の資は、暇に過ぎたるはなし。如何となれば、君子の、學問をつ
 じめ、國家の政を行ひ、父母主君に仕へ、諸藝を學び、農の田を作り、商人の需ぎ、
 百工の器物を作り、婦女の布帛を織り縫ふも、皆、暇を用ゐて、なし出すわざなれば、
 人の最も重んじ惜しむべきこと、暇に過ぎたるはなし。故に、其の惜しむべきこと金
 玉にも過ぎたり。古語にも、聖人は尺璧を貴ばずして、寸陰を貴ぶ、といへり。暇を
 惜しまざる人は、學ぶことも努むることもなければ、必ず、才智も徳行も藝能もなき
 ものなり。暇を惜しまざれば、君子は、身を修め、家を整ふる事能はず。農工商は、
 其家事を失ひて、貧窮飢寒を免れず。學者は、必ず、粗學にして不才なり。醫は、必
 ず、賤工なり。萬の道々の工も、暇を惜しまざれば、必ずや拙し。是れ、暇は人生の
 寶にして、惜しむべき故なり。就中、年少の時は、事すくなく、暇多し。精力つよく、
 記憶つよく、一たび見きつて覺わしこと、身を終るまで忘れず。此時力め學べば、其
 功多し。故に、書をよむことは、少年の氣力強く暇ある時、よく努むれば、大に進み

て益あり。三十歳以後は、よろづ勤め多くなりて、暇すくなく、精力やうく弱くな
 るに隨ひて、其覺衰へぬれば、力を多く用ゐても忘れ易く、勞すれども、功すくな
 し。年少なる人は、これをよく心得て、若き時、暇を惜しみ、學問を勉むべし。誠に
 一生の寶となるべし。淵明が詩に曰く、盛年不重來、一日難、再晨、及時當勉勵、歲
 月不待人。又、古詩に、少壯不努力、老大徒傷悲、といへり。若き時、是れを能く
 考へ、後悔なからんことを思ひて、時日を惜しみて努むべし。又、よく努むれども、
 學問の術を擇ばざれば、一生益なきことに迷ひ、心を用ゐる苦しみて、よき道をしらす。
 是れ亦、愚なりといふべし。
 凡そ、君子の學問は、智仁勇の三徳を本とし、五倫を篤くするを道とす。智仁勇は、
 五倫の道を行ふ心の徳なり。智は、五倫の道をしり、仁は、五倫の道を身に保ち行ひ、
 勇は力めてしり、力めて行ふ。しるも行ふも、勇を以て力む。君子の學問をするに、
 其の心法とするは、三徳なり。行ふべき道とするは五倫なり。三徳と五常とは理同じ。
 五常は、生れつきたる性なり。三徳は、學問をする心法なり。五常をついでいへり。

孔子曰く、學而不止、闔棺而止。人と生れては、人の道をしり、此身をよく修めて、君子となることを力めとすべし。是れ、人と生れたるかひあらんとなり。しかれば、人となるべき道を學ぶこと、怠るべからず。一息も猶殘れる内は、學ぶことを止むべからず。死して後已むべし。

爲 學 下

小學の教へは、小子の學ぶ所、小なる學問なり。いにしへ八歳になれば、高きと卑しきと、凡そ天下の人の子となり、弟となれる者、師の教へをうけて學べり。これ、小學なり。其教へは、父母に孝し、兄長を敬ひ、君上に仕へ、賓客に對する道、或は座敷を掃き、飲食を具へ、尊者の前に進み、退き、應へ答へをする禮を教へ、又、日用の禮樂射御書數の六藝の業をも教へ、是を以て、幼き時より、其心を養ひ年長じて、大學の道を學ぶ基とせり。凡て、小學は業を教ふるなり。

大學とは、十五歳以上成人の學ぶ所、身を治め人を治むる大なる道理の學問なり。

天下廣しと雖も、己と人より外なる物なし。己を修め人を治むる道を學ぶは、大なる學問なれば、大學といふ。明德を明かにするは、己を治むるなり。民を新にするは人を治むるなり。至善に止まるは、明德を明かにし、民を新にするに、皆、至極の善に到りて止まるべしとなり。故に明德新民の外に至善に止まる道あるにはあらず。右の三綱領は、大學の主要なり。此三に到る工夫の條目八あり。八條目は三綱領の内、細なる工夫なり。格物致知は、事物の理を極めしりて、知を開く道なり。誠意より天下は、皆、力行の道なり。就中、誠意正心修身は、ともに身を修むる道なり。齊家治國平天下は、人を治むるの道なり。凡そ、大學は理を教ふるなり。

大學に、格物致知を以て、道理を明かにするを、身を修め、人を治むる勤めの初めとす。格物とは、萬事萬物の道理に窮めたるを云ひ、致知とは、わが心の知を極めて、明かにするなり。格物の次第は、まづ、五常五倫の道身を治め家を齊ふる、まちかき事よりして、次第を以て、やうやく國家天下を治むる理に窮め至る。是れ、格物なり。かくの如く、萬事萬物につきて、理を極むれば、わが心の知たのづから明かになる。

是れ、致知なり。故に、格物の外に、致知の工夫なし。是れ大學の勤めの初めなり。其次は、誠意にあり。意とは、心のはじめて起る所の苗なり。心の體は靜にして、善惡未あらはれず。其初めて動く時、善も惡もあらはる。意の起る時に、好むと惡むとの二あり。惡むとは、嫌ふなり。此時、善を好み惡を嫌ふこと、眞實にして偽りなきを、誠意といふ。たとへば、善を好むことは、好色を好むが如くにし、惡を憎むことは、惡臭を嫌ふが如くに、眞實なるべし。是れ、力め行ふ初めなり。善を好み、惡を嫌ふこと、眞實ならざれば、本たすして、萬の道行はれず。故に、此の後正心修身齊家治國平天下の工夫も、皆、是を以て初めとす。されば、大學の八條目は、格物と誠意を以て要とす。格物は、知のはじめなり。誠意は、行ひのはじめなり。格物なくして萬の理をきはめざれば、智明かならずして、善惡を分ちがたければ、迷ひて悟らず、夢の未だ醒めざるがごとし。誠意なくして、善を好み惡を嫌ふ。意、誠ならざれば、道を行ふべき基なくして、未だ善人とはいひがたし。故に、此二を以て、致知力行の初めとすること、宜ならずや。

凡そ、人には、必ず、生れつきたる良智ありて、いかなる愚者も、善惡をすこしは辨へしれり。其上、學問して理を極め、其智やうやく開けぬれば、善を善とし、惡を惡とする心、いよく明かになりぬ。されども、善を好み惡を嫌ふに、誠なければ、善行はれず。惡去らずして、生れつきたる良智の寶も、學問して知れる所も、皆、無用となりぬ。此故に、學者道を行はんとせば、まづ善を好み惡を嫌ふに誠あるべし。故に、誠意の工夫、最も切なり。

學問の要、二あり。未だしらざる時は、知らんことを求め、既にしられれば、行ふべし。知らざれば、行ひがたし。行はざれば知らざるに同じく、無用の事となりぬ。ことを以て、學問の道は、只、知と行ひとの二にあり。又、萬卷の書を読むとも、道を知らず行はざれば、讀まざるに同じ。是れ道に志しなければなり。ことを以て、大學の道、まづ、格物致知して、事物の理をきはめ、わが知をひらき、さて、知れる所の善をこのみ、惡をさらふ心實にして、知れる所を行ふ。是れ誠意なり。知ること至らざれば、萬事の善惡辨へがたし。意誠ならざれば、善をなし惡を去ること實ならず

して道行はれず。此二は大學の道の要にして、知行の工夫なり。

博學にして經書に通じ、義理を誦く人も、其心術行迹悪しくして、俗人に劣れるものあり。是れ、道に志しなくして、道を我が心に得ざればなり。口に讀み習ひ、目に覺わても、其理を心に得ざれば益なし。たとへば、美食芳樽前に多くつらなれども、これを飲み食はざれば、食に飽くこともなく、酒に酔ふこともなきが如し。書をよんで、行ひあしき人あるを疑ふ人あり。これを以て、疑ひをはらすべし。書を讀みても、道に志しなくば、文字を知れるのみにて、心に於て益なし。是れ、無用の學なり。こゝを以て、學をするには、まづ、志しを本とすべし。

朝は師に學び、晝は、朝學びたることを力め習ひ、夕は、これをいよく重ね、夜は、一日の間の誤りを考へて、過ちなければ、夜を安く寝ぬべし。もし、過ちあらば、悔い恥ぢて、來る日の戒めとすべし。是れ、國語にいへる所、學問の法とすべし。いまだ書を讀まざる人の爲にいはい、此道を行はんと、志しを立つることは誠に第一なるべし。されど、經書をはじめとして、ひろく古の書を讀まざれば、聖人の

教へをしらで、道にくらく、言ふこと行ふこと、僻事のみぞあるべき。又、古來歴代の事をしらすは、今日の鑑とすべきやうなし。こゝを以て、力めて、朝夕書をよみ、いにしへを考ふべし。いかに生れつきたる才ありとも、稽古なくては、己と道をしり、古今天下の變をしるべからず。もし又、すでに書を讀める人の爲にいはい、學問は、たゞ、わが身の誤りを改ため、善にうつりて、身を修むる工夫を專一にすべし。書をひらくよみ、古今天下のことに通ずとも、もし我が身の過ちを改めず、善を行はずば、徒事なり。しかれば、學問は、まづ、志しを立て、身に行ふを第一とすべし。書をよむはこれ、第二義なり。

學問の道は、師を尊ぶにあり。師尊くして、道尊ぶべし。道尊くして、民道を敬ふ。故に、君として位高しといへども、師をば臣として卑めず。古、大學にしては、天子に教ふるにも、北面せず。師を尊べばなり。此道理の天下にある處は、まづ、吾が心を本とす。人に交れば、君臣父子兄弟夫婦朋友の間、行ふべき道あり。又、我が身の萬のわざに、みな一の道理ありて、暫時も

此道を離れたがたし。凡夫と雖も此行ふべき道理の具はること、聖賢と變らず。又いかなる愚人も、善を好み、惡を憎む心あり、生れつきたる良智ありて、此の道のかたはしを、少しはしりて、日々用ゐる行ふ。しからざれば、一日も、世に立つことかたし。君父に背き、亂逆をなし、人と争ひ、人を冒し掠め、非法を行ひては、暫くも世に立つべからず。されども、凡夫は、此道を能く知り、能く行ふことかたし。故に、古の聖人世に出で給ひて、教へをたて、道理を明かにして、これを書にあらはし給ふ。天下の事、大小精粗萬事の道理、一として聖賢の書に明かに備はらざることなし。たとへば日月の天に沖して、萬物のかたち分明なるは、凡そ、目あるもの、是を見ざることなきが如し。其書をよむものは、必ず、其の道をあきらめ、其の理を我が心に保ち、身に行ひて、人倫に交り、萬事を勤め、人民を治む。かくの如くにして、人の職分を盡して、天地の間に立つべし。若し、此の如くならざれば、人たるの道を失ひ、人の職分缺け、天地の理に背けり。凡そ、物皆職分あり。天地は、物を生じ養ふを心とし給ひ、天は蓋ひ、地は載する、これ、天地の職分なり。萬物の微細なるも、皆各

職分あり。雞の晨をつくり、犬の夜を守るの類、みな、其物に生れ得たる業を勤むるを以て、其物の職分を行ふとす。人は、萬物の靈なり。其心本明かに、萬理備はれり。若し、人として、身に備りたる理を行はずば、人の職分を空しうすといふべし。人を以て鳥獸にだも如かざるべけんや。書を讀む人は、まづ、其學問の筋を正しくし、又、心術を正しくすべし。學問も心法も、一筋に、天地聖人の道にしたがひて、一點も邪をまじへずして、純一なるべし。聖人の道を好むとも、其間に、又、少しにても、聖人の道に似ざる所あらば、純一なりといひがたし。學純一なれば其心法も邪なくして正し。心法正しければ、行事にあらはし發するも皆正し、たとへば道をゆく人の、まづ道の筋を尋ね知るが如し。道の筋を知らずして、たゞに行くことをのみ努めば、たとへば都にある人、奥州にゆかんとて、まづ淀山崎へ向ひ行くが如し。いよく力め行くほど、いよく奥州には遠ざかるべし。是れ只道を急ぐことを知りて、道を誤ることを知らざるなり。孔子曰く、幼成如天性、習慣如自然。とは、幼少より習ひて成就したることは、

天性にうまれつきたるが如くなり。又、久しく習ひ慣れて染みぬることは、善きも悪
 じきも、努めずして、自然によくするが如し、となり。善悪ともに、性に出でたるよ
 りも、習ふより出づること多し。然れば、習ひ慣るゝこと、善悪を擇び慎むべし。習
 ひて慣れぬることは、生れつきたる自然の如し。學問をするも、善に習ひ慣るゝねざ
 なり。人の悪をするも、必ず生れつきてするのみにはあらず、悪人に習ひてすること
 多し。故に、孔子も、性は相近し、習へば相遠し、とのたまへり。
 凡そ、人の不孝不忠、もろくの悪を行ひ、怨を擅にし、身を滅ぼし、家を滅ぼ
 すに至るは、何にかよれるや、知なければなり。又、善を行ひて、家をたこし、身を
 保ち、譽を得るは、何の故ぞや。知あればなり。知あれば、よく善悪を知る。善のな
 すべきことを知りて行ひ、悪のなすべきことを知りて行はず。此故に、知は身の内
 の大なる寶なり。學者道に志さば、知を求むるを第一とすべし。知を開くことは、
 學問の功にあらずんば、成りがたし。
 程子の曰く、人の不善をするは、只、知らずとす。言ふ意は、世人の悪をするは、

四〇

悪のすまじき理をしらざればなり。よく知れらば、なごか、人の爲わが爲、あしき僻
 事を行ふべき。例へば、赤子の、腹這ひて井に入らんとするは、赤子の科にあらず。
 いまだ知あらずして、井に入れば死ぬることを知らざればなり。世の人の悪をするこ
 と、亦、かくの如し。惑むべし。故に、學問して知をひらき、道をしることを力むる
 は、人間の一大事なり。
 學問は、其はじめを慎んで、其術を擇ぶべし。もし、其はじめ、學術正しからず、
 二たび誤りて、あしき方に踏み迷へば、其あやまりに慣らひて、改めてよき道に立ち
 かへりがたく、身を終るまで、僻事に迷へることを知らず、かへりて、正しき道を嫌
 ひ講る。天地の道に背き、人の道を失ひ、一生の間、迷ひて悟らず、悲しむべし。學問
 せんと思はば、必ずまづ、明師良友にしたがひて、學問を擇ぶべし。是れ、はじめを
 慎むなり。易緯に、君子慎始、もし違ふこと毫釐なれば、誤るに千里を以てす、
 といへり。はじめの違ひは少なれど、後の誤りは、千里の遠きに至る。其はじめ、學
 術を擇ぶこと、豈慎まざらんや。

四一

千里の道も、一步よりはじまる。たとへば、遠き所に行くに、出でたつ足下よりはじまりて、カめ行きて已まざれば、届かざるることなし。學んで道に至るも、又かくの如くなるべし。志しを立て、道を學び、努め行ひて止まず、久しく年を積まば、なごか、其功を成して、遠大に到らざらん。例へば、商人の一錢を惜しみ、積み重ねて、久しく年ふれば、大なる富人となるが如し。

聞見の智あり。眞智あり。聞見の智は、書を読み人に聞きて知るを云ふ。是れ、知ること淺し。眞智とは、聞見の智によりて、わが心に、道理を眞に知るをいふ。是れ、知ること深し。學問は、まづ、聞見の智より入るべし。書を読み道を聞かざれば、眞に知るべきやうなし。聞き見たるまでにとまりて、眞にしらざるは、道を知るにあらず。眞にしれば、よく行ふ。知りても行はざるは、未だ眞に知らざるなり。故に、學者は、聞見の智を初めとして、後には、眞智を求むべし。聞見の學に止まるべからず。

書を読み學問すれば。聞見の智は、日々に進む。されども、知れることを行はざれば、

ば、德行は、日々に後れて前まず。行はざれば、其知れる所眞智にあらず。故に、今の學者は、其學ぶ所を行ふ所と、大に背けり。是れ、己が爲に學ばざればなり。學者、まづ、誠の志しを本とし、聞見の智より入りて、知れることを行ひ、眞智に至るべし。

學問の道は、心を空しくし、へりくだり、能く知れることをも知らざるが如くにし、能く行ふことをも行はざるが如くにし、我が才を行ひとに誇らず、わが智を先だてずして、人に問ひ、人の諫めを聞き用ゐ、我が過ちを改めて善に移るべし。かくの如くすれば、學問の益あり。善に進むこと極りなし。もし、自ら誇り、我を是とし、人を非とし、人の諫めを防ぎ、我が過ちを聞くことを嫌はば、才學の長するに隨ひて、其心あしくなりて、學問の益なきのみにあらず、かへりて、害となるべし。是れ、己が爲にせずして、人の爲にする故、君子儒とならずして、小人儒となるなり。かくの如くならんは、學ばざるに劣れり。

學問に、有用の學あり。無用の學あり。我が儒の學は、有用の學なり。有用の學と

は、學問をすれば、わが爲、人の爲、益となるを云ふ。此故に、學問の道は、有用の學をすべし、無用の學をすべからず。有用の學は、身を修めて、人倫の道を篤く行ひ、ことに、忠孝を勤め、善をなして人を助け救ふにあり。貧賤なる者も、善を行ふ志しだにあれば、人を救ふこと多し。況んや、富貴の人は、其力によりて、其の施し博し。故に、富貴の人の學は、我が身を修むるのみならず、心愛の心を本とし、人を助け救ふことを、專つとめ行ふべし。是れ者、有用の學なり。もし、口に高きことを説き、心に潔きことを好み、身に艱苦なることを行ふとも、仁義の心を求めず、人倫の道を行はず、善をなして、人に益あることなれば、無用の學なるべし。又、詩文を作り、心を苦しめ、多く紙を費やし、巧にかざりて、人に賞められんことを求め、日用人倫の道に志しなきは、益もなき徒事なり。皆是れ、無用の學なり。楊子曰く、學者所以求爲君子也。言ふ意は、學問をするは、何の爲ぞや、君子とならんが爲なり。君子とは、有徳人を云ふ。君子の字義は、易の正義に、人の君となりて、萬民を子の如くする徳ある人をいへり。卑しくして下にりあても、其徳あれば、

君子と稱す。君子となるとは、人となるなり。學ばざる人は云ふに足らず。學んでも君子とならずんば、學ばざるに同じくして、人と生れたるかひなし。君子となること、容易からず。しかれども、志しを立て怠らすんば、必ず、其功あるべし。古語にも、志しあるものは、其事遂に成るといへり。學は終身のことなり。一息もいまだ残れる内は、此志しを怠るべからず。是れ、人の一生の間の勤めなり。凡そ、人聖人にあらざれば、必ず、悪しき生れつきの癖あり。是れ、氣質の偏なり。故に、身を修むる道は他なし。たゞ、我が氣質の悪しき所を自ら察し、人にいはせて聞き、其偏なる悪しき所に勝ちて、改め去るべし。かくの如くせずして、生れつきて偏なる所に任せぬれば、心正しからずして、身修らず。書をよみ學問し、道を好み行ふと思ふも、皆、我が氣質の偏なることを行ふ。故に、徒事となる。氣質の偏の害となること、例へば、田を作るに莠あるが如し。苗を植ゑて、水をそゞぎ肥しても、莠を去らざれば、苗長せず。水と肥との養ひも、皆、莠の爲になりて、徒事なり。故にわが氣質の悪しき所を知りて改むること、これ、學問する人の、専ら勤むべきこと

となり。學者、必ず、こゝに常に心を用ゐるべし。凡そ、人の誤り悪しきことは、皆、其生れつきの偏なる癖より起る。此を以て、學者は、必ず、氣質を變化して、過ちを改むべし。是れ、學問の要なり。我が氣質の偏惡と、我が過ちを自らしる人稀なり。省みて察し知るべし。正直にして、過ちを告ぐる益友を求め、忠臣を近づけて、諫めを聞き用ゐるべし。碁をうつ人は、手見ねす。傍より見る人は、眼よく見ゆるが如し。君子は氣質の偏惡なし。無病の人なり。衆人は、皆、氣質の偏なる病ある故、過ちのみ多し。皆、病人なり。其病を去りて、君子にいたるべし。病を其まゝたきて、其惡を長すべからず。病を去らんとせば、明師良友にあひて、其教へをうけ、其氣質の惡しきを改むべし。たとへば、病人の、良醫にあひて、其病を癒すが如し。病人は、醫を招きて、藥を服せざれば、無病の人となりがたし。衆人に氣質の病あるも亦しかり。良友にあひ、又、自らせめて、其氣質の病を改め去らすんば、君子とはなりがたかるべし。朋友の、我が過ちを正すを嫌ひ、臣下の諫めを防ぐは、病人の、醫を嫌ひて、藥を用ゐず、病死すれども悟らざるが如し。悲しむべし。

古語に曰く、人生至樂、無如讀書、至要無如教子。又、古人の詩に曰く、至哉天下樂、終日在几案。書を讀むの樂み、至れるかな。富貴ならずして、其樂しみ大なり。酒色ならずして、其樂しみ深し。山林ならずして、其樂しみ靜なり。古語に、書を讀むこと一卷なれば、一卷の益あり。書を讀むこと一日なれば、一日の益ありといへり。又、人の神智をますこと、書を讀むに如くはなしといへり。富貴にして書を好む人は、其樂しみひろし。貧賤にして書を好む人は、其樂しみ深し。次に、子を教へて、我が志を繼がしむべし。是れ、肝要のことなり。子を教へずして、道をしらしめざるは、父の誤りなり。不仁と云ふべし。疑ひを人に問ふは、智を求むる道なり。自ら心に道理を思ふは、智をひらく本なり。問ふは、智を人に求むるなり。思ふは、智をわれに求むるなり。人に問はざれば、知ること狭くして、心に迷ひ解けず。自ら思はざれば、見聞くこと廣しといへども、道理をわが心に深く自得せず。此故に、問ふと思ふの二は、理をきはめ智を明かにする道にして、學の要なり。

道に志しなき人は、云ふに足らず。たとひ、道に志しありて、博く學ぶとも、學びやう悪しければ、一生道を知らず。或は、道學を好めども、文句に拘りて、義理に通せず。是を訓詁の學と云ふ。其人は、自ら道學をすと思ひ、自ら是とし人に誇れども、訓詁の學なることを知らず。又、道學の名を貪り好みて、其實なき人あり。只、道學の實を好むべし。道學の名を好むは、不實にして益なし。又、古訓を學ばず、聖人の法に隨はずして、偏に、我が心に求むる學あり。是れ、無學に優れりといへども、聖學にあらず。師傳ありといふとも、私の學なり。眞の學問をせんと思は、道に志し、徳を尊びて、孔孟の教へを本とし、程朱の説を階梯とすべし。是れ、筋目よき眞の學なり。末世に至りて悪しき學術多し。擇ぶべし、迷ふべからず。

學者、文學言句に求むる勤めは常に多く、日用徳行に心を用ゐる勤めは、常に少し。是れ、學問の本意を失へり。もし、徳行を勤めずして、文學を好むは、たとへば、酒を捨て、糟を食ふが如し。善き所をば取りて用ゐずして、善からざる所を好むなり。道を知ること、至りて難し。普通の俗學の習はしにては、身を終るまで、勤め學び

ても、道を知りがたし。まづ、學を好むに、誠の志しありて、明師良友に隨ひ、古の學の筋を尋ね求め、心を用ゐること久しくば、其功あるべし。利口にして、我が才に誇り、好んで我が智を恃み用ゐる人は、道に遠き生れつきなり。身を終るまで、此道を知ること難かるべし。只、生れつき質實にして、飾りなく、其心しづかに、義理に敏く、へりくだりて、自ら是とせざる人あらば、これ、道に近き生質なり。かゝる人、志し專一にして、よく學ばい、此道を、やうやく晩年にして知るべし。

世の人、多くは、藝を好みて、學問を好まず。藝は、たとへば、木の枝葉なり。學問はたとへば、木の根本なり。根本を努めずして、枝葉を努め、本を棄て、末に專らなるは、僻事なり。道學なければ、藝多くしても、根本たゝず、君子とすべからず。又、技藝なければ、事に通せずして、其徳の助けなし、野人といふべし。

若き時は、經學を本として、博く群書に通じ、且つ又、有用の諸藝を習ふべし。中年以後は、博覽を止めて經傳の要文を、ついまやかに味ひ、道理を精しくし、心に自得せんことを求むべし。

未だ道（みち）を知らざれば、夢（ゆめ）見て覺（さ）めざるが如（ごと）し。故（ゆゑ）に、大學（だいがく）の致知（ちち）を、夢覺（ゆめさ）の關（せき）と云（い）ふ。夢（ゆめ）見（み）ると、覺（さ）むるとの境（まがひ）なり。善（ぜん）を好（この）むこと誠（まこと）ならざれば、惡（あく）人の境（まがひ）を免（まぬ）れず。故（ゆゑ）に、大學（だいがく）の誠意（せいぎ）を、善惡（ぜんあく）の關（せき）と云（い）ふ。善人（ぜんじん）と惡人（あくじん）との境（まがひ）なり。關（せき）とは、内外（うちそと）の境（まがひ）なり。

聖人（せいじん）は、人倫（にんりん）の至（いた）りなり。吾（わ）が輩（たがら）の口（くち）に掛（か）けまくは、最（いと）も畏（かしこ）し。されど、弓射（ゆみい）る者は、初（はじ）めより的（まと）に志（こころ）し、道（みち）ゆく者は、初（はじ）めより家（いえ）に志（こころ）すがごとし。聖人（せいじん）を目當（めあて）として、其（その）志（こころ）を立（た）つことは、高（たか）くすべし。然（しか）るに、千里（せんり）の道（みち）も、出（い）でたつ足下（あしもと）の一步（いっほ）よりはじむる理（り）なれば、道（みち）を行（な）ふことは、まづ、日用（にちよう）の近（ちか）く低（ひか）き所（ところ）より行（な）ひて、やうやく經（へ）上（のぼ）りて、高（たか）きに至（いた）るべし。初（はじ）めより、品（しやう）を越（こ）えて、高（たか）く至（いた）らんとするは、翼（つばさ）なくして、天（てん）に上（のぼ）らんとするに同（おな）じ。必（かなら）ず此（この）理（り）なきことを知（し）るべし。たゞへば、高（たか）山（さん）に登（のぼ）るにも、先（ま）づ、麓（ふもと）の一足（ひとあし）より始（はじ）むるがごとし。一飛（ひととび）に山（さん）上（のぼ）りには上（のぼ）りがたし。萬（ばん）事は、次第（しだい）に隨（したが）はざれば、成（な）じしがたし。近道（ちかみち）なることは、口（くち）にいふところは、快（こゝろよ）しといへども、道理（だうり）のなきことは、ならざるものなれば、虛妄（きやうまう）の説（せつ）、無用（むよう）の辨（べん）は、徒（た）

事（こと）なり。

再（また）び生（な）れ來（き）るべき頼（たの）みなき、此（この）世（よ）の間（ま）なるに、天地（てんち）人（じん）の至（いた）れる道（みち）を學（まな）んで、樂（たの）しまんこそ、生（な）れるかひありて、身（み）終（は）る時（とき）も、恨（うら）みなかるべけれ。我（わ）が身（み）の私慾（しやくよく）に苦（くる）しめられ、世俗（せぞく）の卑（いや）しき習（な）はしに迷（まよ）ひて、人（ひと）の道（みち）を知らずして、一（ひと）世（よ）を終（は）らんこと、かへすべく口惜（くちあ）しと思（おも）ひ、かたて心（こゝろ）を用（もち）ゐるべし。

聖人（せいじん）の書（しよ）をよみ、道（みち）を好（この）みて、日（ひ）を送（おく）る人は、誠（まこと）に諸人（しよじん）にすぐれ、一（ひと）生（な）の間（ま）、常（つね）に樂（たの）しみて、思（おも）ひ出（い）で多（おほ）き世（よ）なるべし。かくの如（ごと）くならば、人（ひと）と生（な）れたるかひありて、朝（あ）すでに道（みち）をきくなば、夕（ゆふ）に死（し）ぬとも、更（さら）に恨（うら）みあるべからず。貧賤（ひんせん）にして、時（とき）におはざるは、憂（うれ）ぶるに足（た）らざるべし。もし、聖人（せいじん）の道（みち）を學（まな）ばずして、道（みち）を知らずんば、此（この）世（よ）に生（な）ける時（とき）は禽獸（きんじゆう）と同（おな）じくして、人（ひと）と生（な）れたるかひなく、死（し）して後（のち）は、草木（そうぼく）と同（おな）じく朽（く）ち果（は）て、人（ひと）の賞（ほ）むべき佳名（けいめい）を殘（のこ）すことなく、後世（こうせい）に至（いた）りて、知（し）る人（ひと）なかるべし。われも人も、皆（みな）、かくの如（ごと）くなれど、人（ひと）とかく生（な）れし身（み）を鳥獸（とりどう）草木（そうぼく）に同（おな）じくせんこと、本意（ほんい）なきことならずや。これ（これ）を口惜（くちあ）しと思（おも）は、豈（あに）、此（この）愛（あい）ひを免（まぬ）るべき道（みち）な

かるべきや。人の身は再び得がたし。空しく、此世を過すべからず。

書を読み學問せんとする人あれば、彼の嫌ふ人、色々いひ妨げて、學問することを誹る。誠ぞと心得て、學問を止む人多し。又我が子に書を読ませんとするに、かの嫌ふもの、書を読めば病者になり、氣滅り、命短くなるなどいひて威せば、親は、子を慈む心深くして、もし左もあるべきかと、思ひて、書を読ませざる故、其子は一生文盲に愚にて、身を終る。感むべし。

書を読まざる人は、書を読む人を嫌ひ憎みて、書を読めば、氣滅り、病者になり、心痴けて緩くなり、出家長袖の如く、武道も弱くなるといひて誹る。書を読む人、これを聞きて、怒り争ひ、口論となり、闘ひに及ぶこと、其例あり。凡人は、ひとの我に同じきを喜び、我に異なるを憎み、わが知らざるを以て、人の知るを誹る。是れ凡人の恒の心なり。かゝる僻事をきつて、怒り争ふは、われも、亦、彼の愚なる人と同じくなるは口惜し。書を読み學問するは、かゝる愚なる人になるまじきが爲なり。愚人の學問を誹り、我を冒すをば、不智なる故なりと思ひて、感み宥すべし。怒るべき

理にはあらず。又、愚人の仇事を云ふとて、我が心にかけて與るべからず。聖人はかゝる頑なる人を感みて、怒り憎み給はず。是を以て則とすべし。

俗人の學問を誹るは、學者、書を読んでも、道を行はずして、却りて高慢にして自ら誇り、人を侮りて、心さま悪しくなりゆき、學びたる益なきが故なり。學者、慎みて身を省みるべし。書を読むによつて、却つて、かゝのごとくなる小人となるは口惜し。

我が才に誇り、自ら是として、人を侮り、人の才智あるを取り用ゐず、只、我が才智のみを用ゐる。古語にも、自ら用ゐれば即ち小なりといへり。諸人の智を用ゐるは大なり。われ一人の智を用ゐるは小なり。我が學才に誇り、人を侮るは、是れ、才學の爲に、わが徳を害はるゝなり。かゝる惡徳あらんよりは、才學なきが、遙にまさる。聖賢の書を多く讀むことも、道に志しなくして、不徳なるは、無學なる者の、心悪しく道に背くよりも、其罪猶深し。學者、此の如くなれば、學を嫌ふ俗人の言に、學問は益なし、却りて害ありと云ふ、其證據になりて、學問の道の害となる。慎みて、

學を誹る俗人の證據にならんことを愛ふべし。

學者は、まづ、孝弟忠信を先として、常に善を好み、人を愛するを以て志とし、日々、力めて善を行ふべし。書を読むをば、第二義とすべし。第一、善を好まざれば書を読むとも、道を行ふべき基なし。萬卷の書を読むとも、無用のことなるべし。大學誠意の章をよく味ひて、善を好み惡を嫌ふに誠あるべし。

學者志を立つること、眞實なるを以て本とす。只、道學の實を力めて、道學の名を好むべからず。名聞の爲、煩はさるゝは卑し。天地の間に我が身程親しき物なし。學問せば、只、身の爲にすべし。名の爲にすべからず。しかれども、唐日本、古今道學の名を貪る人多し。名を好む學者は、形は善人に似たれども、善を好むの誠少し。位も徳もなくして、我が身を自ら置くこと甚だ高く、賢人君子の模様をなし、其身に應せぬ言を出し、ふるまひをなせり。自ら其分量を知らずして、古今を誹り、人の小過を尤め、不能を責め、刻薄なること、無學の人より甚しく、人を怒む心薄し、不仁と云ふべし。人情時變を知らずして、古禮を當世に直に行はんとす、不智といふべし。

し。もし、かくの如くならば、時俗の耳目を駭かして、道學の名を得ども、益なかるべし。無學なる人、かゝる學者を見ては、儒者は一向に偏にして、國俗と人情とに背き、時宜を知らざる無用の者と思へり。是れ道學のますくすたれる所なり。明の陳繼儒が、僧は眞ならんことを要む、高からんことを要めずといへり。儒者も亦しかり。儒者は、只、道を信じて、直實なるを貴しとす。人に高ぶりて、誠すくなきは賤しむべし。

本朝の儒術、古來三千歳。寥々たりといへども、大平日久しければ、世の人文も、いよく、やうやく開けぬべし。しからは、今より百年の後は、文字の習はしも拙からず、義理の學も、大に明かになるべし。文明の國となりて、誠に君子國の名に叶ふべし。只今より後、學術の正しくして、卑しからず、學者の志し眞實にして、聖人の道を、篤く尊び信せむことを希ふのみ。

心 術 上

心は、身の主にて、萬事の根本なり。此故に、心正しからざれば、身修まらずして、家を齊へ、人を修めがたし。たとへば、草木の根堅からざれば、枝葉榮わす、家の主不徳なれば、家治まらざるが如し。心を正しくする道は、まづ、善を好み、悪を嫌ふこと眞實なるを本とすべし。心の内に、善を好み誠なく、悪を嫌ふこと忠實ならずんば、猶、悪人の境界を免れがたき故、心を正しくすべきやうなかるべし。是れ、大學の道、心を正しくせんと欲しては、先づ、其意を誠にするにあり。既に、善を好み悪を嫌ふこと誠あらば、心を正しくすること易かるべし。心を正しくすとは、心より起る所の喜怒哀樂愛惡欲の七情、よきほどに過不及なくして、片墜ちざるを云ふ。喜ぶべくして喜び、其喜び過すべからず。怒るべくして、怒り。其怒り過すべからず。自餘も亦かくの如くなるべし。七情過不及なくして、片墜ちざれば、心の内滞りなくして、常に和平なり。是れ、心正しきなり。

尙書に曰く、人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執厥中。是れ、古の大聖虞舜の帝の、天下を禹王と申せし聖人に譲らせ給ふ時、天下を治め給ふ心法を傳へ給ふ

御教へなり。人心とは、人の身の耳目口體の形氣の好む所によつて起るを云ふ。形氣の好む所とは、目に色を好み、耳に聲を好み、口に味を好み、形には安らかなること好むを云ふ。又、喜び、怒り、悲しみ、樂しみ、好み、憎み、願ふの七情も、是れ形氣よりたこる人心なり。飢ゑて食を好み、寒くして衣を求め、疲れて形を休むるの類。又、七情も、皆是れ、人情の、なくて叶はざることなれば、聖人といへども、人心なきこと能はず。然れども、衆人は、耳目口體の好むに任せ、七情の起るに任せぬれば、程よきことを忘れ、忽ちに、私欲に流れ、悪に陥る。故に、人心はこれ危しとのたまふ。危しとは、たとへば、小兒を火の側に置きたるが如く、醉へる人の崖墮に落ち入らんとするが如し。道心とは、仁義禮智の本性より起る善心なり。道心惟微なりとは、微は、少しきにして、隠るゝなり。人心は、形氣よりたこる故、外に現れ動き、其勢熾になり易し。道心は、心底にかくれ、微にして現れがたし。故に、道心は惟微なりとのたまふ。人心は熾になり易く、道心は隠れ易し。二の者、胸中に相雜りて、其治めやうを知らざれば、人心は、いよく危くして、人欲にながれ、道心

は、彌微にして、つひに、人心に蔽はれて亡ぶ。こゝに於て、人心抑へ、道心を保つ道なくんばあるべからず。惟精とは、人心道心二の間をわかつて、明かに精しく知るなり。惟一とは、すでに、人心道心をわかち知れば、專一に、道心を主として、人心の危き方に任せざるを云ふ。かくの如くなれば、一の心の仕業、皆、道心より出で、人心は、道心の下知に従ふ。允執二厥中とは、人心のなす所、耳目口體七情のわざ、皆、過不及の誤りなきを云ふ。是れ、道理の至極にて、目當にする所なり。惟精惟一なれば、萬の身の業、皆過不及の誤りなくして、よき程の中に叶ふなり。飲み食ふ業を以ていはし酒食を好むは人心なり。酒食を過すべからずと思ふは道心なり。酒食を好む心に任せぬれば、忽ち、威儀を失ひ、脾胃を害ふに至らんとす。是れ人心は危きなり。酒食を過せば、身の害にならんことを恐るゝ道心はありといへども、人心熾なれば、恐るゝ心は、自ら微にして、現れがたし。是れ、道心惟微なるなり。かくの如くに、酒食を好む心に任せ、恐るゝ心微なれば、忽ち、酒食を擅に過ごし、恐るゝ心はなくなりて、つひに、人欲に克たず。然るに、人心のわがまゝなると、道心の

慎みあるとの二を明かに知りて迷はざるは、惟精なり。すでに酒食の過ぎて損あり、節にして益あることを精しく知れば、專一に慎みて、道心を主とし、人心の貪り好む欲を戒め抑へて、自ら過不及の誤りなからしむべし。すべて論ずるに、人心惟危、道心惟微は、人心道心二の者の有りさまなり。惟精惟一は心を明め、道心を主とする工夫なり。允執二厥中とは、中は、過不及なき至極の道理なり。必ず惟精惟一の工夫ありて、過不及の過なき道理を失はざるべしとの意なり。是れ、大聖人の、天下を譲り給ふ時、傳へ給へる大事の心法なれば、真理至極せるなるべし。此十六字は、萬世心學の教への根源なり。王公より以下庶人に至るまで、皆尊んで、よく心得、受用あるべきことなるべし。

天地の、人を憐み恵み給ふこと限りなし。食物衣服居所器物、もろくの、人の身を養ふ物を生じて與へ給ふ。もろくの、人は、是をとりて用ゐ、我が身を養ふ、天下の、高きも低きも、一人も、其恵みをうけざる人なし。其恩の深く高きこと、海山にも比べがたく、言語にも述べがたし。又、藥物を生じて、生を救ふ。凡そ、世にあら

ゆる萬の物、人の身を養ひ助くる品々多きこと、擧げて數ふべからず。是れ皆、天地の、人を厚く恵み給ふ所なり。天地の禽獸を養ふことは、人を養ひたまふ百分が一にもあらず。其上、禽獸は人に殺されて食と成り、草木は伐られて用となる。然れば、人の萬物より貴くして、天地の厚き恵みをうくること、思ひ知るべし。かくの如く、天地の恩を厚く蒙りても、愚なる人は知らず。平生、一の善事をもなさずして、天地に仕へ奉り、恩を報ずる道を行はず。況んや、不仁にして、天地の生み養ひ給ふ人物を害ひ惱まして、天地の生理を妨げ、天地の物を費し、天地の御心に背くをや。是れ、天地の恩をしらず、天地に不孝にして、人道を失へりと云ふべし。天道恐るべし。我輩愚にして、天地の大神の萬一を報ずる程の力こそなくとも、せめて、天地の道に背かず、天地の生じ給ふ物を害はざるべし。古人は、天道の、眼前にあることを知りて、朝夕恐れをなして背かず。今の世の人も、亦かくの如くなるべし。詩に曰く、天の威を畏ちて、こゝに之を保つといへり。學者は、常に天道を恐るゝを以て、心をすべし。人道は、必ずかくの如くなるべし。

常に、心の内を省みて、一點の私欲邪念あらば、早く去るべし。私欲とは、名利色貨の欲とて、名聞を好み、利分を好み、色を好み、貨を好むの類、并に、耳目口體の好む所の、身に私する慾をいふ。邪念とは、人を虐げ、人と怒り争ひ、我が身に誇り、人を侮り、人を猜み誹り、人に誦ひ、人を欺き偽るの類をいふ。皆是れ、邪惡の心なり。もし、是等のごと露ばかりもあらば、速に去るべし。心を害すること、甚しければなり。又、氣質の偏あらば、勝つべし。氣質の偏とは、生れつきに片墜たる所あるをいふ。氣の荒さと謙がしきと、又、柔すぎて弱きと、或は、敏すぎると、鈍く緩すぎたるの類、或は、生れつきて、怒りたほく、慾たほきの類をいふ。是れ皆、氣質の偏なり。心を害す。凡そ、氣質の惡しき所を變化すること、極めて難し。平生心を用ゐて是に勝たずんばあるべからず。又過ちあらば、速に改むべし。過ちとは、巧みて惡をするにはあらず、是非を知らずして不意に道理に背くをいふ。氣質の偏により私慾の妨げによりて、過ちをなすこと多し。人聖人にあらず、誰も過ちたほし。過ちとしらば、速に改めて善にうつるべし。吝なるべからず。吝なりとは過ち

を惜しみて改めかぬるを云ふ。凡そ私慾邪念と、氣質の偏と、過と此三の者ありては心術を害す。心を正しくし、道を行はんとすれども是等の過惡ありて去らざれば徳に進むべきやうなし。たとへば田を作るに莠を去らざれば水を注ぎ、肥しつても莠のみ茂りて苗に益なし。まづ莠をさりて、水と肥とを用ゐるが如し。又、身の病を去りて後補養するが如し。

人にまじはるに愛敬の二を心法とす。是れ、簡要のことなり。誰も知らずんばあるべからず。愛とは、人を憐むを云ふ、憎まざるなり。敬とは人を敬ふを云ふ、侮らざるなり。人を憐むは仁なり。人を敬ふは禮なり。仁禮を心の内に保ちて人を憐み、人を敬ふこと、忘るべからず。是れ人に對して行ふべき善なり。父母を憐み主君を敬ふは、いふに及ばず、疎き人卑しき人に對すとも其位に隨ひて、よまほごに愛敬すべし。侮り粗畧にすべからず。是れ人に交る道なり。

凡そ人の心必ず仁義禮智の性ある故に、良心時に起る。其良心を空しせずして、擴め充つべし。擴め充つとは善心の儘にたこるを害はずして、育て養ひ、熾なら

しめ其分量を十分に充て、いづくにも行きわたらしむるを云ふ。たとへば水のはじめて流れ出づるを堰き止めずして流し、火のはじめて燃れ出づるを打消さずして熾にたこらしむるが如くすべし。此良心をたしひろめば、遠き四海を治めて餘りあり。たしひろめざれば近き父母に仕ふるにだに足らず。是れ孟子の説殊に親切なる教へなり。學者必ず服膺して力め行ふべし。

仁は人を慈み物を育つる善心なり。是れ天地の恵みの心をうけて人の心とする所なり。故に孟子に、仁は人の心なりといへり。人ごとに生れつきたる本心なり。君子は、此本心を失はず。己を愛する心を以て人を愛し、人我の隔てなし。小人は偏に我が身を愛して人を愛せず。人我の隔て深し。是れ私欲あればなり。是を不仁と云ふ。人たるものは、仁を以て顔とすべし。不仁の人は本心を失ひ、人道を亡ぼし、天道に背く。此故に人の最も戒むべきこと、不仁より先なるはなし。不仁は天地人の背く所なり。故につひに天罰を蒙りて、災あり。其上、子孫までも報ゆるものなり。天道恐るべし。此道理、古今唐日本例多し。違ふことなし。疑ふべからず。

易に、天地の大徳を生と云ふ。此理、よく味ひて知るべし。生とは生きて死なず、活して殺さず、生生して已まず。此故に天地は、萬物を生みて育て給ふ。萬物の父母なり。物を憐みて、活すことを好み殺すことを嫌ひ給ふ。是れ天地の大徳なり。生の理なり。人は、天地の子なれば其心に天地の大徳、生の理具はりて、天地の恵みの心を生れつけたり。是を仁と云ふ。仁は人物を感み、愛するの心にして、是れ即ち、天地の生れ物の心なり。萬物は、皆、天地の生める所なり。其中に取分、人倫は、最も天地の恵み厚し。萬物の内にて、最貴くして天地の子とする所なり。此故に天地の御心に隨ひ、仁心を以て物を愛するには、人倫に於て、故ら厚くすべし。人倫をあつくるは、是れ、天地の御心に順ふなり。人倫を愛するにも、次第あり。まづ、父母兄弟を愛するは、仁を行ふ本なり。主君は父母に等し。次に、親類臣下朋友次に萬民を愛すべし。又、其次に鳥獸、蟲魚を愛して、妄に殺さず。次に草木を愛して、妄に伐らす。是れ人を憐み物を愛する次第なり。されど、又、悪人を殺すも、是れ、義にして仁に叶へり。又、樹木も、時を以て伐り、鳥獸も、道理を以て殺すは義なり。鳥獸

草木なりとて、妄りに殺し伐るは不仁なり。仁者は萬物を一體とす。故に人倫はいふに及ばず、物として、愛せざることをなし。孔子も、一樹を伐り、一獸を殺すに、其時を以せざるは孝にあらずとのたまへり。されば、禽獸も、草木も、皆天地の生ずるものなれば妄に是を害ふは天地に對し、不孝なりと知るべし。人物を愛するに、親しきより疎きに及び、重きより輕きにいたるべし。輕重親疎の差別なく、平等に愛するは義にあらず。墨子が兼愛とて、天下の人を一樣に愛するは、父母をも路人と同じくするなり。是れ仁の道知らずして、義に叶はざるなり。

人は天地の子なり。天地を法として行ふべし。天地は、別に心なし。萬物を憐むを以て心とせり。別に所業なし。萬物を生み出し、養ふを以て業とせり。人も亦、此心を受けて、常に、人に恵み感むを以て心とすべし。別の念あるべからず。人を援け救ふを以て業とすべし。別の業あるべからず。故に天下の人、王公より以下、庶人にいたるまで、日々行ふべき善事あり。善を行ふべき位にあり。時にあたれば、空しくすべからず。是れ、天に仕へ奉りて、天職を勤むるなり。

仁者は、人を愛す。人我の隔てなし。人を愛せずして、偏に我を愛するは、人我の隔てなり。是れ私なり。仁者は、私なし。我を愛する心を以て、人を愛し、わが嫌ふ事は、人に施さず、我が身を立てんとして、又、人を立つ。かくの如く、人我を忘れてわかたざるを、公と云ふ。公とは私なきなり。仁者の心、力めずして自らかくの如し。學者は未だ仁に至らず、力めて、仁を行ふべし。我が心を以て、人の心を推量るに、人の心も、亦、わが心に變らず。わが好むことは、人も好み、わが嫌ふことは、人も嫌ふ。こゝを以て、仁を人に施し行はんとせば、まづ、我が心を以て、人の心を推量り、我が好むことは、人に施し與へ、わが嫌ふことは、人に施さず。かくの如くすれば、人の心に叶はざることもなくして、人々、各其の所得て安んず、是れ、仁の行はるゝなり。是を推己及人」と云ふ。恕なり。恕は仁に至らんとする人の行ふべき工夫なり。仁者は力めずして自ら人を愛す。恕は、力めて仁を行ふ。是れ仁恕のわかちなり。恕の一字は人の身終る迄、力めて行ふべき道なり、と聖人宣へり。

人となる者は天地の心に随ひ、仁愛を以て、心とし行ふべし。己を愛する心を以て人を愛す。是れ、仁なり。人の心なり。禽獸は、己が身を愛することのみ知りて、物を愛せず。人もし不仁にして只、わが身を愛して、人を愛せずんば人の心にあらず。禽獸と何を異ならんや。不仁なれば人心を失ふ故、其餘の才能の善きことは見るに足らず。

我が身をへりくだり、人に高ぶらざるを謙と云ふ。謙なれば、我が身に誇らず人にくたりて問ふことを好み、人の諫めを聞きて我が過ち改むる故、智を開き善に移ること、極りなし。此故に、古人、謙を以て天下の美德とす。謙の反は矜なり。矜は誇ると訓む。誇るとは我が身に自慢するを云ふ。誇れば、自らはとして人に求めず。かくの如くなれば、悪に移ること極りなし。此故に、古人、矜を以て天下の惡事とす。謙と矜との善惡のこと、前に既に解けりといへども、繰返して、初學の人に知らしめんが爲なり。

敬は、慎むと訓す。慎むとは、心に戒め畏るゝを云ふ。和語の意は、包むなり。し

は、助字なり。内に包んで、猥に外に出さざるなり。

慎めば本心をたもちて失はず。行ひなすこと、理にかなひて、誤りなし。こゝを以て、敬は、一心の守り、萬善の根本なり。故に、敬めば身修り、敬まざれば、亂る。萬のこと、敬まざること勿れ。萬善、皆、敬みによつて行はれ萬惡、皆、不敬よりたこる。故に五常の徳、是によつて立ち、五倫の道、是によつて行はる。こゝを以て、聖學は敬を以て要とす。故に、聖學の始終、皆、敬を以て宗とす。古來の聖賢の心法、皆、敬の一字を要とす。學者の、最も力むべき所なり。又、よく敬めば福あり。敬まざれば、禍あり。白樂天も、禍與福在慎與不慎といへり。身の禍は皆慎まざるによれり。故に慎みは、禍に克つといへり。

古語に、人聖人にあらず、誰か過ちなからん。過つてよく改む。善、これより大なるはなしといへり。程子も、學問の道他なし。其不善をすれば速に改めて善に順ふのみといへり。不善とは、即ち過ちなり。過ちを知りて、改むるは、學問の要なり。されども、我が過ちを知る人すくなし。すべて、凡人は我が身に私して、其身の過

ちと惡とを知らず。よろづ外のことは、事毎に知らずとも、さほどの愛ひにあらず。我が身の惡と過ちとを知らざるは、はなはだ愚なるかな。是れ何よりも憂ふべきことならずや。身を省み、人の諫めをきいて、我が過ちを知るべし。

何事も、好き好むことを慎むべし。好みて止まざれば、道の志しを奪はれ、財を費し、隙を費やす。此故に勝れて好き好むことは、禍の基なり。其大なるを擧げていへば、酒食と、色慾と、財利とを好みて已まざれば、徳を損ひて、後は身を喪ふ。其餘の事を好むも、亦しかり。凡そ、好むことは、多きを思む。少けれども過ぎて深く好めば、又、禍となる。古人の言に、好むことを見て、其人の善惡を知るといへり。好むこと慎むべし。

方孝孺が、樂未既、而憂繼之者、人之欲也といへること、豈しからずや。酒食好色などを貪り樂しみて、其樂未だつきざるに、早、其禍憂ひ忽ち出で来て、酒食に破られ、色欲に損はる。皆是れ、人欲よりたこる。欲をすくなくするの工夫は、欲を耐へて、好む所、十分にいたるべからず。只、六七分、或は、七八分に至らば、早く

止むべし。十分にいたれば、必ず、禍出で来て、後悔すれども益なし。古語に、酒は微酔に飲み、花は半開に見るといへるが如くなるべし。善誘文にも、一時我が心に快きこと過ぐれば、必ず、身の禍となる、といへり。

民の司る人は、民の父母なれば、民を憐む心の本とすべし。民の心を以て心として、民の好むことを好みて施し、民の嫌ふことを嫌ひて施さず。父母の子を思ふが如くする故、是を民の父母と云ふ。民の上に立つ人は、民を養ふ職分を、天より授け給ふことを知りて、天道に順ひ、民を苦しましむべからず。我一人の樂を極めんとて、多くの人を苦しむるは、天道の御心に背けり、天道恐るべし。すべて、人は高きも低きも、同じ人なれば、民の樂しむ苦しむも、我と同じ。我が心を以て、民の心を推量するに、違はず。民の憂ひ苦しみを思ひ量りて、憐むべし。不仁なる人は、民を憐まずして、民を愛すれば、驕りて、上を侮るとて、民を憐まず。是れ、不仁の人のいふ詞なり。凡て、民は素直なる天性あり。上なる人、誠を以て民を愛すれば、民も、亦必ず、感悦して、蟠らず、誠を以て上に仕ふ。上より、不仁にして、偽りを行へば、

民も、亦必ず、偽る。此感應の理、唐も日本も、古も今もかはらず、疑ふべからず。民を慈み、其上に、法を嚴にして、民の僻事を禁すれば上を侮らす驕るべきやうなし。民の司となる人、我一人樂しみを好むべからず。民と共に、樂しむべし。是れ、誠の樂しみなり。天下の人は、高きも低きも、皆、我が兄弟の理ありて、本は一體なることを知り、我が心を推量り、聊人の憂ひ苦しむことをなすべからず。貧窮にして、飢ゑ凍ゆるもの、病者不具なる者、世を渡りかねて、憂ひ苦しめる鰥寡孤獨の類をば、我が力を以て救ふべし。鰥寡孤獨とは、老いて妻なきを鰥と云ひ、老いて夫なきを寡と云ひ、幼うして父なきを孤と云ひ、老いて子なきを獨と云ふ。此の四つの者は、世の中の困窮せる民にて、人の恵みを受くべき便りなく、飢ゑ凍ゆる人なり。いと憐むべし。古の聖人の政は、まづ、かやうの不憫なる民を、早く恵み給ふ。かへすく、我が身ひとつを愛して、人を愛せず、多くの人を苦しむべからず。假にも人に妨げなく害なからんことを思ふべし。人の憂ひ苦しみを救ひ、人の爲に計りて忠あるべし、疎略にすぐべからず。位ひき、人も、我に財ありて、施す力あらば、貧窮

を救ひ、鰥寡孤獨の、便りなく苦しめる人を、分限に随ひて、憐み助くすべし、財を愛しむべからず。次には、禽獸蟲魚草木に至るまで、博く憐むべし。是等は、天地の内にて、我が兄弟の列にはあらざれども、同じく天地の内に生ずる物にして、本は一氣なれば、同類の思ひをなして、妄に害ふべからず。但し、人に妨げある禽獸をば除くべし。是れ皆、仁を行ふ工夫なり。下にある賤しき匹夫の輩、諸人の補ひにならんことは、もとより力に及ばざる所なり。されども、賤しくして、下にある者も、仁愛の心だにあらば、其分に應じ、其力に随ひて、心を用ゐて、人を救ふこと、日々に多かるべし。然れば、仁愛は、賤しき人も、心にかけて、力め行ふべきことなり。是れ即ち、天地の御心にうけ順ひて、天地に仕へ奉る道なり。

陰徳とは、善を行ひて、人に知られんことを求めず。只、心の内に、密に仁愛を保ち行ふをいふ。古人の曰く、陰徳は、耳に鳴るが如し。我ひとり知りて、人知らず。たよそ、人の患ひを憂ひ、人の喜びを喜び、人を憐み恵むに、鰥寡孤獨の、便りなき人を先にし、人の飢ゑたるをすくひ、凍れたる人に、衣を與へ、疲れたるを助け、病

者を救ひ、道橋を修理し、人に害あるを除き、人に利益あることをなし、人の中を和げ、人の善あるを譽め、人の過ちを隠し、人の小過を容し、人の才藝を用ゐる進め、妄に人に怒らす、人を恨みず、人の怒り争ひを止め、假にも、人を誹らす、人を侮らす、人を奪はず、人を妨げず、人の善を奨め、人の惡を諫め、禽獸蟲魚を苦しめず、妄に殺さず、草木を妄に切らざる、皆是れ、陰徳なり。凡そ、陰徳は、人知らざれども、天道に叶ふ。故に、後は必ず、わが身の福となり、子孫の繁榮を得る道理あり。かゝるがゆゑに、福を求むるに、是にまされる祈禱なし。天道の、善に福し、惡に禍し給ふ理は、古今和漢、明白なりといへども、凡人は、是を知らずして、善を好まず、惡を行ひ、僻事をなして、福を求め、我が身の祭るまじき淫祠に詣り祈る。古を考ふるに力なくば、せめて、近き古と、今の世の中を廣く考へ見て、善を行ひて益あると、妄に神と人との誂ひて、益なきことを知るべし。されども、君子の心は、福をもとめん爲に、陰徳を行ふにはあらず。陰徳をたこなへば、求めずして、福は其中にあり。

よく、後來のことを豫て知るを、先見の明と云ふ。是れ知者のしる所、尊ぶべし。我輩の愚者は、先見の明なくして、動もすれば、過ち多く、後悔多し。愚なりとも、心静に、よく思案せば、此の患ひすくなかるべし。後悔すくなからんことを思はば、常に思案を好みて、妄に事を好まざるべし。事を好めば、事多くなり、過ち多く悔多し。

我が身の慾を擅にするより、大なる禍なし。人の非を誅るより、大なる悪なしと、古人いへり。此の二は、義理に乖くのみならず、身を亡す道なり。常に心にかけて戒むべし。

凡そ、平生の心法は、眞實にして偽りなかるべし。中庸に、誠 天之道也。誠之者 人之道也といへり。誠 天之道也とは、陰陽の所業、日月の巡環、春夏秋冬の次第、古今かはらず。草木の、春生じ、夏長じ、秋登り、冬收まりて、年々にかはりなきも、皆是れ、天道の誠なり。誠之とは、人の力にて、かめて誠にするを云ふ。人は、天地の子なれば、天道の誠を法とし順ひて、行ふべし。是れ、誠之は人の

道なり。孔子も、主三忠信とのたまへり。此意は、誠を以て、人の心の主とすべしとなり。忠信は、即ち、人の誠なり。誠といはずして、忠信とのたまへるは、心に偽りなくするは忠なり。言と事とに偽りなくするは信なり。誠は、天理の自然を云ふ。忠信は、人の力め行へる誠と云ふ。理は一にして、自らなると、力むるとの別なり。程子も、人道は、只、忠信にあり。誠ならざれば物なしといへり。君父に仕ふるにも、誠なければ、忠孝にあらず。萬の事、誠なければ、さばかりの善事をなすといへど、偽りとなれば、實事にあらず。力め行ふも、仇事なり。是れ、無物なり。善事を力め行はば、名利の爲にせずして、誠を以て行ふべし。是れ、誠の善なり。言ふと行ふと、心と言と、表裏なかるべし。萬の事甚成じくとも、誠なくんば玉の盃の底なきが如くなるべし。吉田の兼好が、偽りても賢を學ばんを賢と云ふべし。と云ふ。此の言、甚だ教へに害あり。凡そ、人道は、只忠信にあり。すでに偽りあらば、其餘は見るに足らず。偽りて賢を學ぶ、是を小人と云ふ、何ぞ、賢といはんや。漢の王莽、宋の王荆公など、偽りて賢を學びし故、はじめは君子の名を得るといへど

も、つひに、天下を奪ひ、天下を亂れり。是を賢といはんや。君子の道は、純一にして偽なかるべし。假初にも、偽れる念を心に挟むべからず。たゞひ、外に實を行ふども、内に誠なくば、君子の道にあらず。故に身を修むるには、只一筋に誠の道を行ふべし。もし、凡夫の爲にいはば、偽りをするも、まことにするも、力を用ゐる其勞は同じければ、とてもものごとに、只、誠を行ふべし。偽りて善を行ふは、表れて惡をするにまされども、誠あらざれば、天道人道に乖きて、其罪ふかし。誠いたれば、天地を動かし、鬼神を感せしめ、人心を和ぐ。

凡そ、人の一念の不善も、必ず、天に通ずる理あり。天は高きに居て、低きにさくといへり。上天を欺くべからず、恐るべし。人を欺けば、つひに、其偽りあらはる。内に誠あれば、必ず、外に現るといへり。下人を欺くべからず、恥づべし。天を欺き他を欺くは、共に、わが心を欺くによれり。我が心に不善と知りながら、これを行ふ。是れ、自ら欺くなり。我が心欺くべからず。凡そ、天と人と、我が地と、皆、欺くべからず。只一筋に誠あるべし。こゝを以て、君子の心は、常に、青天白日の如くなり。

小人の心は、常に陰暗にして、測りがたし。

易に、愆忿窒慾といへり。忿りを愆すとは、忿りを抑ふるなり。怒りは、陽に風して、火の物を焼くが如し。起り易くして、人を害し、我が心の徳を損ふこと甚し。忿る時、先怒りを忘れ、心を和平にして後、理の是非を見るべし。又、忿る時、言をいさすべからず。怒る時、言ひ出す詞は、必ず、僻事ありて、後悔多し。慎み耐へて言ふべからず。人のいふこと、行ふこと、悪しきことあらば、忿らずして、彌、氣を平かにし、心を和かにして、其是非を詳にのぶべし。人隨はずとも、忿りて心を動かし、氣を荒くすべからず。心氣和平ならざれば、たとひ其いふこと、理に當らざるも、其心は、まづ非なり。泥んや、いかりて心を動かせば、其いふこと、理に當らざるをや。慾とは、只、財寶を貪るのみにあらず、名利、酒食、好色、或は、淫樂、器物、酒宴、佚遊を好み溺れて、我が私をなすは、皆、慾なり。慾を窒ぐとは、慾心起らば、早く、其慾を抑ふるを云ふ。すでに、慾盛になりぬれば、心迷ひて、慾に勝ちがたし。怒のはじめて起る時、早く窒げば、力を用ゐること少しにて、其しるし多し。慾は陰

に屬す。たとへば、水の人を溺らすが如く、溺れ易し。たよる萬の悪は、多くは怒りと怨とよりたこる。七情の内二の者、最も害多し。我が身を害ひ、人を損ふ、恐るべし。又、怒りと怨との三は、養生の道に甚だ害あり。

七情は、皆是れ人情なれば、なくてかなはず。過不及なく、よきほどなるは、中なり。過ぎたるは、最も害多し。不及も、また理に合はず。人を憐むは、誠に善なり。されど、我が心にあへりて、妻子従妻などを、一向に愛し過し、飽くまで恩を施すは、道より出でたる愛にあらず。是れ、私の心の甚しきなり。愛に溺れては、其人の悪しきを知らず。愛過ぐれば其人、必ず驕りて、道に乖く故、却つて、其人の禍となり、又、わが禍となる。怒るべきを怒るは、人の不善を戒むるの道なり。怒るまじきに怒り、或は怒るべきことにも、怒り過ぎては、人を害ひ、我が心を害ふ。憤むこと過ぎぬれば、其人の善あるを知らずして用ゐず。小の誤りを、大に言ひなして責め懲れば、其人恨み背く。是れ、みな、情の過ぎたるなり。また憐むべきを憐まざるは、不盡なり。是れ最も、不善なり。哀しむべきを哀しまず、樂しむべきを樂しま

ざるは、一向、情なしといふべし。是等は、みな情の不及なり。七情起れども、過不及なくして、禮義に留まるべし。是れ、古人の發乎情止乎禮義と云へるなり。凡そ、天下の道理は、過不及なき中に至るが、至善にして、是れ、道のある所なり。食する一事を以ていは、過不及なく、よき程食へば、身を養ふ。是れ、中なり。是れ、道のある所なり。過ぐれば、脾胃を破り、不及なれば、身の養ひたらず。是れ皆、中にあらず。人の血氣環らざれば病とす。人の心環らざれば愚なり。是れ、古語なり。心環るとは、事に當りて、心を用ゐ、思案するを云ふ。運動するなり。孟子に、心の官は則ち思ふといへるが如し。思案せざれば、心環らすして、是非を分つことなく、愚なり。事に當りて、心を環らし、よく思案すれば、是非を分つ故、愚ならず。人の善悪を辨へずして愚なるは、思案せざればなり。

怒を忍ぶこと、努むべし。忍ぶとは、耐ふるなり。學者、もし、怒を耐ふるに、力を用ゐずんば、學べる甲斐なし、力なしといふべし。平生の學力、こゝに於て用ゐるべし。

子弟及び奴僕に對して、其過ちを糺さば、致へを本とすべし。怒りを先だつべからず。如斯なれば、子弟奴僕の心を得て、恨みなく、順ひ易し。是れ、子弟奴僕を戒むるの要法なり。

智は、悟ると訓む。心の明かなるなり。心明かにして、曇なければ、萬の道理によく通じ、是非善惡を辨へて迷はず。たとへば、燈明かにして、よく物を照すが如し。智なければ、善を好めども闇く、迷ひて、行ふべき道を知らず。誤りて、僻事多し。又、智なければ、人を知らず、君子を捨て、小人を用ゐれば、禍多し。智れば、よく道理の是非を辨へ、非義を行はずして、身を保つ。よく人の善惡を知りて、君子を近づけ、小人を退く。是れ、身を修め、人を治むるに、益ありて害なし。此故に、智は、人身の大寶なり。心、明かなるは智なり。心明かなれば、よく人の善惡を知る。樊遲問、子曰、知人、これ人を知るは、智の明かなる所なり。

平生の氣象は、從容と靜に、和樂なるべし。輕卒急迫なるべからず。和樂は、人心に生れつきたる天機なり。常に、和樂を失ふべからず。又、益なきことを思ひて、心

を苦しめ、樂しみを失ふべからず。是れ、不智といふべし。心の軽く速きを抑へ、又怠りを戒め、常に、心を定め、早からず遅からず、よきほどなるが、心を治むる法なり。心は、身の主にて、萬事の本なれば、常に、寧に安らかにして、妄に動くべからず。心妄に動けば、亂れて明かならず。萬事に應じて、あやまち多し。事急がはしき時は、手足の動き、口の物いふことは、速からざれば、事に及ばず。心は、急がはしかるべからず。手足と、目口耳鼻は、たとへば、下人の如し。心は身の主にて、目口耳鼻手足の事の善惡を糺す役なり。故に、心は寧ならでは、思案はなしがたし。凡そ、事をなすに、油斷にならざること、緩の字を用ゐて、妄に急がず、よく思案して、詳に、事の是非を分ちて行ふべし。古人、これを待つと云ふ。待つとは、事を急がずして、時を待ち、詳に思案して、道理を求め行ふことなり。油斷するにはあらず。妄に、早く決定すれば、必ず、其事を仕損じ後悔あるものなり。

凡そ、勤めに、怠屈し、久しく勤めがたきは、たほかたは、精力の弱きにはあらず。氣隨にして、事を努むるを嫌ひ、心急がはしくて、短き故、むつかしく思ひて、はや

退屈するものなり。事毎にして、心を嫌はず、次第に随ひて、一ツづつ、漸に努
むれば、久しく勤めても疲れず。怠りなく、弛みなければ、緩にしても、捗ゆくもの
なり。

色慾名利の念、皆是れ、人情なれば、時として、起り易し。其まゝ措きては、徳を
害ふ。其起る時に、戒むるには、克己の工夫を用ゐるべし。己に克つこと、尤も難し。
十分の力を用ゐるべし。疎にすべからず。但し、はじめて慾の起る萌に克つこと、
甚だ易し。是れ、克己の要法なり。平生、學問し、道義を好む志し深くば、自ら、
名利色貨の念は、薄くなるべし。天理進めば、人欲退く。人欲進めば、天理退く。凡
そ、物は二ながら、一時に立たざる理なり。
心の中は、洒落にして、青天白日の如く、明白なるべし。心の中に物を蓄へ、蔽ひ
晦すべからず。思慮は、深く精しくすべし。淺く粗くすべからず。事をなすには、深
く思案を好みて、捗々しく、はやく決定すべからず。思案は、靜にして、急がざるを
善しとす。早く決定すれば、必ず誤りあり。

人の、我に不義無禮なるをば、怒り恨むべからず。それは、人の誤りなれば、我が
心に與らず。是れ、小人の常情なれば、責むるに足らず。なんぞ、怒り恨みて、かれ
と其是非を争ふべけんや。只我が身を省みて、我が不義無禮なるを、自ら責むべし。
人を咎む可からず。我が身を省み修むれば、人の上を咎むるに暇なし。

尙書に曰く、必有忍、其乃有濟、有容、徳乃大。忍ぶとは、堪忍するなり。
堪忍すれば、怒りを抑へ、事を破らすして、禍なし。入我の間和平にして、萬事調
ふ。故に、有濟と云ふ。古語に、忍過ぎて、事堪喜、といへり。堪忍し濟ませば、
必ず喜びありとなり。人の悪しきを堪忍せざれば、怒り起り、人に争ひて、人我の間
和順ならず。世に立ちがたし。堪忍すれば、争ひ出來ず、口論にも及ばずして、恥辱
なし。心中平かにして樂み多し。有容とは、心廣くして、人の善をば取りて用ゐ、
人の過ちあるをば宥すを云ふ。容るゝことあれば、其徳の器大なり。たとへば大なる
器の、其量ひろければ、物を入るること多きが如し。古人の詩に海濶、從魚躍、天
空、任鳥飛、といへるが如し。忍は力を用ゐて堪ふるなり。容は其徳ひろくして大

なれば、忍ぶはいふに及ばず、まづ、務めて忍びて、其工夫熟した後、有容にいたるべし。忍は、生しきなり。有容は熟するなり。されど、はじめより、容の工夫もあるべし。人の善を取り、人の過ちを宥すこと、はじめよりなくんばあるべからず。昔、二人、同じ船に乗りてゆくに、一人は性急なり。日和あしく、舟の遅きを苦しみて、晝夜、心を惱し、形縮たり、一人は、性穩なり、舟の遅きを苦しまず、よく食し、安く寝て、顔色美し。其所に着きしかば、二人、一時に陸にあがる。此間、船の遅きとて、心を苦しめし者、何の益あるや。只、自ら苦しめるのみ。是れ、心短き人の勤めとすべし。天下の事、我が力になしがたきことは、只、天に任せ置くべし。心を苦しむるは愚なり。

世に交るに、言すくなく、業をよく勤め、へりくだりて、我が才に誇らず、人を敬ひて侮らず、人を誹らず、人情を知りて、人を恨み尤めず、世變をしりて、時宜に應じ、信義を固く守りて、納を變せず、身を潔くして、財利の汚れなし。かくの如くなれば、過ちすくなくして、何處にても、人の憎み誹るべきやうなし。詩に曰く、彼

處に在つても、憎まる、ことなく、此處に在つても、厭はるゝことなしとは、是を云ふなり。厭ふは、飽くなり。

人のわれに疎きを恨むるは、人情を知らず。又は、世に慣れぬ人といふべし。我が身はわがまゝなれど、それだに心に任せざること多くして、わが道を盡しがたし。如何ぞ、人の方より、我が心になふやうに、わが爲に道をつくさんや。また世には、いかなる障りもありて、心に任せざること有りぬべし。何事も、定めて故あらんと思ひやりて、人を容易く恨み咎むべからず。我が心になはざるとて、誤りなき人を恨み誹るは、いと罪深し。かくの如く思ひ量りて、人を恨み誹らざる人は、世變と人情とをよく知る人なるべし。詩經に曰く、何其久也、必有以也。いふころは、人のわが許に、何しに久しく來らざるや。必ず、隙なきか、病あるか、故ありて、來らざるなるべしとなり。是れ、人の久しく音信ざるを恨みずして、いかさまにも、障りありて、來らざるなるべしと思ひ定めしなり。朱子の詩傳にも、此詩は、人情をよく知りて、譽め給ふ。心狭く、智淺き人は、人情事變を知らず少しわが心になはざ

ることあれば、早く人を恨み怒りて、心を苦しむるは、心狭く世慣れぬ人といふべし。人われを誹らば、わが身の悪しきを省み答めて、人を恨むべからず。もし、わが身に誤りなければ、誹りありても、我が徳に害なし。もし、わが身に過ちあらば、誹らるゝは、もとより、其理なれば、恨むべからず。泥んや、誹りを聞きて、身の過ちを改むれば、わが幸甚し。怒るべからず。孔子曰く、丘幸あり。もし、過ちあれば人必知之。わが過ちを人に知られて、咎めらるゝは、わが幸なりとのたまへり。聖人の言、尊ぶべし。

近き頃の俗語、用心は臆病にせよといふこと、まことに、道理によく叶へり。これほどの小事は、何の憂ひかあらんと思ひて、賤にして、畏れざるは、過ちのはじめ、禍の本なり。莫大の過ち禍は、必ず、しばしの間、少しなることを畏れずして、慎まざるより起る故、小事を畏れつゝしみて、賤ならざるが、禍なき道なり。武王の銘に、勿言何害、其禍將至。とのたまひしも、此意なり。

心 術 下

心に天君と云ふ。身の主なり。思ふを以て、職分とす。耳目口鼻形は、五官と云ふ。官は、司るなり。役をつとむるを云ふ。耳は、聴くことを司り、目は、見ることを司り、口は、物食ひもの云ひ、鼻は、香を嗅ぎ、手足の形は、動くことを司る。此五官は、各々、一づゝの役ありて、他事に通せず。心は、天君なれば、五官を指し使ふ主なり。五官の所業、見ること、聴くこと、言ふこと、嗅ぐこと、動くことに付きて、心によく思案して、義理に當るか、當らざるかを考へ行へば、五官の所業、誤りなく、後悔なし。もし、心其職分を失ひて、思案もなく、耳目口鼻形の欲に任せて、義理の當否を察せざれば、人欲擅にして、天理亡ぶ。是れ、心の官を失ひて、よく思はざるによれり、人欲とは、他にあらず。五官のしわざに任せて、わが儘なるを云ふ。目に非禮をみて、色に染み、耳に非禮をきゝて、淫聲に迷ひ、口に非禮をいひ、飲食をほしきまゝに貪り、鼻は香を愛で、形は怠り、或は、なすまじき所業をなす

は、皆是れ、人欲なり。又、天理と云ふも、他にあらず。五官のなすこと、よきはごの道理にあたるを云ふ。心は、天君なれば、耳目口鼻形の五官を使ふは、君として臣を使ふが如く順なり。もし、心の役を失ひ、思案なくして、五官に任せ随へば、かへりて、形より心を使ふ。たとへば、君として臣に使役るゝがごとし。是れ、逆なり。人の爲に、計りて心をつくし、或は、其才能を君相に進め、人の爲、害を除き、貧困を恵み救ひ、人に恩を施すこと、只、一筋に仁心より行ふべし。人の悦びて、其返報せんことを望むべからず。我が名聞の爲にすべからず。是れ、陰徳なり。若し、名聞の爲に善を行ひ、又、人にほごして、其報いのぞめば、仁心空しくなる。此の如くすれば、力を用ゐて、善を行へども、其事は是にして、其心は非なること、惜しむべし。誠の道にあらざればなり。

不知の人は、義理を辨へざるのみにあらず。又、利害損得をも知らずして、わが身の禍となることを顧みず、僻事をなして、身を立でんと思ひ、かへりて、身を亡ぼし、家を破るにいたる。悲しむべし。これ、我が身の悪をやめずして、天のせめをま

つものなり。我が身を久せんとて、悪しきことを行ひ、人を苦しめて、身を樂しむ。是みな、わが身の害となることを知らず。

道を主とせざれば、わが心の怒り、喜び、好み、憎むに任せ、我が私欲に随ひ、利欲損得に拘り、或は、人の僻事いふに迷ひて、悪を善とし、善を悪とす。親類朋友に私し、或は、人の請託をうけて、私する故に、道にかなひ、公に随ふことなし。是れ、無學にして、道を知らざる故、何を據所として、理非を辨ふべきやうなし。たゞ、わが身の私意を主として、わがまゝに行ふ。或は、書を讀めども、私多き人は道を主とせずして、欲に随ふ故、學べども益なし。

家の内、妻子家人の、われに仕ふる勤め、十分にわが心に合はざるとて、責め怒るべからず。人に交るには、怒を以て、人の非を宥すべし。又、わが衣食家居器物財用など、事毎に、わが心に、十分に足りなんことを求むべからず。常に、不足の事あるがよし。十分心にならば、禍あり。家の慶をふきて、三瓦を蓋はず、衣の襟を缺ぐも、此意なりと、古人いへり。

世は海なり、身は舟なり。志しは楫なり。楫を悪しくすれば、行くべき方にゆかず、風波に遭へば、舟覆へるが如し。志しのもちやう、肝要なり。悪しく志し、もてば、身を覆す。楫のとりやう悪しくして舟を覆すがごとし。
わが身に、事足ることを知れば貧賤にしても亦、樂しむ。足ることを知らざれば、富貴なりといへども樂しません。

我が身の行ひの善悪は世人の譽め誇りを、強ちに、矩にして喜び畏るべからず。たゞ道理を以て法とすべし。わが行道理にかなはずは世舉りて誹るべからず。わが行ひ道理に乖かば、世舉りて譽むるも喜ぶべからず。よき人に譽められ、あしき人に誹らるゝこそ、君子とはいふべけれ。人毎に譽むる者は、却りて疑はし。たはくは巧にして、飾れる人なるべし。

わが身を修むるには、譽められんとすべからず。たゞ、過ちなからんことを思ふべし。我が身だに道理にかなはずは人の毀譽は、遮莫、喜び患ひとするにたらず。但し士の節義武勇の道と、また利欲のけがれなく廉潔にしてむさばらざると、此の二

は、一般、人の誹らざるやうに、心がけ力むべし。名を惜しむも、義に於て害なし。此二のこと缺けなば、其餘は見るに足らず。

善をなすに、人の誹りを恐れて止むるは、善を好むこと誠あらざるなり。小人、財と色とを好むには、人の誹りを顧みず。是れ、好むこと誠あればなり。學者の善をなすことも、亦、かくの如くなるべし。

凡そ、わが身にあることを持めば、必ず、身の禍となる。才を持めば、人を蔑にして、人に破らる。勇を持めば、人を侮りて、人に滅ぼさる。氣力を持めば、欲を擅にして、病たこり、命をうしなふ。勢を持めば、驕りて亡ぶ。智を持めば、身に誇りて誤る。

心も事も、天理に專一にして、人欲を少しも雜ふべからず。是を至善と云ふ。君子の心事、必ず、かくの如くなるべし。もし、十分の天理に、一分の人欲あひまじはらば、たとへば、黑白のあひまじはり、香臭の一器にあるが如し。十分の白き物に、一分の黒き物まじはれば、白さといひがたし。香ばしき物も、少し悪しき臭を加ふれ

ば、香よからざるが如し。

上代より以來、誠は日々に衰へ、虚飾は日々に盛なり。驕りは彌増り、儉約は彌廢る。質朴をば賤しむ、華美をば譽む。今の世に、道を行はば、偽り飾りをやめて、古風に立ちかへり、素直にして、眞實なるを尊び力むべし。實直なれば、人も感じて、随ひ易し。時俗に移り行くべからず。

我が身、不幸にて、災におひ、讒言にあひ、或は、主君父母兄弟朋友の不仁無禮にあふとも、古來、和漢の内猶それよりも、甚しき災に遭へる人を思ひ比べて、自ら、心を慰め安んじて、憂ふべからず。是れ、古人の説なり。君子の、天命を安んずる工夫は、別に有るべし。されど、これは一の易き手段なり。知るべし。

凡そ、世間の、測らざる不意の災いできたるとも、是れ、古今の人間に、ある習ひぞと思ひて、心を苦しめ憂ふべからず。兼好が歌に、習ひぞと思ひなしてや慰むわが身ひとつの浮世ならねば。

人の、我に對して無禮横逆あり。又、事不順ありて、わが心になはざることあら

ば、是れ、則ち、善心をたこし、私慾を耐ふる學問の勤め、徳の進む所なりと思ひ、人の不順なるを堪忍し、わが身を省み、心を責め抑へて、怒りを懲らし、欲を塞ぎ、善に移り、過ちを改むべし。かやうの、わが心術を力むべき折節を、仇に思ひて、徒らに過すべからず。かく心になはざる所を、よく耐へ力めてこそ、わが心の徳も、學問も、進むべき理なり。かゝることにあはざれば、心を治め、欲を忍ぶ工夫進まず。天道は、春は生じ、夏は長じ、秋は收む。三時は、皆事あり。冬は、たゞ、生氣の隠れ靜まるまでにて、所業なし。夜更けて、人の寝いたりたる時、無事にして息むが如し。冬の氣閉藏するは、則ち是れ、來春發生の本なり。冬寒氣烈しくして、陽氣收り隠るれば、來春の陽氣熾なり。故に、冬暖かに、雷なりて、陽氣動き漏るれば、來春の發生の氣弱く、秋穀の登りも薄し。人、夜半の後寝されば、血氣寧まらずして、明日力弱し、人心も、靜なる時に養ひて、動く時の本とすべし。心靜ならず、動き騒げば、業を勤むるに力なく、迷ひて、誤り多し。

劉行簡曰く、天下の事、下人心に合ひ、上天意に合ひ、中大道に合ふ。惟、一言の

り。曰く、公のみ。公とは、私なきを云ふ。私とは、一向、わが身を利せんことを好みて、人の爲を顧みざるを云ふ。是れ、人我を隔つるなり。公とは、人我の隔てなく、我と人と、ともに同じく利するを云ふなり。公にして私なければ、道理にかなひ、天意にかなひ、人心にかなふ。故に、其心の誠自らあらはれて、人の譽も喜びもあつく、人の疑ひ憎むことなく、求めずして、天道の恵みも、人の愛敬もこれあり。また一言にして、上天道に乘き、下人心に違ひ、中大道に叶はざることあり。私の一字なり。たとひ天下に聞ゆるほどの善事を行ふとも、心に私あらば、まことの道にあらず。凡そ、私を行ひて、たとひ、一旦利を得て、禍なくとも、天の怒り、人の恨み憎み、身に報いて、必ず、禍にあひ、身恥しめられ、名を汚す。天道は、誠に畏るべきかな。是た、道理を知らざるのみならず、愚にして、わが身の損得を知らず、私を行ひて、福祿を得、身を立てんと思へど、かへりて、禍にあひ、身を亡ぼすは、わが身の損得をも知らざるなり。至りて、愚なりといふべし。人の心の内、道德の至りて尊く、至りて楽しむべき理あり。君子は、これを知りて

尊び樂しみて、外に求めず。少人は、これを知らず。徳を害ひ、道を失ひて、これを尊び樂します。たゞ、俗樂の卑しき業をのみ樂しむとし、利欲を専らとし、長く患ひ苦しみて、樂しみを失ふ。人となるものは、此樂しむを知るを貴しとす。是を知らずんば、人となれるかひなかるべし。此樂しむを知らんとならば、まことの學問をよくつとめて、其理を知るべし。後悔は、前に懲りて、後の誤りを戒むる益あれば、まことにこれ善事なり、されば賈誼も、前事を忘れざるは、後事の師なり、といへり。然れども、永く心の内にどいて、苦しめば、滯りて、必ず、心の病となり、和樂を破る。一旦戒めて後、其事をすて、かさねて、しばしば後悔して、心を苦しむべからず。たゞ、後日を戒めて、かゝる誤りなからんことを思ふべし。人の心の内は、常に恭敬和樂なるべし。恭敬は、慎み敬ふなり。恭敬ならざれば、心擅にして、悪しきかたに流れて、禮の本たらず。和樂は、和ぎ樂しむなり。和樂ならざれば、心愛ひ苦しむ、道理に順はずして、樂しみの本たらず。此二は、車の兩

輪、鳥の兩翼の如し。並び行はれて、乖かざるべし。いかなる惡しき俗人に交ることも流れて恭敬を失ふべからず。いかなる不幸なることに遭ふとも、心を苦しめて、和樂を失ふべからず。禮經に、禮樂は、斯須も身を去るべからずといへり。

富貴を極むといふとも、人欲だにあらば、其願ひつくることなく、貧賤にして慾すくなきに劣るべし。理義の樂しみは、位なくして貴く、祿なくして富めり。其樂しみきはまりなし。いかんとなれば、内に樂しみありて、外にねがひなければなり。

我が愚を知らず、我が誤りを知らずして、自ら是とし、自ら知とすると、吾が藝能の拙きを知らずして自ら誇ることは、皆、心明かならざる故なり。人をしるは、まことに難し。人の胸中に、善惡かくれて見ればなり。わが心中にある善惡は、わが身の事なれば、知り易かるべくして、却つて、人を知るよりも難し。いかんとなれば、わが身に私して、其惡しきを知らざればなり。故に、古語に曰く知人之謂知自知之謂明人を知るは、誠に難しといへど、わが身を知るは、人を知るよりも難ければ、是を明と云ふ。明は、知より猶優れり。吾が心明かなれば、わが身の惡しきを知らざるなり。

るものなり。故に、わが身に自慢して、人に誇るものは、其心聞き故、わが惡しきを知らざるなり。

言を聞きて信せざるは、聞くこと明かならざるなり、と易にいへり。人の善言と諫めとをきながら、其言を信せず、只、益もなき仇事のやうに思ふは、其心くらくして、善言を聞きわけざればなり。心明かなれば、能く其言の道理あることをきくわけて信ず。又、世俗の、才辨ありて言巧なるものいふことは、理もなきことを聞きて信ず。其言貌拙劣なれば、其言に道理あれども信せず。是れ、聽く人の聞き故なり。

わが身の飲食色欲財利などの慾に克つには、たとへば、強敵に對して、我が十分の力をつくして、防ぎ戦ふが如くすべし。かくの如くせざれば、私慾に克ちがたし。是れ、欲に克つ良法なり。もし、すこしも弱げなれば、欲に克ちがたく、つひに、欲克ちて、防ぎがたし。人過は、人の爲大敵なり、油斷すべからず。いかにもして、克つべし。

人の過ちは、氣質の偏なる所より起る。我が氣質のあしきを變ずる道は、己が過ぎ

たるを抑へて、足らざる所を努むべし。強過ぎたる人は、柔和なるべし。弱き人は、努めて勵むべし。速過ぎたる人は、遅緩なるべし。鈍き人は、努めて鋭く行ふべし。其餘も、みな、かくの如くすべし。むかし、西門豹といひし人は、性急なり。常に、韋を帯びて、戒めとす。韋は、軟柔なるものなり。董安于といひし人は、性緩し。常に弓の弦を帯びて、戒めとす。弦は、急なるものなり。かやうにわが惡しきを改むるに、志しあらば、いかに偏性なりとも、なごか氣質を變せざるべき。學問は氣質のあじき所をしりて、克つを要とす。是れ誤りをすくなくする道なり。かくの如くならざれば、學問の益なし。

事、急にして多しといへども、心は、急しく忙がはしかるべからず。心迫り忙がはしければ、和樂を失ひて、心を苦しむるのみならず、思案も詳ならずして、誤りたほし。

君子は、人を責むる心、常にすくなく、己をせむる心、常に多し。人を恨み憎む心、常にすくなく、人を宥し、堪忍する心、常に多し。小人は、此反なり。この故に、君

子の心は、常に平和にして、樂しみ多し。小人の心は、常に險しくして、憂たほし。

萬の事、情々思案して、後の誤りなく、悔なからんことを計るべし。思案なくして、怒りと慾とを去らざれば、後の禍となる。是れ、智者の所業にあらず。事を思案せずして、輕々しく行へば、必ず、誤りあり、後悔あり。もし、急なることあらば、故ら、よく思案して、詳に行ふべし。此の如くせば、後の誤りもなかるべし。急ぎて、心躁しく寧ならざれば、思案なくして、必ず誤りあり、悔あり。

怒りと慾によりて、少しの間、少しの事を堪忍せずして、莫大の誤りとなり、一生の禍となる。はては、身を失ふに至ることあり、慎むべし。すこしの間、慎まずして、禍に至るは、至りて愚なり。

人の身の禍あること、多くは、私慾より起る。私慾を擅にせざれば、禍なし。凡そ人の禍は、思はざるに、不幸にして、天より偶然くだるは稀なり。もし、あれども、事によつて免れ易し。私慾を行ひ、罪を犯して、自らなせる禍は、天よりくだる禍より多くして、免れがたし。それ、わが身を利せんとすれば、必ず人に妨げ

あり。人を妨げたる酬は、必ずわが身の害となる。人を妨げて、たとひ一旦幸にして、利を得、人の責めを免るゝといへども、必ず、天の責め身に酬いて、禍来る。凡そ、科を犯して、公に罪せらるゝは、目に見えて明かなり。天の責めは、目に見えずして、いつとなく降れる故、人しらす。其禍来れば、只、不意にふり来るやうに思ふは、僻事なり。

利を求むれば、必ず、害あり。福を求むれば、必ず、禍あり。故に、韓詩外傳に曰く、利は害の本、福は禍の先とす。求めざるに、自然に福来るはよし。われより求むべからず。我より求めたる福は、必ず、禍となる。只、わが身を慎み、分を安んじ、わが職分を力めて、天命に任すべし。利とは、財利のみにあらず。一切、わが身の爲に便よきことは、皆、利なり。我が爲に便よきことを計らば、皆、人に害あり。故に、わが利は、人の害なり。人の害は、又、わが害となる。たとへば、環の端なくして、廻りて又還るが如し。よく、此理をしりて、利を貪るべからず。

子曰く、不患人之不知己、患不知人也。人の吾を知らざるは、人の愚なるなり。

わが咎にゐらず。愛ひとすべからず。人の善悪を知らざるは、愚なるなり。自ら恥づべし。又、我が善事を、人に知られんと求むるは、小人の心なり。賤しむべし。人の過ちを誹り、不善あるを、甚しく責め辱しむべからず。必ず、人の恨みとなる。或は、科ある人を打叩きて、一旦心に快くすといへども、其人、もし、堪忍せずして酬はば、大なる禍となる。怒りを抑へて、後の禍をよく考へ、わが心に、十分快きを求むべからず。賤しき下部に對しても、此心遣ひあるべし。

慾すくなくして、わが身の足ることを知るものは、分限を安んじて、貧賤にしても、亦、樂しむ。樂しむ者は常に謙る。慾多くして、足ることを知らざるものは、富貴にしても、分限を知らずして、謙らざる者は、樂しむことを知らずして、外に求めてやまず。つひに、禍となること、亦多し。

抱朴子といへる書に、玄蟬潔饑、不羨三蛇腹穢飽といへり。言ふ心は、蟬は、清き露を飲み、飢ゑて腹空しけれど、蛇腹の糞土を食ひて、常に飽けるを羨ますとなり。しかれば廉潔にして貧賤ならんは、不義にして富貴なるに勝れり、不義の富貴羨むべ

からず。世に諂ひ、人を貪りて、富を得るは、樂しむべき理にあらす。貧賤なるは却つて、富貴にまさる道理もある。よく思ひてしるべし。

萬の事、正あり、中あり。正とは横邪ならざるを云ふ。是れ、善なり。中とは、過不及なくして、よきほどなるを云ふ。是れ、至善なり、咽渴く時、湯水を呑み飢るて食するは、是れ、正なり。横邪にはあらす。渴くとして、飲み過し、飢るたるとして、喰ひ過すは、中にあらす。よきほどに飲み喰ふは中なり。是を以て、萬事を推して知るべし。正なれども、中ならざれば、至善ならず。凡そ萬のわざ、過不及なく、よき程なるは中なり。是れ即ち道のある所なり。過不及ありて、よきほどならざれば、善事なりとて、道にかなはず。

我が身に才ありても、誇るべからず。才に誇れば、必ず、あやまる。其の上、人心信服せず。小才ありとて、聖賢の書を普く讀ます。歴代の史に博く通せずんば、古今天下の是非を辨へがたし。經書に聞くして、道をしらす。古今に通せずして、故き趾を考へず、小才を恃み、強ちに世の道理を分たんとすれば、誤り多し。たとへば、

星なき量を以て、物の輕重をはかり、曇れる鏡を以て、物の妍媸を分たんとするが如し。只、へりくだりて、人に向ひ、古を考へて、義理を明らむべし。愚なるわが心を以て、人を譽め誹り、僅なる才を恃みて、自ら是非を決すべからず。

人生、此日の再び得がたきことを知りて、時々、其事を力めて怠らす。日々此生を樂しみて憂へず。よく力め、よく樂しむ人は、一日を以て一月とし、一年を以て十年とし、十年を以て百年とす力めと樂しむを以て、身を終る。智者のしわざ、かくの如し。勤めと樂しみを知らざる人は、たとひ、百歳の長壽をたもつとも、常に怠りて、一生の間、何のなし出せる善事なし。是れ、力めざればなり。常に、愛ひ苦しみ多し。是れ、樂しまざればなり。かくの如くなれば、人となれるかひなし。生けるばかりを思ひ出にす。生を得たりといひがたし。飲食聲色を樂しむといへども、欲多く節なくして、却りて、身を害ひ、樂しみ未だつさざる内に、憂ひ早く來る。愚者のしわざかを以て欲を禮記に、君子は道を得ることを樂しむ、小人は欲を得ることを樂しむ。道くの如し。制すれば、樂しみて迷はず。欲を以て道を失へば、迷ひて樂しまずといへ

り。君子は、常に樂しみて日を送り、小人は、常に憂ひて、日を送る。衰老の身は、殊に、餘日すくなければ、一日を以て一月とし、一月を以て一年とする工夫をなすべし。一日一時も樂しみますして、仇に時日を送るは、愚なりといふべし。

樂しむは、人の心に生れつきたる天機にして、本、自らこれあり。されども、私慾あれば、耳目口體の欲に害はれ、喜怒哀懼の情に蔽はれて、此樂しみを失ふ。君子は、情慾に破られずして、常に、此樂しみを失はず。いかなる患難の事に遭ひても、此天然自有の樂しみを改めず。又、風花雪月の外境に觸るれば、心の内にある本然の樂しむ、外物と相和して、彌樂しむ。是れ、外物を以て、はじめて樂しむとするにはあらず。外物來りて、本然の樂しみを助くるなり。天地の道、陰陽の化、四時のめぐりは常に和氣あり。是れ天地の樂しむなり。此樂しむ、たゞ人にあるのみにあらず。禽の飛ひ、魚の躍るも、凡そ、禽獸の囀り啼くも、草木の榮わ、花咲き實結るも、みな是れ、天機の發生する所、萬物自然の樂しむなり。これを以て、人の心に、もとよめ樂しむあることを知るべし。もし欲に引かれて、此樂しみを失ふは、天地の道に乖

けり。いかなる横逆に遭ひ、不幸に遭ふとも、常に、此樂しみを失ふべからず。聖人動もすれば、此樂しみをとぎ給ふ。此の樂しむの、人に切なることをしるべし。仲尼顔子の樂しむは、我輩愚者の知るべきことにあらず。たゞ、愚人にも、各生れつきたる樂しむあることを知りて、樂しむを失はざる工夫あるべし。われも人も人慾盛なれば、此樂しみをしらす。樂しむと欲と兩立せず。樂しめば欲なし。欲あれば樂しむなし。此理をよく思ひて、辨へ知るべし。樂しむは、常人の事にあらずといふべからず。

心ば天君にて、身の主なり。常に、樂しましむべし。苦しむべからず。わが身貧賤にして、或は、不意の禍ありとも、これ、天命なれば、憂ふべからず。樂しむを失ふべからず。又、人のわれにあしきをば、忍びて宥すべし。憂ふべからず。かくの如くすれば、心の苦しみなく、樂しむ多し。身の貧しきを愛ひ、又、妄りに人を怒り憎みて、わが心を苦しめ害ふべからず。人の無禮にして、我を犯し侮ることも、愚なる故を思ひ、怒り憎むべからず。子弟のともがら、われに疎略なりとも、道を知らざる故

と思ひ、怒るべからず。心を苦しめて益なし。下部などは、ことに、習はし悪しければ、愚にして論しがたし。其悪しきを、戒め致ふるはよし。怒り責めて、詞と色とを烈しくすべからず。我が心の和樂を破り、人の恨みをとる。言と顔色と烈しからざれども、わが行ひ正しく、言に戯れなければ、人自ら恐れて、侮らす。心に主なければ、事を力むる時、はや過ぎて躁しく、又、たそ過ぎて怠りとなり、或は、事に先だちて過ち、或は、事に遅れて間に合す。主あれば、心つねに定りて、遅速なく、よきほどなる故、過ちすくなし。

徐孝節といふ人、切少より物を殺すことを戒め、蟻のあつまり居る處をも、踏み殺さんことを恐れ、よきて道をゆけり。其心善なりといふべし。此心をたしひろめて、まづ父母兄弟を愛し、人倫に及ぼし、次に、萬物に及ぼさば、仁愛の道、廣く行はるべし。善心をたしひろむる工夫、常に、かくの如くすべし。夫れ、活すことを好み、殺すことを憎むは、天の御心なり。天の物を憐み給へる御心をうけて、人の心とする所、即ち、仁なり。不仁の人は、人を恵み、物の憐むに心なくして、殺すことを好む。

かくの如く不仁ならば、他の才多しといへども、天道に乖き、人道缺けて、見るに足らず。

利は、天地より生じて、天下の人に與へ養ひ給ふ理なれば、天下の公物なり。われ一人の私物にすべからず。人と共に、同じく利を得れば、人々、各其所を得て害なし。身に私して、我一人利を得んとすれば、争ひ出で来て、却つて、我が身の害となる。義を行ひて、自ら來る利は、眞の利なり。わが益となる。貪り求むる利は眞の利にあらず。必ず、身の禍となる。是れ、利を求むるには非ず、害を求むるなり。

一指目を掩へば大山不見と、古語にいへり。人の心は、素明かなる物なりといへども、私欲の蓋ひありて、心體を塞げば、闇くして道理に通せず。故に、心を明かにして、是非に迷はざらんことを思はば、私欲を去るべし、欲されば、心明かなり。本心如二日月一嗜欲食之既と山谷が詩にも見たり。

古より、無道の人、其悪行、誠に、一事に止まらず、其品多し。されども、其内、

人の諫めを防ぎ怒るより大なる悪なし、と古人いへり。唐日本、昔より、人の行ひ悪しくして、身を喪ひ、家を滅ぼすも、皆、諫めを防ぐより起れり。深く戒むべし。世に處るには、人を憎み責むる心輕かるべし。重くすべからず。いかんとなれば、凡の人、書をよみ古を學ぶとも、道に乖く人たはし。泥んや、學ばざれば、世の道理の、善きも悪しきも知らず。知らずしてなせる僻事なれば、憎むべからず、憐むべし。頑なるを怒り憎むことなかれ。と尙書に見わたり。

我が身すら、わが心に叶はず。自らせじと思ひしことをも、誤りてすること多し。泥んや、人のわざ、わが思ふ如くなるべきやうなし。其上、人心の同じからざること、其面の如し。人のわが心に叶はざるを恨むべからず。

人の心は、時により變り易し。人の心も、わが心も、皆、待むべからず。是れ後悔なき道なり。

樂しみをしる人は、天を恨みず、人を咎めず、世に求めなくして、其分を安んず。樂しみを知らざるものは、是に反す。

人倫に交り、萬事を行ふに、心平かに、氣和して、寧なるべし。寧ならざれば、氣躁しく荒くして、道理明かならず。道を行ふこと難し。故に、まづ、心氣を治め、和平にして靜なるべし。血氣盛なる時は、氣逆上りて、心も共に定まらず。たとへば、氣の上る病あれば、心氣治らず、酒に酔ひたる時は、氣上りて心亂る。家を新に作りて、棟、椽首、梁柱など、いまだ落着かざる時、大風に遭へば、倒れ易し。材木折合ひて後は、大風吹きても、倒れがたし。人も血氣治らざれば、人に對するにも、心定かならず。浮氣にて落着かざれば、言も行ひも、理に當らず。戰場にて、敵と戰ふにも、氣上りて心靜ならざれば、動き騒ぎて、敵に勝ちがたく、退き易し。文字を書くにも字毎に、其所に落着きて、豊にみゆるは能書なり。文字落着かざるは惡筆なり。萬の事、皆、氣の下に降合ひて、靜なる時ならでは道理に適ひがたし。

心氣和平にして、人を咎めず。わが身にかへり求め、己を責むれば、身修まりて、樂しみ多し。此工夫、甚だ益あり。常に、これを以てわが心を修むべし。もし、此工夫を忘るれば、必ず、道を失ひ、樂しみを失ふ。古語に曰く、君子は己に求む、小人

は人に求むといへり。

心の器物狭き人は、わが智ひとつを用ゐて、萬の事に通ずと思ひ人の智を用ゐず。古語に、自ら用うれば、小なりといへり。わが智ひとつに待みて、人の智を用ゐざれば、世間の萬事、わが一人にて知りがたし。しらざるこそ多ければ小智といふべし。心の器物廣き人は、わが一人の智を用ゐず、廣く人に問ひて聞き、其よきを取り用ゐる故、諸人の知を合せて、わが智とす。是れ、大知とすべし。んそし人は、各得たる所あり。慣れたることあり。十人には、十人の知あり。百人には百人の知あり。各其人の長せる所を取り用ゐるべし。さばかり才ある人も、天下古今、もろくのことに、われ一人の知にては知り難し。一人の知は限りあり。衆人の知は極りなしといへり。天命は、天の降す所、人の受くる所なり。命は、猶命の如しとて、下知の意なり。天より降る故に、天命といふ。天命に常あり變あり。善を行へば福あり、惡をすれば禍あるは常なり。善人に禍あり、惡人に福あるは變なり。人の吉凶、禍福、壽夭、富貴、貧賤、萬の幸不幸、皆天の命するところなり。人間の萬事、天命にあらざることなし。或は生れつきて定まり、或は時により、不慮に命くだりて、偶然として、福にあひ、禍に遭ふ。求めても、命なければ得難く、求めざれども、命あれば得易し。只、人の法を行ひて、天命を待つべし。善を行ひて、福來るは、常の理なれども、もし、福あるは、是れ亦、天命の變なれば、愛ふべからず。凡そ、人天命を知りて、命に任せ、愛ひなき工夫をなすべし。天命を知らざれば、命の定めありて、福の求め難く、禍の去り難きことを知らず。利に就き、害を避けんとし、人に諂ひ、神に諂ふは見苦し、愚なりといふべし。故に論語に不知命無以爲君子也といへり。人の心、平生無事なる時、常に樂しみ多ければ、いかなる禍出で來ても、苦しまず。例へば、富める人は、凶年に遭ひても飢ゑず、血氣に強き人は、烈しき寒暑に中りても感ぜざるが如し。

もし、無事なる時樂しみなければ、俄に、事出來、禍來る時、憂ひ苦しみ、心を動かし、亂して取り失ふ。常の時、よく工夫して、心を養ひて、樂しみを深くすべし。心は、天君なり。つねに、樂しましむべし。外事に煩はされて、苦しむべからず。

不意なる禍に遭ひて、すべきやうなくとも、心を苦しめて、樂しみを失ふべからず。心静に思慮すれば、其禍を免るゝ思慮りも出来ることあり。行きつまり、心忙しかるべからず。心廣くして、よく思ひを伸ぶべし。

衣服

衣服は、身の表なり。人に對すれば、まづ見ゆ。此故に、古人、身を慎むの名目をつらぬるに、まづ衣服、次に言語、次に行と、次をなせり。言行と同じく相ならぶ程のことなれば、衣服をも慎みて、身に相應せる、正しきを選び用うるべし。相應せざるは正しからざるなり。相應とは、年と位と時と處とに似合たるを云ふ。染色繪様、若き人も、其年の程よりは、すこし、質素みて老いらかなるは、人の目にたゞずして宜し。かくの如くなるは、若きも老いたるも、高きも卑しきも、昔も今も似合はざることなし。年と位とより、わかやかに、洒落ばみたるは、賤し。大なるかた、太紋、大筋、すべて、人の目にたちて鮮麗に、又、奇しく異様なる染色服着たるは、た

れも、其身に似氣なくして、一概に人に見落さるゝものなり。かやうの衣着たる人は、位高き人も、賤しく見苦しめて、下部の如し。是を好むは、何の爲ぞや。大低は、衣服にても、人の心は推量らるゝものなり。位なくても、自ら重んずる人は、下着にもすべからず。凡そ、人の目だつべからざるは、相應なるべし。目にたつは、相應せざる故なり。帯も、古は、男女共に、小かりしが、今様は、廣くして見苦し。何の益ありや、しらす。

衣服は、儉素に虚飾すくなく、一般にして、賤しからざるが良し。また、貧しき人も、方めて、潔く垢付汚れざるを用ゐるべし。富める人も美麗を好み、無用の服多くすべからず。又、甚だ質朴に過ぎて、穢らはしく鄙野なるも悪し。染色は、正色を用ゐるべし。紫、蒨、黄などの間色、すべて、女子の服に近きを用ゐるべからず。紅、紫をば、褻の服、衾褥にもすべからず。

身の飾りに、心を用ゐる過すべからず。ひま費はて益なし。俗人奴婢の輩に譽められんとて、衣服を飾れば、職者に賤しめらる。何の益もなく、はかなきことなり。

左傳に、服の不衷は身の災なりといへり。着る物の衷しからずして、其身に合はざるは、身の災となる。此例、世に多きことなり。戒むべし。國語に曰く、服は心之文也。心の好むことを、身にも、必ず、服する故に、衣服は、心の外に表はるゝ文なり。正しからざる服着たるは、心の内見えて恥し、慎んで、擇び用うるべし。衣服は、常に用ゐて、毎時よき製法染色あり。時の好みに隨ひて、世の惡しき俗に移るべからず。

言語

言は、心の聲なりと古人いへり。人の心の内にあること、言によりて外に出づ。一言妄に發すれば、駟馬も追ひがたし。善きことも惡きことも、皆、口より出づ。口を慎めば、過ち少く、恥辱なく、禍なし。故に人の身の慎みは、口を慎むを、第一の力めとす。言たはければ、口の過ち多く、人に憎まれ、禍たこる。慎みて、多くいふべからず。殊に、人を誹るは、莫大の惡事なり。戒めて、人の非をいふべからず。

易に、心を安んじて、後、語るといへり。人に物いはんと思はば、先づ、わが心を安く靜にし、思案して、いひ出すべし。かくの如くせば、言の過ち咎めすくなかるべし。人に對して、ことばを出すに、事によりて道理を云ひつくさず。意を内に含み、ことばを残せば、言に餘味ありて、人感服して順ひ易し。人を諫むるにも、辭烈しからず、氣象和順にして、微め成していひて、其人の過惡を指し露はさず。是かへつて、人の心を感じしむ。言を慎みて、一言を出すにも、よく思案して、物をいへば、言語は、自らすくなし、無理に口を閉ぢて、いはざるにはあらず。言をば、必ず、信にすべし。かりそめの少しなることにも、偽るべからず。其事は、少なりとも、心を害する咎は大なり、誠の道を失へばなり。故に、萬のこと、美しくとも、偽りをいふは、人にあらず。我が心の神は、則ち天地の神なり。恐るべし。心に偽りとしらば、言ふべからず。偽りとしりて、わが心を欺くは、罪深し。

人と約をなさば、必ず、其信を固く守るべし。一度約したることを違へば、人にあらすと思ふべし。若し、其契約、義にかなはざることか、又力の及びがたきことにて、後に約を守りがたからんと思はれ、豫て約をなすべからず。輕々しくうけあへば、其約たがふ。慎むべし。論語に、信近於義、則言可復也といへり。人と約束したること、首尾違はざるやうにせんと思はれ、約すること、義理にかなへば、うけ合ひたる言の如く行ひとげられて、偽りなくして、首尾相違せずとなり。過ちを恥ぢて、偽り飾るべからず。是れ、心を欺き、人を欺くなり。既にわが過ちあらんは、すべきやうなし。誤らば、直に言ひ表すべし。隠して偽りかざるべからず。誤りて、又、人を欺くは、誤りを重ねるなり。いよく罪ふかくなる。言を出すに、其言、躁しからず、穩なるは、其心の修養あるなり。もし、言を出すに、躁しく險しきは、心の修養なしとせるべし。人過ちありて、もし、諫むべき人ならば、目前にて、其過ちを諫め、陰にては、其過ちをいふべからず。目前にて諫めず、陰にて誹るは、後互に漏れ聞わては、其人

の恨みも深し。面前にて順ひ、退きて後言するは、聖人の誠めなり。晉の世の崔浩と云ひし人は、目前に人の過ちを諫め、陰にて、其人を誹らす。故に、人之を重んじけるとかや。宋の劉貢父と云ひし人も、亦、かくの如くなりしなり。一言の過ちにて、莫大の禍となり。一事の過ちにて、一生の憂ひとなる、慎むべし。平生慎みある人も事によりて、怠り弛みぬれば、一言一事の過ちによりて、思ひの外に、大なる禍となることあり、一言一事も、慎まずんばあるべからず。古語に、病は口より入り、禍は口より出づ、といへり。言を慎みて、妄りに口より出さざれば、禍なし。飲食を慎みて、妄りに口に入れざれば、病なし。病と災との出くることは、天より降るにあらず、皆口より起ると、古人いへり。口の出し入れ、慎むべし。人の悪しきことは、わが心の中に知り辨へて、口には出すべからず。人を誹り、人を言ひ落すこと、不仁の甚しきなり。其上、わが身に於て、露ばかりも益なし。其人もしきかば共害あり。其誹るところ、其實たがはずとも、人を誹る

は、厚く柔順しき道にあらず。沉んや、凡夫の、人を誹るは、多くは理にあらず慎むべし。

人を誹れば、人また我を誹る。人を誹るは、即ち我を誹るなり。たとへば、天に向つて唾を吐くが如し其報ひ、甚だ速し。言逆りて出づれば、又、逆りて入る。我に出づる罪は、やがて、われにかへること、車の輪の如し。恐るべきかな。人を一分誹れば、人より三分誹り返さる。其の上、人に見たとされ、いやしめらる。益なくして損あり、愚なりといふべし。

人を誹るは、是れ、不仁なるのみならず。必ず、身の禍となることを知らず。是れ、不智なり。人を誹る一事にして、仁智の大徳を失ふ。殊に、我が同官同藝の人を誹るは、人を抑へてわが身を立てんとするなり。又、不義無禮と云ふべし。卑狹の甚しきなり。是れ、小人の業なり。自ら、恥ぢて戒むべし。

人を誹るは、其人に對せず陰にて竊に言ふことなれば、其人しるべからず。何の害かあらんと思ふは、愚なり。誹謗は、必ず、漏れ易し。俗語に、惡事千里を行くとい

ひ、又、壁に耳ありと云ふが如し。人のしらんことを恐れれば、言ふべからず。孟子に、人の不善をいふは、後の患ひをいかんすべき、といへり。

言を出すにも、わが身を省みて、分に過ぎたることをばいふべからず。分に過ぎたることをいへば、人に誹り笑はる。恥づべし。また、人きつて信すべからざることば、實事なりとも、言ふべからず。此心遣ひあるべきことなり。

わが善をば隠して自ら譽むべからず。人の善をば露はして、譽むべし。わが誤りをば飾るべからず。露はして改むべし。人の過ちをば露はすべからず、蓋ひ隠すべし。

わが身に、いかなる才能善行ありとも、口に出して誇るべからず。其才能に誇れば其才能を失ひ、其善行に誇れば其善行を失ふ。惜しむべし。

我が身を譽めざれども、わがよきもあしきも、人の心に知るものなり。たとひわが才行あらずして、人知らずとも、わが身の徳に害なし。わが身の才能いみじくとも、自ら表はし譽むるは、自ら媒すと云ふ。賤しむべし。其不徳のほど露はれて、一概に、人に見たとさるゝわざなり。

凡そ、人の忌み嫌ふこと、言ふべからず。人の生れつき、不具片羽なる者あり。又其行ひ、さきに、大なる過りありしものあり。或は、親先祖卑しかりしものあり。此類、言ひいだせば、さく人嫌ひて、恨み怒る。是れ、世俗の所謂さしあひなり。あつて用ゐて、言ふべからず。

言多く、無用の枝葉しげければ、相對する人疲る。同じことを繰返せば、さく人なく。如此なれば、さし立ちたる用ある道理はさくわす、言すくなく、用あることを言ひて、道理明かに詳なるべし。辭は簡要を尊ぶと古人もいへり。無用の言を出さず、有用のことをいふべしとなり。

人の所業、我が心になはすとも、宥め恕して、左こそありなんと思ひて、怒り恨むべからず。もし、心の中に怒り甚しくとも、怒りやみて、本心になるまでは、耐へて言を口に出すべからず。怒りの熾なる時、早く口に出だせば、必ず、過言いで、後悔あり。心を和げ、氣を平かにし、怒りやみて後、言ふべきことはいひなすべし。とはなすべし。酒に酔ひたる時は、最も、言を慎みていふべからず。酒醒めて後、言

を出すべし。人に文を送るも同じ。怒り止み、酒醒めて後、文を書くべし。是れ皆、後悔なき道なり。言よりも、げに、文は後に遺るものなり。文を書くに、殊に慎みて、怒りの内に書くべからず。

世俗の語り傳ふること、虚事多し。悉く信すべからず。ことに、怪しきこと、多くは偽りなり。神佛の奇特も、俗人の語り傳ふことは、虚事多し。凡そ、正法には奇怪なし。奇怪あるは、正法にあらず。奇怪なりとて、貴ぶべからず。神佛をほめんとて、なきことをつくり出し、或は似たることを、真に言ひなし、奇怪なることを言ひつけて、却つて、神佛の徳を汚すことを知らず。鬼魅狐狸の所業には、奇怪なることもあり。それも、多くは虚事あり。悉く信すべからず、愚なる人は、漫然なる虚言を信じて、迷ひ易し。虚言をつくりて、語り傳ふること、世にたほし。信すべからず。妄に、人の言に任せて、語り傳ふべからず。人の胡亂なる言を信じて、又、人に語れば、我も亦、虚言をいふの罪あり。慎んで、人に語るべからず。怪しきことを耳に聞くと、目に見ざることを、確ならざるをば、口にいふべから



ず。必ず、虚説多し。人の妄りに語り傳ふる神變奇怪なることを、我も、亦、語れば、
 世に傳はりて人を迷はすこと多し。愚なる人は、聞くことに迷ひて、偽りを信じやす
 し。怪しきことは、語るべからず。確に見たることにも、心目の病によりて、怪しき
 こと見ゆ。又、怪しき見ゆることも、故ありて、怪しからざることも多し。
 人の過ちを正して、言ひさかせ、改めんことを教へ勸むるは、善事なり。既に過ぎ
 去りたる過ちを、返すく言ひ出し、咎むべからず。凡そ、人の誤りてしつることか、
 又、知らずして仕損じたることは、力反ばず。其誤りを告げ聞かすべし。しばく言
 ひ出して、責むべからず。其の人わが身を責めずして、恨み怒りて背く。
 古語に、其國に居ては、其大夫を誹らすといへり。況んや君を誹るは、大なる科な
 り。古語に、臣の不忠、君を誹るより大なるはなし、といへり。たとひ、君に僻事あ
 りとも、臣たるものは、隠して語るべからず。又、我が身其位に居らすんば、國政の
 是非を評議すべからず。下として上を誹るは、不忠不敬なり。慎むべし。上を誹る人
 ありとて、それに雷同すべからず。口を閉ぢて、語ることもなけれ。上たる人は、わが

行の誤りを、下なるものにはせ誹らせて、博く聞くべし。下の誹りをきくは、是
 れ、上たる人の幸なり。人の口を閉づるは悪しく、口を閉づれば、却つて誹り多し。
 誹らすれば、後は誹りなし。此こと、古人の教明白なり。川の水は、下を掘り流せば、
 水の愛ひなし。下を堰き止むれば、塞がりて、横流の災となる。人の口をとむるも、
 亦かくの如し。故に、明君は、人の口を閉ぢずして、人にいはせ、下の誹りをきくこ
 とを好めり。帝堯は、諫めの鼓を置きて、諫めをき、給ひ、殷の湯王は、誹謗の木を
 立て、政のあやまりを誹らしめ給ひしかや。
 凡そ、人を知ることば、至りて難きことなれば、人の口と、わが目利とに任せて、
 妄りに人の善悪を決すべからず。然るゆゑに、譽むるも、誹るも、輕々しく妄りにす
 べからず。歳月を待つべし。即時にはやく人を譽め毀れば、必ず、誤りて、後悔あり。
 われ人を悪しきと思へど、さもなくして、却つてよきことあり。善きと思へど、又、惡
 しき人あり。人の譽め毀りも、妄りに信じがたし。人の口と、我が心を以て、善悪を
 定むべからず。人の口わが心、二ながら證としかたし。

面前に人を譽むるは、諂ひにちかし。もし、譽むべきことあらば、其人に對せずして、他人に對して、譽むべし。其人の感も、亦深し。面前に人の過ちを正すはよし。退きて、陰で誹るべからず。

凡そ譽め毀ること、誤りて理に違へば、わが人をしらざる不智のほど露はれて、恥かし。慎んで、妄りに人を譽め毀るべからず。

人を譽め毀ること、慎んで過不及なかるべし。人の小惡を大惡に言ひなし、小過を大過に言ひなし、虚なることを實に言ひなすは、讒言なり。又、左程なきことを、甚しく人を譽め過すも、正直の道にあらず。諂ひて、其人に私するなり。譽め毀ること、かるくしくすべからず。たとへば、權量を以て、物の輕重を量るが如くなるべし。一毫も輕くし重くして、過不及あるべからず。譽むべからざる人を譽め、毀るべからざる人を毀り、或は譽め過し、毀り過すは、ともに不智なり。論語に、子貢曰く君子は一言以て智とし、一言以て不智とす。言慎ますんばあるべからずといへり。よき人は、許可を慎むとて、人を妄りに許し譽めず。されども、小善をも棄てず、一善

をも用ゐるは、君子のする所なり。人の善をば持離して、稱譽すべし。惡を隠して、善を譽ぐるは、聖人の行ひなり。學ぶべし。

たよそ、人を諫むるには、法あり。たとひ、わが子我が弟を諫むるにも、聲をあらしげ、言を荒くして、惡口し、辱しむるはあし。如此すれば、さく者、腹だち恨みて、心に服せず。却つて、其諫めに背きて、順はず。こゝを以て、人を諫むるには、心を平和にし、ことばを順にし、道理を正しく諫むべし。まづ、人のよきことを譽めて、人の心を喜ばしむべし。いかりて喜ばされば、諫めても、うけ用ゐがたし。これ、人を諫むる手段なり。凡そ、人を諫むるには、人の氣質によりて、直諫諷諭の二の法あり。しらすんばあるべからず。其心和順にて、義理明かなる人ならば、直諫すべし。直諫とは過ちを言ひ露はし、理を直に伸べて、是非をまげず、強く諫むるなり。かくの如くなれば、聞く人、恐れて順ふ。孔子の法語の言とのたまふ。是なり。又、氣質和順ならず、義理明かならば、諷諭すべし。諷諭とは、すぐに其人の過惡をさし露はしてはす。まづ、其人のよき所を譽げて譽め、其人を喜ばしめ、其人の

心に願ひて逆はず。たい、其事の損あると、益あるとを説きて、得心せしむべし。或は、他事に准へて、善悪得失を述ぶべし。かくのごとくすれば、きく人腹たすして、喜びて諫めをきき願ふ。孔子の、巽與の言とのたまへる、是なり。人を諫むる法は、此二なり。其人の氣質によりて、諫めの法かはるべし。直諫すること本意なれども、正直につよく諫めても、きく人の耳に逆ひて、うけ用ゐざれば益なし。明君賢者ならでは直諫によろしき人は稀なり。よのつねの人ならば、諷諫すべし。諷諫をよくして、人のよくきゝいたる例多し。是れ、諫めのよき手立なり。諫めの道をしらすで、言を荒くして、人に逆ひ、妄りにいへば、人怒りて、必ず、きゝいれず。人に益なくして、我が身の禍となる。殊に、我が親に直諫して腹たすしめ、親喜びされば、親子のうちとくなる。大なる不孝なり。親を諫むるには、法あり。

易に曰く、納約自牖。牖は明かなる所なり。たとへば、家の内にある人に、外より物を言ひ入るゝに、壁越しにいへばきこわす、牖よりいへば、きこゆ。諫めを言ふも、亦、かくの如し。いかなる愚なる人も、必ず、いづくにぞ、片端に道理開けて、

明かなる所あり。或は、好む所の欲あり。其の所をよく見つけて、言ひ入るれば、きゝ入れ易し。此諫めやうのよきこと、古も、さる例多し。塞りたる處をしらすして、いかに忠をつくして諫むとも、きゝ用ゐざれば益なし。

人の誤ちをいさむるには、誠あまりありて、言足らざるがよし。心を内に含みて、言すくなく言ひ残して、餘味深かるべし。人のあしきことを言ひつくさず、人の耳に逆はずして、人に、ひとり其あやまりを悟らしむるをよしとす。人のあしきことを、ことごとく言ひ顯し、烈しく争ひぬれば、人怒りてうけ用ゐず。是れ、人をいさむる道にあらず。温厚にして理明かなるが却つて、よく人を感せしむ。是れ、烈しく責むるに勝れり。

徐偉長曰く、君子非其人、則弗與之言。其人にあらずとは、道理を教へ告げて、よく其理をきゝわかつべき智なく、聞きて信じ用ゐるべき誠なき人を云ふ。かやうの人に、言をつげても、益なし。凡そ、善言を聞かしても、悟らず。信せざるは、其人愚なればなり。

人の悪しきを諫むるに、はじめより、卒爾に、其事をすぐに指していへば、たはやうは聞入れず、かへりて、怒りを催す。只、其事となく微めなして、人の心に憎からず感じて、聞入るゝこそ宜しかるべけれ。

喜ぶ時の言は、誠すくなし。怒る時の言は、敬すくなし。喜び怒るとき、殊に、言語を慎みて、喜怒の爲に、心を破らるゝことなかれ。

末の世には、風俗薄くなりて、唐日本の文をつくるにも、諂ひかざりて、偽り多し。政のよきを譽むること、堯舜の御世にも越わつべし、と云ひ、人の善を譽むること、聖賢の如く言ひなし、或は、知仁勇の三徳備はれりなご云ひ、武略を譽めては、孫呉にも劣らずと云ひ、手跡を譽むること、王義之にも及ぶべしと云ひ、詩文を譽むること、李杜、蘇黄に同じかるべしと云ひ、和歌は、貫之躬恒にも劣らず、和文は、紫式部、清少納言が如しと云ふの類多し。さほどになきとは、心の内に知りながら、風俗の悪しきに随ひて、偽り諂ひとなることを知らず、かゝる悪しき習慣にしたがひて、正直の道理を失ふべからず。

君子は、人の善を擧げて、人の悪を隠し、人の長ずる所をとりて、短なる所を宥す。厚しと云ふべし。小人は、人の善あるをばほめずして、其の過をあげてそしり、人の才の長じたる所をば擧げずして隠し、其才の不得手にして短なる所を露はして誹る。薄きことの至りなり。人の不得手なる所を言ひ露はせば、恨みをとる。

主君は、言ふに及ばず、父母兄夫の、われに物いひかけたるに、其答へ明かに聞かざるは恨めし。甚だ、無禮なり。父兄夫など、我に問ふことあらば、道理の正しく聞ゆるやうに答ふべし。親兄夫は、いづれも親しければ、其親しきを持みて、答への無禮なるは悪し。よき人は、われより下ざまなる人に對しても、侮らす。故に、答へ明かなり。況んや、われより上なる人をや。

人のいふ言、きゝいれずして、たい、わが道理のみを云ひたてんとするは、甚だ無禮なり。人にも道理をいはせて、きゝて後、わが思ふ處を述べし。

古語に、流丸は甌臬に留まり、流言は知者に留まる、といへり。甌臬とは、凹き所なり。丸き玉を投ぐれば、轉じて止まず。されども、凹き所に留まる。流言は、根な

しごと、訓む。實もなき仇なる雑説なり。愚者は、是を誠ぞと心得て、信じ語り傳ふれば、世にあまねく流布して止まず。知者は、不實なることを信せずして、耳に聞けども、口にいはず。其耳に留まりて言ひ散らさず。是れ、流言は知者に留まるなり。止むことを得ずんば、人を誹り、人を譽むることなくんばあるべからず。されども、妄りに、好んで人を譽め毀りて、口には非多き人は、古人の戒むる所なり。止むことを得ば、妄りに人を譽め誹るべからず。誤ること多し。

躬 行 上

善を好み、悪を嫌ふことの誠なるは、大學の誠意のことにて、身を修め、道を行ふ初めなり。善を好み、悪を嫌はざれば、道の行はるべきやうなし。學者の、最初より勤むべきこと、是より急なるはなし。善を好むことは、たとへば、よき色を好むがごとく、悪を嫌ふことは、あしき臭を嫌ふがごとくすべし。是れ、誠に好み嫌ふなり。諸人の嫌ふこと多けれど、惡臭はと思ひべき物なし。好むこと多けれど、好色に過ぎたるものなし。是れ皆、諸人の眞實に好み嫌ふものなれば、善を好み、悪を嫌ふことも、亦、如此眞實なるべしとなり。是れ、誠によく人を論すべきたとへなり。もし、心の内に、既に善惡をしれども、好み嫌ふこと實ならずして、善を行はず、惡を去らざるは、これを自ら欺くと云ふ。自ら欺くとは、わが心の内、實ならざるを云ふ。善を好み、惡を嫌ふこと、誠ならざれば、萬の行ひみな偽りとなりて、道行はるべからず。たとへば、草木の根なきが如く、家を造るに、基なきが如し。行ひの本たゝず。こゝを以て、道を行はんと思はれ、先づ、此志しを立つるを初めとすべし。

力行の道は、其大綱は、身を修めて、五倫を篤くするにあり。身を修むるは、道を行ふ本なり。身修まらざれば、五倫の道行はれず。身を修むる條目は、言を忠信にし、行ひを篤く慎み、怒りを懲し抑へ、慾を耐へ塞ぎ、見きゝする所の善に、早く移りて、力め行ひ、わが過ちをしりて、速に改むるにあり。其上、人に對して、道を行へども、人順はずして、行はれざることをあらば、人を責めずして、自ら省み求めて、わが善の至らざることを責むべし。

凡そ、人の身の業多ければ、約めていへば、言と行との二に過ぎず。言を慎みて、信にし、行を勤めて、篤く慎めば、身修まる。故に、言行を慎み篤くするは、身を修むるの道なり。

言行を分てば、人の身の業四となる。視聽言動なり。此の四の業に、皆、なすべき所の定れる法あり。是を禮といふ。禮にしたがひて、視聽言動をなすべし。四の事の爲すまじきことを爲すは、非禮なり。禮は、例へば、工の墨かねの如し。すみかねを用ゐざれば、材木あれども用いたす。禮を用ゐざれば、視聽言動皆道にかなはず。凡そ、人の人たる所は禮なり。禮なければ、禽獸に近し。故に、禮は身を修め、道を行ふ則なり。君子は、常に禮を守り行ふ。小人は、常に禮に乖く。是れ君子と小人との別るゝ所なり。

視聽言動は、人の身の四の業なり。視は、又、心の動にして、其の本なり。善を好み、悪を嫌ふことを誠にするは、視を慎むの道なり。

善を行ふに、其の心に、義と利との分ちあり。義とは、我が行ふべき公の理なり。

私なくして、我が爲にせざるなり。わが身の爲にするは、義にあらす。利とは、わが身の爲にする私の心なり。公ならざるをいふ。萬の事を行ふに、先づ、義か不義かを省みて、義に随ひ行ふべし。其の行ふこと善なりとも、其の心、義に随はずしで、わが身の利分の爲にせば、是れ、私なり。君に仕ふる一事を以ていはし、奉公をよく勤むるは、善なり。眞實に忠をなして、わが身を忘るゝは、義を正しくするなり。もし、奉公を努めて、露ばかりも、君の恩寵を得ん爲に努むる心あらば、是れ、利を計るなり。義にあらす。凡そ、義とは、なすべきことをなして、わが身の利の爲にする私なきを云ふ。されども、義理にかなへば、人喜び随ひ、事整ひ行はるゝ故、利は求めずして自ら來る。自ら來る利は、義に害なし。利を求むるは義に害あり。例へば、天下に聞ゆる程の善を行ひても、身の爲にするに志あるは、利なり、義にあらす。義と利とを分つこと、第一つとむべき心術なり。

善を行ふとは、天性に生れつきたる仁義禮智の本心に随ひて、孝弟、忠信、慈愛、恭敬、温和、辭讓、剛勇、廉恥などを、時に随ひ、事に随つて、行ふを云ふ。さばか

りの善を行ひても、名利を希ふ心ありて行ふは、誠の善にあらず。善と行ふには、唯一筋に、義理に専にして、名利の心なかるべし。

衆人の行、萬事につきて、過と惡とあり。過とは、心に惡なれども、知らずして理に違ひ、或は、心つかずして、理に違ふを云ふ。惡とは、善惡は知りながら、慾にひかれて、理に違ふを云ふ。是れ、自ら欺くなり。身を修むるには、過惡を改めて、善に移るを力めとすべし。聖人は、過なし。賢者以下は、過なきことなし。殊に、凡人は過多し。何ぞ今の世に過なき人あらんや。人の諫めをきくても用ゐず、われに過あれども知らずして、過ちなきと思ふ人あり。是れ、自ら修むるに志なき故なり。もし、自ら修むる人は、過多きことを知るべし。自ら省みて、わが過を知り、人の諫を聞きて、わが道を改め、善に移るべし。

常に、我が身を省みて、先づ、我が過を知るべし。すでに過を知りなば、速にあらたむべし。尙書に、過を改めて、吝ならずといへり。吝とは、惜しむなり。過ちを惜しまずして、早く改むるを云ふ。孔子も過つては、則ち、改むるに憚る

こと勿れと宣へり。わが身の過を知らざるは、愚なり。過を知りて改めざるは、則ち、惡なり。知らずして過つより、猶、其罪重し。

過は、必ず、氣質の偏より起る。剛なる人は、心強き所より過起り、柔なる人は、心弱き所より過たこる。氣質の偏なる所に克ちて、過なからんことを求むべし。學者、常に、わが氣質の偏を察し、其の過を省みて、改むべし。かくの如くせざれば、學問の益なし。是れ、學者の専ら力め行ふべき所なり。過を改むるは、氣質の偏に克つ道なり。氣質の偏なる所には、克ち難し。常に、力めて十分の力を用ゐるべし。

わが身、聖人にあらず、過多きは宜なりとて、過を知りながら、改めざる人は、無下に、道に志なき人なり。自暴自棄と云ふべし。かやうの志なき人に習ひて、わが過を宥すべからず。

人の目は、百里の遠きを見れども、其の脊を見ず。明鏡と雖も、其の裏を照らさず。離婁が明目なるも、其のまつげを見ることなし。こゝを以て、人知ありといへども、

わが身の誤りを知りがたし。故に、君子の學は、専ら、わが身を省み、人の諫めをさ
 用ゝ過を知りて、改むるを主とす。子路は、我が過を人の告るを喜べり。故に、
 百世の師なりと、程子もいへり。人を知ること、誠に難しといへど、わが身の悪しき
 を知るは、また人を知るよりも猶かたし。こゝを以て、わが過を告げしらする人あ
 らば、まことに喜ぶべし。人わづかなる財を贈り、或は、酒肴を送るをも、うくる人、
 これを喜ぶ。況んや、いひがたき諫を云ひ、自らしりがたき過をさくをや。わが身
 に於て、かゝる大なる益なし。諫をさくこと、豈に幸ならずや。子路の喜ぶること、
 宜なるかな。過をさくことを嫌ひ、諫を防ぐは、悪しきことの至りなり。諫をさ
 て、過を改むるは、醫を招きて、病を癒すが如し。もし、過あれども、諫を防ぎ
 て、人の正すことを嫌ふは、病を育て、醫を嫌ふが如し。其の身を失へども省みず、
 悲しむべし。

顔子は、過ちをまたせず。言ふ意は、一度、過としれることは、再び行はず。ま
 た顔子は、不善あれば、未嘗不知、知之未嘗復行と易に見たり。いふ意

は、わが身に過あれば、必ず知る。是れ、知ることの明かなるなり。過を知れば、
 必ず行はず、是れ行ふことの強きなり。
 論語に、君子の過ちは、日月の食の如し。過てば、人皆是をみる。更むれば、人皆
 仰之といへり。君子の心は、青天白日の如く、洒落にして、一點の蓋ひなし。故に、
 過ちを蓋ひ隠さずして、早く改む。日食月食をば、天が下の人、誰も仰ぎ見て、隠れ
 なし。しばし、光かくれども、懸てもとの如く、明かになれば、日月の光明に少も瑕
 なし。君子の過、かくの如し。また論語に、小人過也必文といへり。小人は、
 過を耻ぢて文り、其の過を蓋ひ隠せば、正直の道理を失ひ、是非をいひ枉げ、偽
 りて、つひに過を改めず。甚だ、見苦し。是れ、小人の心習ひなり。賤しと云ふべ
 し。尙書に、過ちを耻ぢて、非をなすことなかれといへり。賢人すら過あり、また
 況んや凡人をや。只、過つてよく改むるを、君子とすべし。
 人の善を見ては、我も、また此の善あらんことを思ひ、是を學び行ふべし。人の不
 善を見ては、我も、又此の不善ありや、と身を省み畏れて、もし、あらば改むべし。

如此すれば、見聞する所の善悪、皆、わが助となる。老子の、善人は不善人の師、不善人は善人の資といへるも、此の意なり。

古の賢者は、わが過をきくことをこのみ、人の諫めを喜べり。諫めをきくと、過を改め善に移れば、道にすむこと極りなし。善なること、これより大なるはなし。また古の賢者は、人に譽めらるゝを喜ばず、わが善をきくことを好まず。わが善をきうては、益なきのみならず、もし少しも、わが身に誇る心出で、善をなすに怠らば、大なる害なり。今の人は、わが過をきくことも好まず。人の我を譽むるを悦び、わが善をきくことを好む。世に諂へる小人多き故、譽むる者多し。其を誠ぞ心得て、身に誇り、善を行ふに怠るは、愚なり。末の世の人は、唐も日本もすべて、人の諫めを好まず。故に、人を諫むるを、偏に、世慣れぬ頑なる人と思へり。父として子を諫むれば、我が父は老耆せりと云ひ、又老人は今の風を知らずとて、誹り怨む。臣として君を諫むれば、驕り、無禮なりとて、怒り遠ざく。こゝを以て、人ごとに、世の俗になれ人の欲にしたがひ諂ひて諫めず。此の風、若し、世に行はれ、風俗とな

りなば、善は、日々に廢り、悪は、日々に盛になりて、道行はるべからず。悲しむべし。凡そ、諫を言ふ人、有りがたし。古來、唐も日本も、諫をよるこふ人は、最も有りがたし。故に、諫むる人も稀なり。

人に對して道を行ふに、人われに隨はずば、人を責むべからず。たゞ、わが身に立ちかへりて求むべし。是を自ら反すと云ふ。此の工夫肝要なり。人を愛して、人われを親しますば、わが愛の、未だ至らざる故とたもふべし。人を禮して、人われに無禮ならば、わが禮、未だ至らざる故と思ふべし。人を諫めて、治まらずんば、わが智の至らざる故と思ふべし。是れ、人を責めずして、わが身にかへり求むる工夫なり。かくの如くすれば、人従ひ易し。従はざるは、猶、わが誠の至らざると思ひ、其の實を努むべし。われに誠あれど、人背くは、道理もなき妄人なり。禽獸に近き人なれば、其の人と是非を争ふべからず。

中庸に曰く、言願行、行願言。言ふ意は、言と行とは相違なかるべし。言を出すに、わが身の行を省みて言ふべし。事を行ふには、己が言を省みて行ふべ

し。言ふことは易く、行ふことは難し。故に、言は控へていひ、行は言より過すべし。此如すれば、言と行と相遺なし。口にいふことあまり有りて、身に行ふこと足らざるは、是れ、言行の背けるなり。耻つべし。

善も悪も、必ず、小を積みて大に至る。故に、善は、小なりとて棄べからず。悪は、小なりとて行ふべからず。

古語に、忠臣は二君に仕へず、烈女は兩夫に改めずといへり。君子の道、節義を守るを重しとす。節義とは、臣の君に仕へ、婦の夫に事ふるに、一筋に、忠節義理ありて、二心なく、二君に仕へず、兩夫に改めず。もし、不幸にして、わが身艱難に苦しむとも、君を棄て、夫に背きて身命を惜しむべからず。命を失ふとも、忠貞の志を改めざるを、節義と云ふ。萬のこと、いみじく才能ありて、麗しき人も、節義を失ひて、君に背きて難を通れ、夫を棄て、人に従はば、其の餘は見るに足らず。一度節義を失ひて、利ある方につき、害ある方を通れ、或は、死ぬべき時に死なざれば、一生の名を汚すのみならず。後代までも、長き悪名をながす。凡そ、人生前の血肉をのみ、

わが身と思ふべからず。死後の善悪の名も、亦、わが身の内なることを思ふべし。生けるもの、必ず、一たび死なすと云ふことなし。節義を失ひて、かひなき命を生きて例へ、百年の齡を保ち、富貴を極むとも、人の道を失ひて、世に生けるかひなくば、何の樂しむかあらんや。是れ、人の力め行ふべき大節なり。

凡そ、人の力め行ふべき業、三あり。願ふ所も、亦、三あり。一には務業、二には養生、三には行義なり。務業とは、四民ともに、其の家の業を務むるなり。士は、君に仕へ、農工商は、各、其の家業を務めて、其の衣食を求むるを云ふ。家業を務めざれば、飢寒貧窮をまぬがれず。是れ、諸民の先づ務むべきことにて、財祿あらんことを希ふ所なり。業を務むれば、衣食と居處を得て、身を養ふ生計は、其の内に入り。二には、養生は、飲食色慾七情の内、慾を薄くし、起居動靜の形氣を慎み、風寒暴濕の外邪を防ぎ、生命を養ひて、病なく長壽を得んことを希ふを云ふ。生を養はざれば、必ず、病生じて、身を苦しめ、又、生れつきたる天年を保ちがたし。是れ、又、人のよくかむべきことなり。三には行義は、身を修めて、人倫の道を篤く行ひ、

道理にかなはんことを願ふを云ふ。義を行はざれば、人道を失ふ。凡そ業を務めて、富貴に居り、生を養ひて、長生を得ても、人の道なくんば、禽獸に近くして、生けるかひなし。古の聖人、これを憂ひて、師を立て、學を立て、人倫の道を教へ、義理を知らしめ給ふ。此の三の内、務業より、養生はたもく、養生より、行義はたもし。いかにとなれば、務業は、富貴を極むるを宗とす。國土を傾し、高位に昇るは、富貴の極まりなり。されども、壽命なければ、富貴も用なし。只今、人ありて、汝に國土を譲り、高位を授くべし。然らば汝が命を奪ふべしとならば、至りて欲深き愚なる人も、命を失ひて國土と位とを得んと思ふ者あるべからず。しかれば、富貴より命は重きにあらずや。故に曰く、務業より、養生は重し。又、君父の爲に、命を捨つるは云ふに及ばず、朋友と連れ立ちて、道を行くに、もし、向ひより人來りて、朋友と口論し闘はば、士ほどの者は、其の友を見捨て、遁ぐる人あるべからず。闘ひて死すれども、願みず、又、僅なる祿を得て、君に仕ふる下部も、主人の爲命を捨つるは珍しからず。是れ、生命より義理は重きにあらずや。凡そ、此の三は、天下

の人、生れつきて、各其の心に願ふ所にして、又行ふべき當然の道なり。力めて怠るべからず。其の内に、輕重あることかくの如し。義理の、生命よりも富貴よりも、重く貴とすべきこと、是を以て知るべし。然れば、命を惜しみて、義理を失ふは、輕重を知らざるなり。況んや、利欲によりて、大なる義理を失ふは、いふに及ばず。凡べての人、財祿を得ることを好まざるはなし。これを好まば、家業を能く務むべし。又長生を好まざるはなし。これを好まば、養生の道をよく力むべし。又、義を好まざるはなし。これを好まば、學問を勤めて、義理を知るべし。恩を報ゆること、人道の大節なり。禽獸は恩を知らず。恩を知るを以て人とす。恩を知らざるは、禽獸に等し。是れ、人と禽獸と分るゝ所なり。是を以て、恩を報ずるは、人道の大節なりといふこと、宜ならずや。恩を知らば、必ず、報ゆべし。知りて報せざるは、知らざるに同じ。恩を報ずるには、誠を以てすべし。人に四恩あり。天地の恩、父母の恩、主君の恩、聖人の恩、此の四恩、忘るべからず。天地は人の大父母なり。父母の氣は、即ち、天地の氣なり。人は、天地の氣より

生る。又、生れて後は、天地の養を受けて、身を立つ。故に、天地の恩は、廣大にして極りなし。何を以てか、其の恩を酬いんや。天地の御心に従ひて乖かざる。是れ、天地に仕へ奉りて、孝をつくし、其の恩の萬一を報ずる道なり。天地の御心に従ふとは、何ぞや。人たるものは、天地の、萬物を生み養ひ給ふ。其の御心に従ふとは、是れ、仁なり。仁とは哀憐の心なり。仁を失はざるは、天地の心にしたがふなり。仁を行ふ道、いかに。天地は、其の生める所の人を厚く愛し、次には、萬物を愛し給ふ。其の心にしたがひて、人倫を厚く愛し、次に、鳥獸以下の萬物を愛して、害はざる。是れ、天地の御心に従ふなり。即ち是れ、仁なり。仁を行ふは、天に仕へ奉りて、其の大恩の萬一を報ゆる道なり。天地は、人の大父母なり。人は、天地の子なれば、是れ、天地に仕へ奉る孝の道なり。人となる者の一生力め行ふべき道、是より大なるはなく、是より急なるはなし。人となる者、必ず、知らずんばあるべからず。此のごと、前卷に既にいへり。初學の人に知らせんために、屢々いふなり。

父母吾を生りといへども、其の生を受けし初は、天地の氣を取りて生ず。是れ、天

地は生の本なり。其の上、生れて後、幼きより、身を終るまで、天地の養をうけて天地の生ずる物を、食とし、衣とし、家とし、器として、身を養ふ。天地の性をうけ、五常の徳を心に生れつきて、萬物の靈となり。天地の内に住みて、天地の厚き恵みをうく。生をうけし初より、身を終るまで、天地の恩をうけしこと、かくの如し。かくる大恩あることを悟りて、身を終るまで、天地に仕へ奉りて、孝を行ひ、其の極まりなき徳に報ひんことを思ふべし。是れ、人間の一大事なり。故に、度々くりかへしていふなり。

父母の恩、極まりなきこと、天地に等し。父母なくんば、何ぞ、我あらん。其の恩、海より深く、山より高し。海山は限あり、父母の恵みは限りなし。いかにしてか、其の恩を報ひんや。たゞ、孝を行ひて、其の恩の萬一を報すべし。父母に事へて、其の力を盡して、惜しむべからず。力とは、身と財との力を云ふ。身の力の限りを盡してつかへ、財の力の限りを盡して養ひ、其の力を惜しむべからず。若き時は、われも人も、父母の恩を思はず。力を盡さずして、不孝を行ひ、父母終りて、後悔すれど益なし。是れ、一生の限りなき恨なり。人の子たる者、後悔なからんことを思ひ、父母の

生ける時、力を盡して、孝を行ふべし。一日も孝を行はずして仇に過すべからず。父母に事ふる年は久しからず、孝子は日を惜しむといへること、心に懸くべし。

父母われを生むといへど、君の養ひにあらざれば、我が身立たず。君の祿をうけて、わが身を養ふのみならず、父母妻子を養ひ、奴婢を使ひ、衣服居宅器物、萬の用乏しからずして、安樂に世を渡ること、偏に、君の賜物なり。是れ又、父母に雙びて、其の恩大なり。君に仕ふるには。我が身を忘れて、身をわが物とすべからず。君に奉りたくべし。是れ、身を委ぬるなり。論語に、子夏の曰く、事父母能竭其力、事君能致其身。とは、是れなり。

父母に生れ、君に養はるゝといへども、聖人の教なければ、人の道を知らず道を知らざれば、食に飽き、衣を暖かに着、居り所を安くしても、人の道なくして、禽獸に近ければ、人に生れたるかひなし。今教へをうけたる、古の聖人の恩は、君父に等し。聖人は、萬世の師なり。萬世の後まで、最貴ぶべし。聖人の恩を酬ひんとならば聖人の教に従ひ、其の道に背かざるべし。是れ、聖人の恩を報ずる道なり。

凡そ、天地父母主君聖人の恩、相ならびて、至りて重し。此の四恩を忘れ背くは、人にあらずと思ふべし報ひずんばあるべからず。これを報ひんと思は、道を學びて行ふにあり。他の道あるべからず。

今の世に、道を教ふる師は有りがたし。もしあらば、貴び仕ふべし。道の教をうけたる師は、其の恩深きこと、君父に等し。又、書を讀み習ひたる師を句讀の師と云ふ。其の勞甚だし。藝術の師は、又、其の次なり。これらは、君父聖人の恩には双べがたしといへども、其の苦勞の恩忘るべからず。此の外、人の生涯には、恩をうくること多し。凡そ、人の恩をうけば、心に銘じて、忘るべからず、一言の情をも感じ、一事の志をも心にかけて思ふべし。人の情あれども感せず、人の志をも空しくするは、無下に心なきなり。

司馬溫公の曰く、人の恩をうけて、背くに忍びざる者は、其の人、必ず、忠孝ならん。此の言、道理至極せり。然れば、恩をうけて忘るゝものは、忠孝ともになかるべし。忠孝も、君父の恩を忘れざる道なり。俗語に、恩を知らざれば、木石に等しい

へるも、恩を知らざるは、人の心なきなり。君子の道、天地に仕へて、仁を行ひ、父母に孝を行ひ、君に忠をつくし、師を貴び、故舊に篤くするは、皆、恩を酬ゆる道なり。人の性によりて、無學なる俗人にも、恩を忘れずして、節義を力め、禮をかゝる者あり。是れ、其の天性の勝れたる所なり。其の善行、貴ぶべし。又、普通のことば、才ありて悪人ならざれども、舊恩を忘るゝ者あり。義なしといふべし。

古語に曰く、施恩勿念、受惠勿忘、人に恩を施さば、是れ、わがなすべき當然の道とたもひて、かされて、其の施したることを忘るべし。思ひ出すべからず。恩をほごしたるごとて、恩だらしくするは見苦し。又人の恵みをうけば、其の恩を忘るべからず。必ず、報ひんことを思ふべし。小人は、人の恩をうけては、必ず忘れ、人に恵みを施しては、必ず忘れずして、其の報ひを求む。其の報ひされば、恨み怒る。凡そ、天地の人を生じ育ひたまふは、其のめぐみ廣大なれど、君子にあらざれば、其の活恩をしらす。天地につかへんと思ふ心なし。父母の恩をうけしことは、猶、近くして、誰も知れることなれど、それだに忘れて不孝なるは、凡夫の生れつき習はしなり。

り。況んや、其餘の人倫の交の内にて、たとひ、君子の恩を施したりとも、父母の恵みに比べば、萬が一なるべし。人皆君子にあらざれば、恩を深くうけながら、十人に九人は、必ず、忘れて報ひず。恩をうけて忘るゝは、凡人のならひぞと思ひて、われより恩を施せりごとて、誇るべからず。施して報ひを望めば、人其の恩を忘れたる時、恨みいかりて、わが徳を害ふ。是れ、人情を知らずといふべし。恩をうけて、忘るゝは、小人の癖なり。珍らしからずと思ひ、人を答むべからず。是れ、人情をしれるなり。たゞ、わが身は恩を忘るべからず。

凡そ、人の施しをうけ、恩を蒙り、或は、我を君子にすゝめたる恩あらば、永く忘るべからず。折節の禮義を務むべし。久しくして忘るべからず。或は、初につとむれども、誠すくなき入は、久しきを経れば、必ず、舊恩を忘れて、訪ひくることだになし。始終一の如くなるべし。凡そ、恩を知らざるは、世の凡人のならひなれば、責むるに足らず。我が身、かゝる薄き人情にならひて、恩を忘るべからず。恩を忘るゝは、人にあらずと思ふべし。犬は賤しき獸なれど、養をうけし主人を慕ひてさらず。他

一の富める家に引きよせ、繼ぎ置きて、食に飽かしむれども、貧しきもこの主人の家に遁げ歸る。或は、数十里の道をも歸り、遙なる海を泳ぎても、歸ることあり。されば、恩をしらざるは、人を以て、犬にも如かずといふべし。

人倫を厚く愛し、四恩を感じ報ひて、又、神を貴ぶべし。古人の曰く、民は神之主なり。是を以て聖王は先づ、民を養ひて後、神に力を用ひ給ふ。人事を力めずして、神に助を求むべからず。神に三あり。天神地祇人鬼なり。天神は、天の神靈をいふ。日月星も、其の内にあり。地祇は、地に在る神靈なり。名山大川の神、社稷の神も、其の内にあり。社稷とは、國土と五穀とを守る神なり。人鬼とは、人死して、神に齋へるを云ふ。わが家の父母先祖の神あり。是れ、祭るべし。王公の先祖宗廟の神あり、貴ぶべし。これを祭るは、恐れ多し、無禮なり。又、先祖にあらざれども、人民に功徳ありし人あり。これ、皆人鬼なり。是れ、亦貴ぶべし。凡そ、わが身に應じたる神を祭るべし。身に應せざるは、祭るべからず。天神地祇人鬼ともに、人の位によりて、わが身にあづかりて、祭るべき神あり。身にあづからずして、祭るまじき神あり。わ

が祭るべき神にあらざれば祭らず。是を祭るは、諂なり、非禮なり。神は、非禮をうけ給はず。わが身にあづからずして、祭るべき神にあらざれば、正しき神にても、淫祀と云ふ。淫祀は、無禮とて、わが祭るまじき神を祭りて、祈り諂ひ仕へても、非禮なれば、うけ給はず。利生なし。利生なきを無禮と云ふ。わが祭るべき神と、祭るまじき神とを、よく辨ふべし。祭るまじき神を祭るは、非禮にして、神慮にかなはず。利生なくして、神罰はかりがたし。天子諸侯の祭り給へる所の、及びなき天地神明を、賤しき者汚し侮りて祭るは、大なる非禮なり。天道神明は公にして、人間の如く、即時に、其の非禮を咎め、罰を行ひ給はざれども、久しきをつみて、必ず、禍を蒙るは、必然の道理なり。賤しき者の、日月を祭り、又、祭るまじき神を祭り、久しくして、大なる禍に遭へる人多し。わが屢々見る所なり、畏るべし。鬼神を敬ひて遠く之と聖人宣へり。いふ意は、神は畏れ敬ふべし、近づき侮るべからず。たとへば、王公大人などに、畏れて近づかざるが如し。是れ、遠く之なり。神の社に入るにも、此の心得ありて、猥に近づき侮るべからず。畏れて遠ざかるべし。

一五二
 人は人の言を用ひ、人の諫をきく人は、必ず、過ち少なく、行正しく、よき譽あり。
 人の言を用ひざる者は、僻事多く、謗り多し。宋國に、岳飛といへる忠臣あり。勝れ
 たる長將なりしが、此の人、大將として出陣する度毎に、まづ豫て、其の下に従へる
 諸將を呼び集め、變應して、此の度の戰敵に勝らぬべき手立を尋ね、人々に言はせ、負
 けぬべき惡しき筋をもいはせて置く。其の内にて、よきを選び用ひて、豫てよく謀略を
 定めて、十分にかちぬべきと議定して後、出陣せしかば、戰ふたびごとに、勝軍のみ
 して敗軍せず。向ふ所敵なかりしとなり。是れ、軍のみに限らず。大事小事、皆、此
 の如く兼ねて、人どよく計りて事を行はば、過なかるべし。孔子の、三軍を行ふに、
 常の時、事に臨んで畏れ、謀を好んでなさん者に與せん、このたまひしも、此の意なり。
 人の性、もと善なれば、惡をする心、素よりなしといへども、利害喜怒愛憎の私欲
 にひかれて、惡心生じ、惡事を行ふ。故に、善をする人常にすくなく、惡をするもの
 常に多し。わが心の中を省みて、其の惡のたこる所を求め去りて、善心の生ずるを育
 ち、抑擴め行ふべし。

孟子の曰く、志士は、溝壑にあるに忘れず。勇士は、其の元を失ふに忘れず。いふ
 心は、義理に志ある士は、たとひ、わが身不幸にして、飢ゑて溝壑に臥し轉びて死
 ぬることも、其の時までは、義理を忘れず。又、義理に勇む士は、たとひ、人と戦ひて、
 我が首を失ふ時に至るといへども、義理を忘れずとなり。士たる者は、必ず、此の語
 を常に心に保ちて失ふべからずと古人もいへり。人の命はたもき物なれど、義理は、ま
 た命より甚だ重し。故に、生死の大事に臨むとも、義理を忘るべからざることを、かくの
 如し。況んや、名利好色財寶は、皆、外物の輕き物なれば、なんぞ、是を貪りて、たもき
 道義を失はんや。凡そ、人の欲は、富貴を極むるにあり。然れども、至れる富貴にも換
 へがたきは命なり。命なくては、富貴も用なし。命は、かほど重きものなれども、義理
 に當りては、命をも軽くすること、君子はいふに及ばず、凡夫も能くするは、是れ、人
 の本心なり。然れば、義理程たもきものはなしと知べし。かほどに、一命より甚だ、重
 き義理をすて、極めて輕き私欲に従ふは、本心を失へるなり。誠に愚なりといふべし。
 怒は強く、怨は深き故、是にかちがたし。力を盡して、堪忍すべし。力弱ければ、

怒と慾とに克ちがたし。忍の字は、心の上に刃を書く。怒と慾との心たこるを断ち去ること、刃を以て切り断つが如くなるべし。是れ、吳臨川が、忍の卦を作りし説なり。又、敵に向ひて戦ふか如く、十分の力を用ゐるべし。如し此せざれば、怒と慾とに負けやすし。堪忍の工夫なく、怒と慾とに克たざれば、平生の學文も用いたらず、徒事なり。人と生れては、道に志ざして、常に、仁を心にたもちて、毎日、人に利益ある善事を行ふべし。主君父母舅姑兄長などによく仕へ、家人を愛するは、皆善なり。又、人を恵み救ふこと、亦善なり。是れ皆、心を盡して行ふべし。人を恵み救ふことは必ず、財を用ゐることの多少によらず、たい人の難儀を救へば、其の功大なり。富める者は、財を多く與へても益なし。貧しき者に施せば、少し與へても、其の利益大なり。たとへば、食にあきたる者に、又、食を與ふるは、益なくして、かへつて、病となる。飢ゑたる者には、少し食を與へても、利益深きが如し。財を多く費しても、無益のことにて、利益なし。人の助とならず。たとへば、萬燈を點しても、あたら油を費したるのみにて、利益なし。其の費を以て貧人を養はり、大なる利益なるべし。善を行ふとは、

たゞ、人の利益になることを行ふにあり。人を利益すれば、天地神明の御心にかたひて、つひに、其の報ひありて、幸福を得る理、古來その例多し。たよそ、善を行ひて人を救ふこと、上は王公より、下は乞丐にいたるまで、行ふべき道なり。富貴貧賤によらず。只、善を行ふ志だにあらば、善行はれすと云ふことなし。善を行ふべき時にあたりて、心を盡すべし、怠るべからず。貧しく賤しき人も、仁に志ざして行へば、其の身に應じ、日々に、人に利益あること多し。況んや、富貴の人、其の志あれば、人を救ふこと廣く、其の功大なり。高きも賤しきも、怠りなく、久しく行へば、善をつむことかぎりなし。豈に、たのしまざるべきや。かく、心の内に陰徳をたもち、善を行ふこと久しければ、天道の報ひありて、憐みをかうむり、其の幸、子孫に至る。此の理は、古今、唐日本、其の例多し、疑ふべからず。されども、君子の善を行ふは、其の報ひを望むにはあらず、自然の驗を云ふのみ。

世俗は、耳目口腹の欲を擅にするを樂とす。しからざれば、わが身、人と生れ、富貴なるかひなしと云ふ。是れ、まことに世俗の卑しき志なり。人の道を知り、善

一五六
 を行ひ、道に従ひ、人を救ふほどの樂、此の世の中に、何かあるべきや。高き賤しき、
 只、善を行ひ、道にしたがふを以て、樂とすべし。天理にしたがひ、人道を行ひて、
 人を憐むを以て、樂とせずして、そいろなる俗樂を希は、富貴の人といへども、
 に不幸なる人と云ふべし。殊更、富貴の人は、貧困なるものを感み、施すことを樂む
 べし。是れ、富貴を得たる福徳なり。然らざれば、富貴を得たるがひなし。耳自口腹
 の欲も、よきほどなるは、道に乖かすして、樂となる。よきほどに過ぎて、欲を恣
 にするは、身の禍となり。人に害ありて、樂にあらず、かへりて、憂となる。
 後漢明帝の弟、東平王、其の國より、都に參勤ありし時、明帝問うて曰く、家に居
 て、何か樂しきや。東平王答へて申さく、爲善最樂といへり。いふ心は、われ國
 にありて、臣を愛じ、民の貧窮飢寒を救ひ、鰥寡孤獨を養ひて、善をするは、最も樂
 しきとなり。たよそ、人間の樂は、善をするほどの面白きことなし。賤しき匹夫も、
 善を行ふ志あれば、善をすること多く、其の樂多し。日々善を行ひてやまずば、
 其の樂きはまりなかるべし。況んや、富貴の人、善を行はば、其の功大きに廣くし

て、其の樂も、亦甚だしかるべし。東平王の答、宜なるかな。凡そ善をすれば、我
 が心快く、人も亦喜び隨ふ。又、樂しからずや。
 尙書に、有備無患といへり。言ふ心は、萬のこと、かねて早く用意をすれば、俄
 なることに遇ひても、患ひなしとなり。常に、善を心がくる人は、無事の時の用意あ
 る故、俄に兵亂ありても、行き當りて患ひなし。常に、儉約して、財の蓄へあれば、
 俄なる變にあひても、困窮せず。其の養の諸事、皆かくの如し。當時の費を省き、
 私欲を耐へて、後の用意をしたくべし。常の時に、變にあへる時の覺悟なければ、不
 意の變にあひてつまづく。明日のことは、今日より心を用ゐる。來年のことは今年より
 心を用ゐる。一生の事は、只今より力むべし。すべて、萬の事、後悔なきやうに、か
 ねて思ひ計るべし。人遠き、慮なければ、必ず近き患ひあり、と聖人のたまへり。

躬 行 下

人の身に、氣質の惡しき所と、過ちとあるは、身に病あるが如し。病ある人、醫を

まねき薬を服し、針灸をして、病をせめざれば癒わす。身に過ちある人、其の過をせめざれば、たとへば、病ある人の薬を用ゐ、針灸をして、病をせめざれば、病癒わざるが如し、氣質を變じ改むるは、極めて難し。常に、心を用ゐるべし。故に、前にもいへれども、又、繰りかへし人に告ぐるのみ。

天は、常に廻り動きてやまず。人、これに則りて、常に力めてやまざるべし。地は、常にこゝまり靜にして動かす。人、是の則りて、常につゝしみ靜にして、心を動かさざるべし。力むるにあらざれば、人の道行はれず。慎むにあらざれば、人の道たたず。力むると、慎むとは、即ち、天地の道にして、人の、法として行ふべき道なり。

人の身になすわざ、何事にも、道あらずと云ふことなし。坐するには、坐するの道あり。臥すには、臥すの道あり。行くには、行くの道あり。飲食には、飲食の道あり。言ふには、言ふの道あり。動くには、動くの道あり。視るには、視るの道あり。聴くには、聴くの道あり。道を行はんと思はば、事ごとに、道あることを思ひて、慎をいたして、しばらくも道を離るべからず。是れ身を修むる道なり。

不仁にして、吝嗇なれば、財多く持ちても、人を救ひ恵むことなし。吝嗇ならざる人も、仁愛に心を用ゐざれば、其の施なくして、かへりて、無益の事に財を費す、一兩事をあげていはば、門内に、饑及べる乞食貧人來りて食を乞へども、心を用ゐて、是を恵まざれば、家の奴僕も食をあたへず。又、寒夜に、客來りて語るに、客にしたがひ來れる下部などを、屋の内寒からざる所に入れ置き、凍むるやうにするは、いと易きことなるに、客に對するに專にして、紛らはしく、従者の寒氣に苦しむべきを、心にかけてざれば、彼が飢凍ををしらすして、いたはることなし。是れ心を用ゐざればなり。善を行ふに志あらん人は、萬の事、折節につけて、心を用ゐて、人の苦しみなからんことを思ひはかりて、人を救ふべし。

程子曰く、財を惜しみては、よく善を行ふことなりがたし。誠なくしては、善をなすことは、なりがたし。此の言、宜なるかな。財を用ゐずして、たゞ言を以て人を語らふとも、人を救ひがたし。人も亦喜ばずして、其の人の爲に、忠をつくさざれば、功をなすこと成りがたし。項羽を婦人の仁といひしも是なり。また、凡ての事、偽り

を以て、善を行へば、中心より出でざる故、善を行ふに専一ならずして、其の事成就せず。誠の善とすべからず。人も亦信とせず。感通の理なし。

禮義廉恥の、正しく潔き道を以て、わが身を正すべし。かくの如くすれば、過すくなし。これを以て、人をせむべからず。人の上を、事ごとに責め正して、わが思ふごとくに、よくせんとすれば、人と争ひ、人の恨み多くして、世に交りがたし。人の善をば、褒めすゝむべし。人の不能をば、憐みて、妄りに、誹り咎むべからず。聖人を以て、わが身を正すべし。聖人を以て、人を正すべからず。凡人を以て、人を宥すべし。凡人を以て、我が身を恕すべからず。

人の悪しきを恕すべし。わが悪しきを、人に恕さるべからず。人の悪しきを恕さるは、心の量せばし。わが悪しきを、人に恕されんことを思ふ人は鄙狹の至りなり。わが身は、十分に善ならんことを求むべし。人の身には、十分に善ならんことを責むべからず。人に、一の善あらば又一の善を求むべからず。是れ、一を得ば、二を求むべからざるなり。

君子は、己をせむ。小人は、人をせむ。己をせむれば、身修まる。人をせめざれば、人の怨みなし。小人は、此の反なり。人をせむる心を以て、わが身をせむれば、過すくなし。己を恕す心を以て人を恕せば、人の怨みなくして、交を全くす。

徳行は、われより上なる人を見て羨み、かれに及ばん事を思ふべし。低きにのぞみて、わが身を高しと思ふべからず。財祿は、われに劣れる人を見て、自ら樂しむべし。世には、身の福祿、我ほごもなき人多し。人、各、其の分を安んずれば、世に怨みなく、求めなくして、樂しみ多し。上を見て、わが身を慊らす思へば、大富貴なる人も、願多く、其の欲かぎりなくして、樂なし。下を見れば、分を安んじて、樂多し。或人の歌に、「上見ればはてしもあらぬ世の中にわれほごもなき人もこそあれ」と詠るが如し。

酒食をすごふは、病を生ずるの本なり。言をつゝしまざるは、禍の本なり。思案せざるは、過ちの本なり。私欲深きは、身を殺すの本なり。怒を耐へざるは、争の本なり。儉約ならざれば困窮の本なり。此の六本去らざれば、身と家とを保ちがたし。かめて、これを去るべし。

善ぜんをすることは易やすく、善ぜんを行なひて、其そのの名聞めいぶんを求めざることはかたし。是これれ、誠まことの善ぜんなり。人ひとを犯とがさることは易やすく、人ひとの我われを犯とがせども、其そのの返報へんぱうをせざるはかたし。心こころには、古いにしへの道みちを守まもり行なひ、身みの作法さくぱは、今いまの世よの風俗ふうぞくに背そむくべからず。今いまの世よに生うれ、古いにしへの法はふに拘かまりて、必かならずず、行なはんとするは、僻事ひくごとなり。道みちに害がいあり。古いにしへの法はふ、當世たうせいにも行なはるべきことは、行なふべし。當世たうせいの時宜ときぎに背そむくべからず。また當世たうせいの風俗ふうぞくに流ながれて、古いにしへの道みちに背そむくは、甚はなだ悪わるし。是これれ、道みちに志こころざしなきなり。道みちは、五常ごうと云いふ。法はふは禮らいなり。作法さくぱを云いふ。

世よに交まじるには、和わして流ながれざるを善ぜんとす。和わすれば、人ひとに背そむかず。流ながれざれば、道みちを失うはず。是これれ、世よに交まじる、よき程ほどの中道ちゆうだうなり。

五常ごう五倫ごりんの道みちは、古いにしへ今いま和漢わかん同じ。若もし、時ときにより所ところによりて變かはらば、誠まことの道みちにあらず。法はふは、時ときにより、所ところによりて、宜よろしきと宜よろしからざることをある故ゆゑに、古いにしへ今いま和漢わかん異ちがなり。その國くにの禮法らいはふに背そむくべからず。國法こくはふに、背そむきて、古いにしへの禮法らいはふを行なふは、道みちに背そむけり。但ただし、古いにしへの禮法らいはふの中ちゆうに、國法こくはふに背そむかすして、今いまの世よに行なひて宜よろしきことは、

行なふべし。唐たうの古いにしへの禮法らいはふありとて、今いまの世よの時宜ときぎに叶あはずば行なふべからず。忠信ちゆうしんを主しゆとして、偽いつはりりなく、仁愛じんあい深くして、人ひとを憐あはれみ、義理ぎりを固かたく守まもりて、行なふべき節せうを失うはず、父母兄弟ふぼけいていに、孝友かうゆうを篤あつくし、主君しゆくんに仕つかへて、身みを忘れ、親戚しんせきを親したみて、疎そからず、朋友ともに信實しんじつにして、たのもしく、家いへにありては、嚴げんにして、内行うちぎやうひ正ただしく、儉約けんやくにして、奢せちなく、貧窮ひんきゆうを恵めぐみ、艱難かんなんを救すくひ、利欲りよくすくなく、權勢けんせいに附つはず、舊恩きゆうおんを忘れず、武ぶを樂たのしみ軍用ぐんようを缺かかず、一度約諾ひとたびやくだくしたること、後のちまでそむかざるを、貞士ていしとすべし。

古語こごに曰いく人ひとの聞きかんことを恐れば、いふべからず。人ひとの知しらんことを恐れば、行なふべからず。是これれ、過あやまちすくなく、悔くすくなく、また禍わざはひなき道みちなり。

善ぜんは、必かならずず、日々行なひ、久ひさしく積つみ重ねて後のち、其そのの功こうなりぬ。たとへば、補藥ほやくを用もちひて、元氣げんきを補おぎなふが如ごとし。其そのの驗しんたそし。久ひさしく服くして、其そのの驗しんあり。惡あくは、少せうなりとも恐おそるべし。たとへば毒どくをくへば、忽たちち害がいあるが如ごとし。其そのの驗しんはやし。惡あくを去さることは、つよき藥やくを用もちひて、病びやうを去さるが如ごとくすべし。忽たちちにせめざれば身みに害がいあり。

古語に、人生在勤、勤則不匱といへり。勤は、利の本なり。よく勤めて、自ら得るは、眞の利なり。利を専ら貪れば、必ず、害あり。農の、田をつくりて五穀を多く得るも、工の、工を営み、商の、商ひて利を得るも、皆、勤よりなし出す利なり。士は、佞巧を以て諂はざれども、たゞ、忠勤をだに専一にすれば、求めざれども、君の寵ありて、祿を得、幸を得る。農は、歳の凶に遭ひても、怠らず、耕作に専一なれば、自ら職業を得る。工は器を精しく作りて、粗造ならざれば、必ず、其の利を得る。商人は偽りなく、正直にして、利分をすくなく取れば、諸人の信愛あつく、たのもしげありて、必ず、商品多く賣る、故、利を得ること多し。是れ皆、本をつとめて、自ら來る所の、誠の利なり。もし、工は、器を粗造に作りて偽り、商は、商品を偽りて、利を多く貪れど、人信せずして、かれが器、賣物を買ふ人すらなくなり、かへりて、利を得ることすくなし。漢書に、貪賈三之、廉賈五之といへるも、此の意なり。言ふ心は、欲深き商人は、三分の利を得、欲少なき商人は、五分の利を得る。欲深き者は、利を得ることすくなく、欲すくなき商人は、かへりて利を多く得ることなり。

終日、勤めくして、夕に至りても、恐れ慎むは、易の教なり。天道は、日夜めぐりてやまず。これを手本として、勤むべし。古人は、夙に起き、夜半に寝て、日夜勤めし故、其の驗あり。

古語に一生の計は、勤めにありといへり。勤めざれば、萬の事行はれず。身を立つること難し。又、一生の勤めは、若き時にあり人の身をたつる計は、三十歳の内に覺悟すれば、一生の家業成り立つ。其の内、覺悟なく怠れば、一生立ちがたし。一年の計は、春にあり。春の間、怠りぬれば、一年のこと成りがたし。一月の計は、上旬にあり。朔日より十日までの内に勤むれば、一月の事成りやすし。十日の間に、未二旬の日數を待み怠れば、其の事成就しがたし。一日の計は朝にあり。朝に、一日の間の事をよく考へ定め、早くつとむれば、捗ゆく。若し朝の間、怠れば、一日の勤め、捗ゆかず。また、明日の計は、今夕にあるべし。明日のことを、明日はからんとて、今日定めざれば、つまづきては捗ゆかず。

古人は、人の朝早く起くると、遅く起くるとを以て、家の興廢を知るといへり。朝

早く起くるは、家の榮ゆる驗なり。遅く起くるは、家の衰ふる基なり。朝夙に起きて、事を勤むるを以て、身の習はしとし、家の勤めの則とし、見習はしむべし。凡べての人を見るに、朝寢しては、學ぶことならず。家業怠りて、富めるもの稀なり。朝寢するは、怠りのはじめ、貧窮の基なり。よく事を勤むる者は、一日を以て、十日とす。勤めて、怠りなく、鋭なれど、抄ゆく故なり。怠るものは、十日を以て、一日とす。日數多く経るといへど、抄ゆかす。凡そ、善を勤めて、怠らざるを良民とす、必ず家を起す。家業を力めて、怠らざるを良民とす、必ず富む。

知れば行ひ易く、行へば知り易し。二の者、互に、相助けて、道明かにして行はる。たとへば、道路をゆくが如し。道を知らざれば、行きがたく、行かざれば、行路を知りがたきが如し。

わが身の、過すくなく悔すくなくならんことを思はば、事に先立ちて、早く思案し、其の事の是非を考へ量り、其事にのぞみて、又、義か不義かを願みて、其の理に叶はんことを思ひ量るべし。かねて、思案なくして、其の時に至りて、俄に、感ひつまつ

くべからず。たとひ、急がはしき事に臨むとも、思ひめぐらして、理の當否を擇び行ふべし。あわたいしく、思案なくして行へば、必ず、義理に違ひ、誤ること多し。すでに、一度、よく思ひ定めても、又、一遍に心得損ふこと多し。其の事の外に、心をめぐらし、其の變を考へて、二度思ふべし。孔子曰く、人遠き慮なければ、必ず、近き悔あり。さし當りたることを思ふは、いふに及ばず。後の事を思ひはかり、誤りなく、悔なからんことを思ふべし。たとへば、古語に、早に箆笠を備ふべしといへる如く、只今、宿を出で、他所に行くに、天晴れ日和よくして、雨降るまじき景色なりとも、遠き所にゆかば天變はかりがたければ、箆笠を持ち行くべし。たとひ、天氣よく雨ふらすとも、箆笠持たる勞がはしきのみにて、さほどの妨にあらず。若し、思はざるに、雨降りなば、濡れそぼちて、衣濡らすのみかは、心を痛ましめ、身を苦しましめ、折節、人にも用あるべき箆笠を乞ひ借りて、又、持たせ返すも、われ人の爲、勞がはし。萬の事、豫て心を用ひ、恐れ慎み、深く思ひ、遠く慮りて、事を行へば過すくなく、悔すくなし。僕奴下部などの心ならひは、さしあたりて、わが身

の便よきことのみを思ひて、後の禍を知らず。たとへば、やがて、雨ふりなんと見ゆる空にも、雨衣の用意もなく、出づる時、主人もてゆかんことを命ずれども、雨ふるまじきよしを論ぶ。やがて雨に濡れて、苦しめどもこりす。いくたびも、またかくの如し。かく用意なくて、後の憂を顧みざるは、賤しきもの、癖なれば、よからぬことしるべし。すべへ、人の悪を行ふも、過をするも、皆、事に臨みて、思慮せざるより起る。酒食を擅に過して、病を起すも、其の時に臨み、思案なくして、たゞ欲に任せて飲み食ふ故に、病を生じ、果は、身を失ふに至る。よく思案して慎むは、欲にかけ、禍をまぬがる道なり。

わが身の過を改めん爲、人の諫を好むこと、眞實ならば、諫むるもの多からん。酒食は、人の好む物なれば、人辭退して防げども、強ひて飲ませ食はしむるは、世のならひなり。是れ、人の眞實に酒食を好むことをしればなり。酒食を好むこと諫を好み、わが過を改めば、諫を言ふ人多くして、我が身の過なかるべし。子曰く、躬自ら厚くして、人をせむるに薄ければ怨に達する。言ふ心は、わが身の

行を篤くし、十分によくせんことを求めて、常に、我が身の行ひの足らざることを思ひて、力め行ふべし。人の足らざるを恕して、せむべからず。かくの如くすれば、人の怨なし。

能く詩文を作る人は、妄に、輕々しく、文字を下さず。久しく沈思して、一字一句に心を用ゐること精しくして後好き詩文を作り出せり。和歌を詠むも同じ。此如ならざれば詩聖歌仙といへども、好き詩文和歌を作ることかたかるべし。碁をよくうつ人の、碁子を下すを見るに、久しく思ひて後に下す。一子も、猥に早く下さず。こゝを以て、碁子を下せば、其の所に叶ひて、よく人にかつ。これを以て思ふに、賢者の言行も、また此如よく思案して後、言を出し、事を行ふべし。此の故に、賢者の言行は、過すくなし。もし早く、決定して、輕々しく行はば、賢者といへども、過多かるべし。孔子の、必也臨事而懼、好謀而成者也、このたまふを以て、みつべし。當世の愚人より、聖賢のなす所を見れば抄ゆかす鈍くして、もごかしかるべし。常人も、思案を好めば、わが心を盡す故、事を早く決定せず鈍きようにみゆれど、過すくなし、道

理に當ること多し。決斷早き人は、歩ゆけども、必ず過多く後悔多し。

順境とは、思のまゝなる境界を云ふ、逆境とは、思ふやうにならざる境界を云ふ。世間の事、順境に居るは易く、逆境に居るは難し。故に、逆境に居れば、敬畏出でて、身の過すくなくして、かへつて、福となる。順境に居れば、驚怠の心出でて、身の過多くして、身の禍となる。たとへば、高に登るものは、倒れがたし。勢逆にして、かたければなり、低き下るものは、倒れやすし。勢順にして、やすければなり。孟子の、憂患に生きて安樂に死ぬるとのたまふも、此の心なり。憂ひ畏れあれば、生命を保つ。安樂にして放逸なれば、死を免れがたし。敵ある國は長久し、敵なき國は、かへつて、亡び易きが如し。

周の武王の蕭銘に曰く、安樂必敬、無二行、可悔、此の銘の意は、艱難にうれひある時は、畏れ慎みて、過すくなきゆる、禍なし。心安く樂しむ時は、必ず、忘り油断して、過いでき、禍たこる。かゝる心やすき時、殊に慎むべし。慎めば過すくなく、行ふ事毎に、後悔なし。止り扱は、惱める故に、つまづかず、下り扱

は、惱なくして、轉び易きが如し。

日々行ふ事毎に、過なからんことを思ふべし。過あれば、必ず後悔あり。後悔は、誤りより起る。怒りと欲とを耐ふれば、過すくなく、後悔すくなくして、後の過なし。また事ごとに、早く行はずして、靜によく思案して、是非の疑はしきことは自ら決定せず、人に問ひてわが善惡を考ふべし。急ぎて、俄に、事を決斷すべからず、早く決斷すれば過多し。諺に、悔は先立たず、といへれど、事に先立ちて、思ひ慎みて、靜に行は、過すくなくして後悔なかるべし。あくまで思案し、十分に計りて後、過ちならば、わが心の分量を盡したれば、力に及ばず。其の上は、天命に任せて、愁ふべからず。

君子は、朝夕、力めて、善を行ふ。小人は、朝夕、力めて、利を行ふ。君子小人ともに、力め行ふといへども其の志は、利と善と變れり。善を志すは、聖人の徒なり、利に志すは、盜賊が徒なり、と孟子のたまへり。利とは財利を貪るのみにあらず、われに獨り勝手なきように、便利を計るも、利心なり。是れ、私なり。私を

行へば必ず、人に害あり。人に害あれば、必ず、わが身の禍となる。善を行はん人は、必ず先づ利心を去るべし。利を心に挟んでする善は、誠の善にあらず。

君子の道は、すべきことを行ひ、すまじきことをせず。これ、義なり。好むべきことを好み、好まじきことを好まず。是れ、善なり。君子の道は、かくの如きのみ。是れ、孟子の語意なり。

人の知は、目の如し。人の目は、よく、百里の外を見れども、わが睫を見がたし。人の知よく、他人の悪をしれども、わが身の悪をしらず。人をみることは、常に明かなり。私なければなり。自ら見ることは、常に暗し。私あればなり。こゝを以て、

人の過をせむることは厳しく、わが悪を恕すことは緩なり。富貴の人、善を好めは、富貴の力によつて、人を救ひ、善を行ふこと廣し。是れ、誠まことに樂たのしみ多かるべし。富貴にして善を好まざれば、富貴の力によつて、驕りて、人を苦しめ、悪を行ふこと廣し。かくの如くなれば、富貴なるも、かへつて、禍わざはひとなり、貧賤ひんせんに劣る。何の樂たのしみかあらん。貧賤なる人、もし艱難かんなんによりて、よく、身を慎みて、

過あやまちを改め、善を力め行はば、禍わざはひなくして、樂たのしみ多かべるし。かくの如くなれば貧賤ひんせんなるもかへつて福ふくとなり、富貴ふきにまさる。

敏ことごとく事ことごとくとは、行ふべきことを油断なく、鋭に力め行ふを云ふ。何事も、力めずして怠れば、事行はれず。行へども、歩ゆかすして、なすこと成就せず。よく事を力むる者は、十日は、事を急がざれども、怠りなき故、一日に、十日の事をなす。たこたる者は、十日に、たゞ、一日の事をなす。怠ると、力むることは、其の功、遙にかはれり。

自信とは、わが行ふ所、理に當れりと、明かに思へば、人の誹謗を省みずして、心を動かさざるを云ふ。古詩に、禮義不レ徳、何憂二人言。といへるが如し。小人非義を行ひて、人の誹を省みざるは、甚だ別なり。君子善を行はば、人の誹を畏れざるべし。小人、不善を行ひて、人の誹を畏れずんば、其の惡極まりなかるべし。

耐たうらひ煩わづらはしきとは、むつかしきことを嫌はずして、堪忍して、力め行を云ふ。もし、孝弟忠信など、諸の勤めをむつかしとて、怠り、人の附託をうけて、勞がはしとて、粗畧あらそかにするものは、善を行ひ逃げず。是れ、善を好まざればなり。わが好むことは、

日夜勤めても、勞せず。何事も、勤めむつかしとて、苦しむ者は、氣悶はれて、必ず、病たこる。

今日は、明日の計をなし、今月は、來月の計をなし、今年は、來年の計をなし、平生は、一生の計をなし、生前に早く、死後の計をなすべし。怠るべからず。明日行ふべきことあらば、必ず今日より、其のことを思ひ量りて、定むべし。明朝、使を遣はし、文を送らんと思はば、今夕より、書き整へて、使を命ずべし。其の日の事を、其の日はじめて思案し營めば、抄ゆかす。事に臨みて、或は、さまたげ出來、まぎらはしくて過多し。

中庸に、凡事豫則立、不豫則廢。言前定則不貽、事前定則不困といへり。豫とは、かねてと云ふ意。事を前に定むるなり。萬事、かねて、思案して定むれば、事立ちて行はる。さなければ、事廢りて行はれず。物いふにも、かねて先づ、思案していへば、言、貽かす。事を行ふにも、かねて思案して定むれば、事に臨みて、行きあたり、困します。

世に住むこと一日なれば、一日の善人となるべし。一日も、善を行はずして、日を送るべからず。公儀の官職に與りて、官に居ること、一日ならば、一日の善事をなすべし。一日も、善を行はずして、官を空しくすべからず。世に久しく住みて、善行なきは、一生を空しくするなり。官職に居て、善行なきは、官職を空しくするなり。此の二は、大なる恥なり。

衆人の行ふわざは、かねて、思案なく、また事に臨みては、慮もなく、早く決定する故に毎事あやまり多くして、後悔すれども、それにも懲りず、常に、事ごとに、かくの如し。一事あるごとに、必ず、後のあやまり、悔あらんことを畏れ、靜に思慮して、行ふべし。何の害かあるべきと思ひ、思慮もなく、其のまゝ、決定すべからず。もし、即時に極めがたくば、かさねて、よく思案して、行ふべし。事にあたりて、十分に道理にかなひ、此の上は、思案に及ばずと思ふとも、又、いかなる悪しきこともあらんかと猶豫して、俄に決断すべからず。是れ、過すなく、悔すなくする道なり。思慮して、善惡をよく明めたらば、必ず、決断して、猶豫なく行ふべし。思慮して、

理明かになりても、決斷強からざれば、行はれず。悠々として、空しく、時を過すは悪し。所謂、見義而不爲無勇也。思慮と決斷との二備はりてよし。思慮なくして、妄に早く決斷すればあやまる。是れ不智なり。思慮して、道理はわかぬれど、悠々として、時を失ふは、怠なり。是れ、無勇也。二の者は、いづれも悔あり。凡そ、誤りは、多くは、初め一時の快きを求むるよりいでて、後は、長き愛ひ苦しむとなる。はじめ、少し心を用ゐ、少し慾を耐ふれば其の力を用ゐることはすこしなれど、験を得て、幸となることは、大なり。少しの間、少しの事を耐へずして、大なる禍となること多し。

夜ふして後、今日のわが身のなせるわざを、よく省みて、僻事あらば、後日の鑑として、改めんことを思ふべし。毎夜、かくの如くすべし。

人の身の上、さしあたりて、なすべきこと多し。よく思ひて、油断なく、早く勤むべし。油断あれば、急なることは、さしたきて、急がず、急ならざることを、急ぎて勤む。緩急を考へて、前後の次第を失ふべからず。さして、用なきことを勤め、徒

事を好みて、日を送るは、撻なしといふべし。若き時は、ことに、すべきわざにも、心を用ゐずして、空しくすぐすこと多し。よく心をつくべし。

人のしらんことを憂ふることあらば、悪事なるべし、心に萌すべからず。ことさら身に行ふべからず。

人の悪しきを誹る人は多し。わが身のあしきを省みて、改むる人すくなし。わが身を忘れて、人の上を誹ること愚なり。

わが身の上を、常に省み修むべし。人の譽誹りは、強ちに、愁ひ喜びとするに足らず。いかんとなれば、譽むる人、誹る人、必ず皆、賢者ならざればなり。

人われを誹らば、たい、わが身の過を省みるべし。もし、わが身に過あらば、誹る人は、即ち、わが師なりと思ひ、恨むべからず。わが身に、少しも誤りなきを誹らば、彼の人は妄人なり、かれと争ひ憎むに足らず。

人の悪をすること、三の故あり。氣質の偏より、悪をなすあり。又、過ちをはしれども、人欲の私によりて、なすあり。又、習慣の誘によりて、なすことあり。此

の三の内、氣質の偏なるは、悪の本なり。人欲の私は、悪の幹なり。俗習の誘は、悪の末なり。身の禍となることは、共に同じ。氣質のあしきをば變化して、改むべし。人欲をば忍て、恣にすべからず。俗習をば、其の非をしりて、移べからず。よき人は、心を用ゐること多き故、事ごとに、よく治まりて、過すくなし。よからざる人は、心を用ゐずして、過多し。下部などの、智慮なくして、用になはざるは、皆、心を用ゐざればなり。心を用ゐるとは、何事ぞや。思案するを云ふなり。古語に、勤むれば貧に勝ち、慎めば、禍に勝つといへり。いふ意は、つとむる人は、必ず富む。慎む人は、必ず禍なし。過ぎにしことを思へば、あやまり多くして、悔しきこと多けれど、一度あやまりて、返らざることは、悔の八千度悲しめども、益なし。今より後を慎みて、過なく悔なからんことを思ふべし。又、あやまりて後、はやく改むれば、過なくなることも多し。易に所謂、遠からずして復る。悔に抵ること無きなり。萬の事、初めによくつゝしむ慮りて、後悔なからんことを思ふべし。はじめに思慮なければ、あやまりて悔あり。

慎終、于始と尙書にいへり。身の禍福は、天命に任すべし、人に求むべからず。身の徳行は、わが心に求むべし、人をせむべからず。君子は人道の行ふべき法を行ひて、身の上の吉凶は、天命を待つ。是れ、則とすべし。人の爲に益ある善事を、毎日、多く行ふべし。其の善事とは、富貴なる人は、人に施し救ふこと自由に、宏く行ひやすし。心にかけて行は、其の功大に、其の樂も亦大なるべし。貧賤なる者も、志だにあれば、所にしたがひ、時にしたがひて、人の利益となること多し。わが家の内、又は、外なる道に、人の往來に、足に障りとなる物あれば、これを除けて、他所へ移し、咽乾く人には、一盃の水を與へ、疲れたる者に、一椀の食をあたふる。かやうの類、小なることながら、人の益になること、極りなし。上は王公より、下は、庶人乞巧に至るまで、皆、行ふべし。年久しく積み行は、其の善大にして、極りなかるべし。常に、善を行ふを以て、樂とすべし。天地父母は、わが生れし本にして、わが身の因て來れる初なり。忘るべからず。天

地の恩を知らずして、仁に背き、父母の恩を思はずして、孝を行はざるは、わが身の生れ來れるる本初を忘れたるなり。人と生れたるかひなしと云ふべし。われ人の恥ぢて畏るべきこと、是より大なるはなし。

善をするは、上り坂を上るが如し。かめざれば、なしがたし。悪をするは、下り坂を下るが如し。かめざれども、なし易し。しかれば、善は好みて、力を用ひ力め行ふべし。悪は憎みて、慎み畏るべし。

應 接

人に交るには、常に、禮儀を正しくすべし。禮儀のはじめは、先づ、威儀を調ふべし。威儀とは、身の形儀をいふ。衣服を正しくし、顔色を調へ、形を嚴にし、言を順にするを威儀と云ふ。ことさら、言葉遣敬ひて、無禮なるべからず。言の無禮げなるは、下部の交なり。言語容貌は、内心の外に見ゆる符なり。言と貌とを見きつて、其の内心の善悪はしれ易し、慎むべし。又、言の敬ひ過ぎたるも、禮にあらず、詔へ

らなり。過不及なかるべし。

人に交るには、貴賤、親疎によらず。愛敬を主とすべし。愛とは、人を愛しみて、憎まざるなり。仁の用なり。敬とは、人を敬ひて、侮らざるなり。禮の用なり。人に交るに、愛敬なければ、人我の間隔たりて、人倫の道行はれず。父母に仕へ、兄弟夫婦に對し、賓客に交るも、皆愛敬を以て心法とす。親には、愛を主として、敬を行ふべし。親を愛するのみにて、敬はざれば、犬馬を養ふに同じ。君には、敬を主として、愛を行ふべし。君を敬ひ畏れたるのみにて、心まことに愛せざれば、忠にあらず。臣たるの道たらず。

親しき人を愛し、貴き人を敬ふは、言ふに及ばず。疎き路人に對し、賤しき乞丐に對すとも、皆是れ、天地の生める人なれば、其の分に從ひて、愛敬すべし。憎み侮るべからず。疎き親しきにより、貴き賤しきに從ひて、愛敬する厚薄はあるべけれど、愛敬せざるることなかるべし。

凡そ、愛敬を行ふには、信を本とすべし。信とは、愛敬を行ふに、其の心、眞實に

して、偽いつはりなきなり。信しんなければ、眞まことの愛敬あいけいにあらず。信しんは、人ひとに交まじる道みちなり。信しんなくしては、人ひとと我われとの心感こころかん通つうせず。いかに、言ことばと貌かたちとに愛敬あいけいをあらはすとも、信しんなければ、人ひとまこととせずして、愛敬あいけいの道行みちゆきはれず。

人ひとに對たいするに、温和おんわにして謙へりくだり、己おのれに誇たからず、人ひとを侮あはれず、言ことばすくなく、信實しんじつに愛敬あいけいありて、向むかひよからんこそ、善人ぜんじんとは云いふべけれ。我われが身み、かろくしからずして、正ただしければ、温和おんわなれども、人侮あはれず。

朱子しゆし曰いはく、平へい心しん和わ氣きは、是これ、學問がくもんの根本こんぽんなり。此この語ことよく、思おもふべし。人ひとの萬事ばんじは、心氣しんきを本もととす。心氣しんき和平へいならざれば、萬事ばんじの本もとたゞすして、道理だうり行ゆきはれず。人ひとに交まじはるに、最もも和平へいなるべし。父母ふぼに仕つかふるには、必かならず、氣きを下くだし、色いろを怡よろこばしめ、聲こゑを和やはらる、是これ心氣しんきの和平へいなるなり。たゞ、父母ふぼに仕つかふるに、かくの如ごとくにするべきのみならず、すべて、人ひとに交まじはるに、皆みな、かくの如ごとくなるべし。人ひと、一言いっげんわが心こころに背そむけば、忽たちち、心こころにいかり、色いろにあらはれ、目めを瞋いらかじ、言ことばをはげしくする、これ、心氣しんきの和平へいならざるなり。又また、器うつわの狭せまきなり。心氣しんき既に動うごき亂みだれては、本亂もとみだれて、

未治みぢらず。なんぞ、其そのの言行げんぎやう、宜よろしかるべきや。

人ひとに交まじるに、恕じよを以もつてすべし。恕じよとは、己おのれを推おして人ひとに及およぼすなり。言ことばふ意いは、わが心こころを以もつて、人ひとの心こころに比ひぶるに、違たがふことなし。わが好このむことは、必かならず人も好このめり。

わが嫌きらふことは、必かならず人も嫌きらへり。故ゆゑに、わが心こころを以もつて、人ひとの心こころを推量おしはかり、わが嫌きらふことを、人ひとに施ほすべからず。わが好このむことは、人ひとに施ほすべし。是これ、仁じんを行なふ道みちなり。

又また、人過ひとあやまちあらば、凡夫ぼんぷはかくこそ、あらめと思おもひて、恕じよすべし、答こたへべからず。人ひとの得えざる所ところは、せむべからず。愚おろなるをば、怒いかるべからず。人ひとの、我われに無禮ぶれいを行なは、理ことわりしらぬ故ゆゑと思おもひて、恨うらむべからず。聖人せいじん、頑かたくなるを怒いかり憎にくむことなかれとのたまふ。頑かたとは、心愚こころおろにして、道理だうりに通つうせざるなり。頑愚かたおろに生なれつきたれば、すべきやうなし。赤子せきしの井いに墜おち入いるが如ごとし。愚おろにして、道理だうりをしらざる故ゆゑに、僻事ひきごとを行なふは、憐あはれむべし。是これ皆みな、恕じよの道みちなり。

わが身みに、善ぜんを行なひて、人ひとに善ぜんを勸すすむべし。我われが身みに惡あくを去さて、人ひとの善ぜんを戒いさむべし。かくの如ごとくなれば、人ひと從したがひ易やすし。是これ、己おのれをたして人ひとに施ほすなり。是これ亦また、恕じよの道みちなり。

人に交るには、自反を主とすべし。自反とは、自らに反るなり。人を咎めずして、我が身に立ちかへりて、善を己に求むるを云ふ。人われに従はず、我に背ば、わが過をせめて、人を咎むべからず。人に求めずして、わが身に求むべし。わが身を省みて、過なくとも、わが行の、未だ至らざる故と思ひ、人をせむべからず。怒り誹るべからず。是れ、自反なり。自反は、身を修め、人に交り、世に處る要道なり。自反のこと、前にも既にいへり。又、繰返していふなり。

凡そ、人に交るには、言も貌も、禮を篤くすべし。人の言を咎むべからず。もし、止む事を得ずして人の過を糺さば、禮義を以て、其の道理を眞實に伸ぶべし。怒りて、言を過し、無禮をなすべからず。

古人の言に、天下皆非なるの理なしといへり。此の言、よく體認すべし。世の中の人のしわざ、わが心になはすとも、皆、僻事にてはあらず。何事ぞ、故ありてかくあるべしと思ひ、妄に、人を咎むべからず。わが心にあしと思へど、又、さなきことあり。故ありて、なせる事には、過ならざることあり。又、かへつて道理にかな

へる事あり。わが心、必ず、道理の寸尺の矩になるべからず。わが心にあしきと思ふとも、妄に、人を責め誹るべからず。愚なる人は、人情事變をしらす。人のなすわざ、心に叶はざれば、故ありと故なきを顧みず、妄に、人を誹り恨むる故に、恨むるも誹るも、義理にかなはざること多し。

人、われを誹らば、誹るものを咎むべからず。わが身に省みて求むべし。わが身に、一分の過あり、人われを誹ること十分なりとも、わが誤りより起りしことなれば、恨むべからず。わが過を責むべし。是れ、誹をやむる道なり。左もなくて、たゞ、人を咎め、人を恨みて、我に求めざれば、人の誹はやむべからず。

朋友の間、禮篤ければ、争ひなし。喧嘩口論は、必ず、無禮よりたこる。人に交るに禮義正しく懇懇なれば、人と我との間、滞なくして、和ぎ睦じ。人に交るに、無禮なるは、是れ、賤しき俗人下部の風俗なり。士の交にあらず。戒むべし。晏子が、人に交るに、久しくして敬ひしことを、聖人もほめ給へり。久しく交りて、互に心やすくなりゆくまうに、無禮をなすべからず。

人、われに無禮なりとて、わが恥辱にならざることは、咎むべからず。人の無禮を宥め恕して、堪忍すれば、わが心和平にして、樂を失はず。人に争はずして、無事なり。われに恥辱なし。古語に、忍過ぎて、事喜ぶに堪へたり、といへるが如く、堪忍して後は、喜びとなる。もし、人の無禮を咎めて、われよりも、また悪言を出し、無禮を行へば、人も、亦、怒りて堪忍せず。わが咎めしより、猶過ぎて、甚だしく無禮をわれに施せば、堪忍なりがたくして、即時に、闘ひに及ぶ。此の時に至りて、始めて、その禍をわそれて、堪忍するも、見苦し。たゞ、はじめより、禮義正しくして、人もし、無禮を行ふとも、わが恥辱にならざるほどは、堪忍して我より、また人を悪口すべからず。彼が愚なるに對して、怒をたこし、無禮を施せば、我も亦愚なり。古語に和なれば仇なし、忍べば辱なしといへり。言ふ意は、温和にして、人と争はざれば、仇出來ず。人の無禮を恕して、怒りを耐ふれば、人の怒りもたこらずして、わが身に恥辱なしとなり。しばしの間、怒りを耐へずして、人と争ひ闘ひ、人を殺し、身を失ふ。一朝の怒に、其の身を忘れて、其の親に及ばして、父母を患へしむ。不幸

の至なり。君父の大事に死ぬべき、可惜命を、かゝるよしなきことに棄つるは、至りて愚なり。忠孝の道しらすのみならず、武勇を心にかけてざればなり。死ぬること易く、死して道理にかなふことはかたし。臍下三寸を丹田と云ふ。人の一身の氣を、常に丹田に收めて、胸に集むべからず。是れ氣を收むる良法なり。人に交り、事に應じ、物をいふに、まづ、心を靜にし、また氣を丹田に收めて、物をいひ、事をなすべし。是れ、氣の本を立つるなり。本たてば、力ありて、道生ず。然らずして、氣逆りて、胸に集まれば、心動き騒ぎて、治まらず。此の時、ものいひ、ことをなし出せば、力なくて、必ずあやまり多し。學者、身を修めんと思はひ、心を平にし、氣を和にすべし。氣を胸に集めずして吐き出し、丹田に收むること、術者の言に似たりといへども、よく習ひなせば、甚だ其の驗を得ることあり、物をいひ、わざを勤むるに、氣を收むる良法なり。人、われに無禮なりとて、咎むべからず。愚なる人か、或は、酒に酔ひたる人は、在人と同じければ、堪忍したりとて、聊恥辱にはあらず。かれに對して、怒り争ふ

は我も亦愚なり。と云ふべし。敵對すべからず。

小人の、我に對して、僻事をいひ行ひて、論しがたきは、すべきやうなし。もし、小人にたてあひて、我が顔色と言語とを烈しくし、怒り争ひて、其の是非を言ひきかせても、かれ素より賢からざれば、きくわけず、かへりて、いよく怒り争ふ。かくの如く、かれと怒り争へば、我も亦小人なり。いよく、わが身を慎み修め、顔色を和らげ、言を順にして、道理を言ひきかせ争はざれば、彼もし、すこし人心地あらば、自ら其の非を悟るべし。かれ悟らずとも、わが心法に害なし。

人に交るに、小人としらば、其の人を恕して、彼と善惡を争ふべからず。また小人としたれども、甚だ隔てなく咎めざれば、小人我を害せず。

凡そ、人に、善を教へて行はしむるに、其の人の生れつきたる所につきて、勸め行はしむべし。若し生れつかず、その人の不得手にて、心になきことを、強ひて責め勸めても、終に從がはざれば益なし。必ず我が心の如くにせんと思ふべからず。凡夫の心は、たのもしげなし。親しみ厚けれども、變じやすし。今、親しむといへ

ご、後を保ちがたし。人の心を頼みて、あやまつことなけれ。

凡そ、人の心の同じからざるは、その面の如し。世間の人ごとに、各心かはれる。故に、人のなすわざ、わが思ふ如くならざるは、人の心のありさま、かくの如しと思ひ、我が心になはざるとて、人を咎むべからず。これを堪忍して、いからず、ことばに出さざれば、無事にして、わが心やすく、人に障なし。是れ、世に交る道なり。君子は、自ら責て、人を責す。故に、善を己に求む。小人は人を責て、自ら責す。故に、善を人に求む。小人は、人を責ること重く、我が身を責ること輕し。人を愛すること薄く、わが身を愛すること厚し。君子は、然らず。人を責る心を以て、わが身を責れば、過すくなし。わが身を愛する心を以て、人を愛すれば仁をつくす。人に交る道は、厚きを主とす。厚しとは、人を責めずして、我を恨むるを云ふ。如此すれば、我が心和樂にして、人を恨みず。人も亦、我を恨みずして、したがひやすし。薄ければ、其の反なり。人のあやまりを厳しく責むれば、子弟の輩も、恨みふかく、背さやすし。況んや他人をや。

世には、愚なる人多し。世に交るに、わが道理を専らに立てんと思ふべからず。我に道理あり、人に非ありとも、人と争ふべからず。人に十分の誤ありとも、人にも少しは道理をつけ、少しは人に負けて、人に勝たんことを好むべからず。かやうにすれば、人と争はず。われと人との間和して、人の心を失はず、無事にして障なし。明月の玉にも、瑕なきこと能はず。過なき人、何ぞ、今の世にあらんや。今の人、人の小過あるをみて、其の人を賤しめ、少し短なる所あれば、長する所あれど、言ひ墮し、棄て、取り用ゐず、愚なるかな。聖人は、過なし。聖人を以て、人をのぞまば、世に人なかるべし。人の過を責めて、わが過をしらざるは、愚なるかな。是れわが身を省みざればなり。もし、われを省みば、我が身にも過多かるべし。わが身を省みて、我が過を責めば、人の過を責むるには、暇なかるべし。我が田の草の多きをば、其のまゝ置きて採らず、人の田を奪るに、古人もたとへたり。

君子は、禮儀を専らにして、争なし。争は小人の事なり。小人は、人に交れば、わが才智藝能など、すべて、我が身に能あるを以て、人に誇り争ふ。是れ、禮儀の道

に非ず。獸の角と牙とを以て争ふが如し。争はざるは、人と交るの道なり。凡そ、節義を守り、武勇を行ふは、進みて人に先だつべし。其の外の事は、人に先だつず。少し人に後れ、少し人に負たるが、争なくして、禮にかなひ、其の上、禍なき道なり。

善人に交れば、日々に善言をきき、善事を見習ひて、益あり。悪人に交れば、日々悪言をきき、禮行を見習ひて、損あり。交る人撰ぶべし。古き諺に、朱に交れば赤し、墨に近づけば黒しといへるが如し。正直なる人に交れば、わが心に慎み出来、我が誤りをききて益あり。われに諂ふ人に交れば、諫めをきかず、わが心に從ひ譽むる故、わが心怠りて損あり。たとへば、味よき酒食を、多く飲み食へば、病起り、苦き薬をのみ、熱き灸をすれば、病癒ゆるが如し。

愚なる人は、情剛くして、論しがたく、義に移りがたし。かゝる人に對して、争ふべからず。我が身のふるまひだに、わが心になはざること多し。何ぞ、他人のしわざ、わが心になはんや。人のわざの、我が心になはぬは、恕すべし、答むべからず。たゞ、我が身を省み、わが過をしりて改むべし。

人の生れつきは、各同じからず。得たる所あり、得ざる所あり。これに得たりといへども、彼に得ざる所あり。何事も、一人の身に、よきこと備はれる人なし。其の人の得たる所を用ゐて、得ざる所を責むべからず。一事よきことあらば、取り用ゐて、其の餘のよからざるを咎むべからず。わが身を省みば、得ざることも、亦多かるべし。もし、人の得ざる所をせめて、得たる所を捨てば、天下に用ゐるべき人なく、交るべき人なかるべし。得たる所を取り用ゐ、得ざる所を恕して、責めざれば、天下に廢れる人なかるべし。人に交るにも、かくの如くすれば、人の恨みなし。

人の得たる所を以て、得ざる所を信すべからず。一事得たりといへども、他事には得ざることもあり。又、得ざる所を以て、得たる所を疑ふべからず。一事得ずといへども、他事に得たることもあり。我が得たる所を以て、人の得ざる所を誹るべからず。是れ、恨をこる道なり。

不智不才の人といへども、必ず、勝れて得たる所あり。智者は、其の得たる所を取りて、得ざる所を恕す。故に、天下に廢る人なし。たとへば、良醫の藥を用ゐるが如

し。いかなる賤しき草にも、よき能あれば、とり用ゐる。大匠の材を用ゐるが如し。直なるを柱とし、反れるを梁として、材を棄てず。

古語に、善を嘉して、不能を憐むといへり。人の善事は賞翫し、得ざることをば憐みて、責むべからず。是れ、君子の心なり。

高位の人に對すとも、其の勢に屈し諂ふべからず。又、品下れる人に對すとも、侮り輕しむべからず。孔子の、大人を畏れ給ふは、其の位を敬ひ給ふなり。孟子の大人を輕んじ給ふは、其の勢に屈せざるなり。聖賢の道、並び行はれて、相背かず。

共に、萬世の師なり。

人に交るに、贈物を以てするは何ぞや。是れ、心の愛敬を外に表し行ふ禮なり。贈物を用ゐざれば、心にある愛敬の誠を、外に表すべきやうなし。贈物を用ゐるは此の故なり。是れ、人に交るの道なり。古へ、神に仕ふるに、蘋藻の進物あり。是れ、潔き水草を以て、神に供ふるなり。はじめ、師に見ゆるに、束修の禮あり。是れ、贄を待參して、師を敬ふなり。神に事へ、人に交るに、かくの如くならざれば、其の誠